
夢遊病

京理義高

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢遊病

【Nコード】

N5064G

【作者名】

京理義高

【あらすじ】

大学生である京理義高は、ある日同級生である高橋昇の自殺を知らされる。小さい頃からまれに開花する読心能力が彼の葬儀の日に開花してしまう。両親の挨拶では高橋昇のことを自殺としているが、疑いが増幅し、調査を開始する。しかし、一人での調査が心もとないと感じた義高は『美辞麗句探偵事務所』に依頼をするが、個性的な探偵ケンジと助手の亜紀との出会いがあり、きっかけでアルバイトをすることになった。数々の連続殺人事件に巻き込まれる。※人称表現は小説の形になっていませのでご注意ください。

1. 幻想（前書き）

自費出版した本文内容になります。

1. 幻想

1

すべてが霧がかったようで、大げさでもなく世界観、若しくは感覚さえもはっきりとはしない。

土砂降りの雨、空は重厚な雲で覆われている。

辺り一面は広大な草原であり、遠くの方で、人が羊を連れて歩いている。どのような人種なのか定かではない。羊たちは雨を身体に受けて、ふわふわの体毛が肌に張り付いている状態でもお構いなしに、はしゃいでいるようである。

視界の中央部には道が蛇行しながら、ある建物の門まで続いている。

瞬間移動のように次のシーンに移った。

門の中はギリシャ神話を髣髴させる宮殿があった。ただ、外壁は時間の流れと自然の摂理の相互作用により廃屋となり、石で構築された屋根は半分以上が破損している。長い年月放置されたために、カビの臭いが漂っている。

時間が滞っている。否、実はものすごいスピードで時が進んでいるのに気付いてないのかもしれない。定かではない。

過去の遺産となった建物の中央部には、この宮殿が建てられて、時が立ち、全体が健在であったころまで全体を支えていた柱であるかと錯覚したが、よく見ると少女なのか少年なのか、それとももっ

と大人なのかもわからない人間が立っている。人形のような姿だ。

雨に濡れて、金髪の長い髪は顔にべったりと張り付き、顔色は透き通るような白さであり、黒い毛皮のコートは水分を吸いきれず、水滴が地面に落下している。それを拭おうともしない。

ただ呆然と立ち尽くし、生きているのかさえ感じとれない、それがなぜか美しい顔であった。

「あっちの世界と、こっちの世界はどっちが楽しい？」

目先の人物が言葉を発した。硬直している自分がいた。声は少女だった。

「わからない」

やっと絞り出した声で伝わったのだろうか。心の中で思っているだけである可能性もある。自分の声が発信されているのか、心か判別できなくなっている。

人形のような美しい顔に、テレビ撮影用照明があたっているように見える。そこには、今直ぐに目の前から消えていってしまうのではないかと思う程の幻想性がある。

「それなら一つの世界を生きて楽しまないとね」

美しい少女は満面の笑みで言った。迷いは一切ない。

すべてがどうでもよくなった。気分は高揚し、気持ちがよくなくなった。

だが、爽快感は長くは続かなかった。意識は正常に戻りつつあり、本来の世間を呪った自分の心が蘇ってくる。

朦朧とした意識の中、宮殿が日本式の部屋の一室に変わった。ここは自分の家の庭で、深夜だった。両親が寝ていたことに気が付いた時、救われた。

現実に存在しているような世界の幻想、あるいは夢を見るとき、感情だけが曖昧模糊としていた。歩いている最中でもふと違った世界にいつてしまう時があった。それは、予想が付かなかった。精神のバランスを保つ手段ならいくらでもある。罪悪感はない。精神安定剤や睡眠薬やアルコールの摂取、外界を排除したひきこもりや虐待いじめのトラウマをもった人のテレビ特集を傍観し、明日の食料を心配する難民及び戦争ですべてを失った人の自伝、余命のある体を持った人のエッセーを読書等。苦境に立たされている状況と比較する。人間は複雑にできているのだから。自分は時として偶然幻影を見る体で、自覚のないストレスから開放されているのだから。それは、日を増す事に収束してきたが、いつも違った形で現れたとしても。

なのに、なぜ??

いつも遠くを見つめている空ろな目、気持ちが入ってない会話のキャッチボール、眠そうであり生きているのかと心配される位の覇気。

比率で言えば、半数以上の人が敬遠し、二十五パーセントの人が心配という感情を被った諦めた態度で接し、残りがあぶないと除外しようとする人間たち。自分はオタクでも特殊な薬物をやっている

わけでもない。

人は特別な力と英知を崇拝するくせに、人と違う感性若しくは情緒不安定さをもつ人を除外もする。矛盾だらけだ。学校での教育とは平等な人間を作り出すための、ある種厚生施設である。尖ったものがいれば更生し、有り余るエネルギーをもった尖ったものは学校の権力に抑えられ、のろみである、太っている、顔が不細工であるといった外見要因をもった人間に、暗い、オタクである、行動が拳動不審であるといった性格をはみ出しものと扱い遊び感覚でいじめを行う。こりごりだ。いじめている側の標的となった人間への陰口、いじめられている人間の精神的なトラウマ。どれをとっても生きていく希望がない。自分はニュートラルな人間であり、小さな争いを避けて必至であつたけれど、今後生きていく上で、理不尽な圧力を、社会という世界に出て、大人という態度で劣っている誰かに危害を加えるために誰かに協調していくことも、劣っていると評価されて圧力に耐えることも、すべてを我慢して自分という人格を殺して生きていくこともすべて全うな人間の生きていく社会ではない。

生きている世界が他人より多い分、自分の生命力は二分の一に軽減されているのだろう。結論は簡単だ。

一つの世界に生きることが出来る手段を実行にうつせばいい。

思い通りにいかない世界よりも、空虚だが、常に幻想的な世界で生きるほうが正しい。

早く楽になろう……

2. 同級生の葬儀

＊

「昇はいつも自分の世界で生きていました。会話するにも全く違う話題を発してきたり、私にも心を閉ざしていました。特に最近は大学に通学する頻度も低くなり、自分の部屋に籠りがちになっていました」

自殺した高橋昇の母親である高橋文子は彼の人物像を警部に証言した。息子の死に対して臆することはなかった。なぜならば、死体の処理を請け負ってもらうのが主な目的であったからだ。

「自分の部屋で睡眠薬を大量に摂取し、自殺したということでしょういいですね？」

背の高い、顔ののっぺりした警部の近藤明彦はいった。文子は頷いた。

「ただ、精神が病んでいたとはいえ、致死量を超える睡眠薬を担当医師が容易に渡すのかね？」

文子は神妙な表情で答える。

「一週間前のことですが、昇が近くのコンビニに行っている間、部屋の掃除をしようと中を除いてしまいました。その時に、白い錠剤を使い古しの空き瓶ビンに貯め込んでいるのを見たんです」

「それが、死体の近くに置いてあった瓶ですね？」

「はい。恐らく服用せずに保存しておいて、また時期がくると担当医師から睡眠薬の錠剤をもらっていたのだと思います」

「計画的に自殺を行おうとしていたのですね。その他言っておくことはありますか？」

「はい、後になって少々勝手に入るなど怒鳴られたのですが、私は掃除もせずに部屋から出ましたし、退室してから十分ぐらいいしてから昇が帰宅したものですから、なぜ入室したことがわかったのか……」

「奥さん、簡単ですよ。部屋のドア近くに黒いシャーペンの芯が転がっていました。そして、ドアを開閉する軸となる金具にも黒い芯の後が付着していた」

「はあ、それでなぜわかるのですか？」

近藤明彦は得意気に笑おうかと思ったが状況を読み、無表情で答えた。

「つまり、誰かが進入したら、黒いシャーペンの芯が折れる仕組みになっていたのでしょう。まあ、それがすべてだと確信はできませんけどね。人の香は意外と残っているもので、外から帰ってきた時に敏感になりますし」

なぜそこまでして他人の進入に拘っていたかは、文子も近藤明彦も自殺の準備が露呈しないようにしていたのだろうと結論付けた。

事情徴収は早々に完了し、高橋家の両親は、綺麗な体のまま見送りたいという要望から、死体解剖をしないでほしいとお願いし、警察側も事件性がないと判断し、その場は閉じた。

高橋昇は京理義高と同じ大学に通う三年生の二十歳だった。昇は大学へ実家から登校していたし、義高が大学通学のために住んでいる横浜市のアパートから、高橋家はさほど離れていない。義高の元に昇が死亡したという知らせが来たのは七月十一日だった。二日前にこの世を去った昇。ちょうど大学の夏休み前であり、上半期テスト前でもあった。

義高にとっては悪い噂とも思われた知らせはアパートのポストに投函された一枚の葉書きによって明確となった。通夜の日程が事務的に記載されていた。

通夜は七月十三日、近くの区民会館にて行われた。曇り空で、湿った空気が漂うなか、黒の衣装に身を包んだ昇の親戚、同級生、高橋家につながりのある人達が大勢集まった。元々彼は引っ込み思案でありながら、ロックバンドが好きで、コンパで誰かが酔っ払っていた時に、ふと将来はアーティストになりたと自己紹介していた。よって、これほどの人が参列してくれたから、昇は幸せだったのだと思う。義高はひっそりと参加した。着慣れない黒のスーツにネクタイが妙に肩を強張らせ、照りつける太陽が鬱陶しかった。

あいさつは喪主を務める彼の父親高橋孝造が行った。こういう場面でも物怖じせず、しっかりとした口調だった。会社では役員クラスである。

「まだ昇が小さかった時のことです」

思い出話を語る口調には悔しさは伝わってきたものの、義高には妙に淡々としていて、息子がこの世から消去することが当たり前といった心境が漂っていたように見えた。

「将来有望な人材になると信じておりました。それなのに……」

語尾を震わせながら発音し、瞼を手のひらで覆った姿を見れば、流石に昇の両親が気の毒になってきた。一時疑念をもった他殺は、完全に引き裂かれ、自殺が証明された。但し、義高はすべてが終わっても断定できなかった。昇の自殺という行為を。両親が、父親か母親が嘘を付いていると感じた。

義高には、己の感性が信じがたいと思われるのが当然であるものの、人の心が少なからず読めてしまう。

正確には、相手の嘘が見破れるのだ。都合良く読めるわけではなく、時間的周期のなく、ランダムで人の心が義高の意識に介入してきた。それはまるで偏頭痛のように突然だった。その瞬間の閃きを、相手に真実として言葉で伝えたことはない。

結果論として、知っている範囲でいえば、義高が読んだ人の心は外れたことがなかった。

3. 両親の離婚

人の心を読んでしまうという潜在能力に目覚めたのは、五歳だった。生まれつき記憶力は悪いと自覚していたので、五歳の時の記憶が残っているのはある重大な出来事があったからだ。

その頃、両親との間には、離婚話が立ち上がっていた。義高には話しの内容についてはまったく理解していなかったが、離婚という道を選ぶだけの決意を両親がしていることは、雰囲気を感じ取っていた。両親が不仲であることぐらいは幼年期の子供でもわかることだった。

義高の父であった良三は、母の久美子に対して何度もこう言っていた。

「仕事が忙しいんだ。会社に泊まりこみでやらなければいけない仕事だってある。なんでわからないんだ」

そして久美子は決まって、

「なら、なぜ電話ぐらい寄こさないの。いくら忙しいと言っても、電話する時間ぐらいはあるでしょ」

繰り返しだった。会えば挨拶のようにその言葉を交わしていた。

ある日の深夜、いつも通りに両親が口喧嘩をしていた時、起きてしまった義高は布団から起き上がり、二人の入る部屋のドアを空け、話に割り込んだ。口喧嘩をしていた様を目前にしても臆する感情はまだ持ち合わせていなかった。

「どうした、義高？」

良三と久美子は眼下に隈があり、驚いた表情で義高に尋ねた。義高の登場でその場の空気は一瞬納まった。両親は気まずそうに自分の方を見て、頬が強張りながらも必死に笑顔を作っていた。だが、嵐の前の静けさでもあった。

「ごめんね、大きな声をだして。もううるさくしないから安心して寝なさい」

久美子はそういうと、義高を自分の部屋に導こうとした。

久美子の手が義高の腕を掴んだとき、急激に言っておかなくてはいけない言葉が脳裏を駆け巡った。否、もう既に言いたいことがあって、二人の口喧嘩で起きたのではなく、その瞬間に言っておかなくてはいけないことのせいで起きたのかもしれない。義高にもその辺の記憶は曖昧だった。

ただ、五歳という年齢のせいでできるとすれば、義高には言いたいことを制御するものがなかった。

唐突に、

「父さんは嘘をついているよ。別のお母さんがいることを隠しているんだ。」

と告げた。眠気まなこで義高はその場を離れて自分の部屋へと向かった。

両親は義高の言葉を聞いて漠然としていた。その後、両親が離婚した経緯を知ったのは小学校六年生の時だった。

久美子はあまりにも逸脱した義高の発言に耳を疑っていたが、すぐに良三への疑いに変わり、内緒で浮気調査の探偵に依頼をした。探偵に掛ければ、その辺の捜査はすぐに解決するらしく（携帯電話の着信で直ぐに相手の足取りは掴めた）良三の浮気は発覚した。相手は会社の同僚であった。今にして思えば月並みなことではあるが、不器用で面倒くさがり屋、それに加え誠実さが取り柄であった良三がそのような行為をしていたことが信じられなかったらしい。久美子は、夫の携帯電話を抜き打ちで探るような程愛情もなかったし、夫婦のベクトルが違った方向で交差しなくなってしまうのは誰にも止められない。久美子は良三を浮気相手から引き離そうともせず、二人は後腐れなく離婚した。良三は探偵にマークされている事も知らず、浮気相手と接触し、ホテルから二人で出てくる所を写真でおさえられ、証拠写真を探偵から提示されると、あきらめたように謝罪し、潔く家を去っていった。義高は五歳から母子家庭の一人っ子として育てられた。

その一件以来、本来愛情を注がれるべき時期に、母親は義高の事を少しずつ警戒するようになった。距離を置き、義高が成長し、言っている事と悪いことを区別できるようになっても、母親は義高に對し、腫れ物を扱う姿勢を崩さなかった。

ある意味、義高にはそのスタンスの方が楽だったのだ。両親の愛無しに育ったという捻くれた自覚はあったものの、それが生きていく上で支障にはならなかった。

模範のような昇の通夜は終わった。線香の臭いが体中に付着して

いた。義高には、仏壇に飾られていた昇の笑顔が写った写真を思い浮かべて、彼と過ごした思い出に浸るよりも、どうしても高橋家に両親に寄せる疑念が残った。彼らは嘘を付いている。

義高と昇はたまに遊ぶ友達という関係だった。彼とは大学にはいってから知り合い、性格はどことなく内に籠もっていたが、彼が言うには、中学、高校に比べればましだったらしい。すべてをさらけ出さないところが義高と酷似していて、気が合っていた。しかし、数年かの付き合いで、義高は一度も彼の心を読んだことはなかった。

パソコンの知識は豊富で、自分の部屋には二台のパソコンが置いてあった。唯一彼の内面を垣間見たのは、サイトで自殺について調べていたことだった。インターネットがあれば、どんなアウトサイドに属している事柄も調べられてしまう。

「昨日のニュースで、集団自殺が報道されていただろう。あれは、このサイトで知り合った男女らしいよ」

義高に話している口調が楽しげだった。

「でもサイトが閉鎖するのは、時間の問題だな。見られるのは最後になるかも……」

昇はサイトの掲示板を検索していたが、さすがに事件後、書き込みはされていなかった。義高は昇の精神状態は大丈夫か心配になった。彼は自殺サイトの閉鎖を心配していた。

今だに昇が死んでしまったことに悲しみはなく、涙も流れない。ある意味義高が心を読んだ高橋家の両親が抱いている心と五十歩百歩だと気が付いた。

軽薄な情が嫌になったが、後悔しないように義高は昇の死因について調べようと決心したのがすべての始まりだった。

4. 美辞麗句探偵事務所

義高の通っている大学は、全体的にイタリアの街並みを思わせる造りになっている。正午にはチャイムではなく、教会を真似て造られた五号館の屋根に聳え立つ鐘がなり、校舎は芝生がメインで、図書館の横には劇場場である。建物全体は山の上に作られたもので、敷地面積もどの大学にも見劣りしない。学食も大勢の大学生を相手に料理をつくるものであるから、安価な素材を使いがちであると思われるが決して味は悪くない。ラグビーサークル等の大柄な学生は、学食と持参のお弁当を同時に食すこともあった。さり気なくカフェのような休憩所もある。そこにはいつもお洒落な男女がたむろしている。

理工学部に所属している義高にとって、どの教科も、半分以上は日本語とは思えない言葉を使って講義が進行しているかのようだった。当然、できるだけ文系の教科をとって、暗記が中心のテストで単位を稼ぐ形に定着した。

江崎教授が担当している心理学の講義は好んで出席していた。単純に、江崎教授は他の教授とは違い、あくまで学生が理解しうる範囲で講義を進めていく。それ故、学生は疑問に思ったことが見つければ、質問がしやすく、なにを質問していいかさえ分からなくなってしまう状況を回避していた。講義内容から脱線する時も、相手に興味を与えるよう、様々な工夫を用意していた。

連絡掲示板には心理学の休講という文字が貼られていた。今日は上半期最後の講義で、大学へ江崎教授の話を聞かすために来ていたの得意さか消沈していると、菅野清が声を掛けてきた。Tシャツに、グレーのベスト、細見のジーンズにブーツを合わせている。

「おう、今日は心理学休みだろ」

わざとクールに低い声で話す彼は、ミステリーマニアである。古今東西のミステリー作家なり、作品なりを知っている。といっても義高自身、その分野の知識は明るくないので、本人がなんでも知っているというのは疑い深い、すくなくとも義高を驚かせる知識は持っていた。また、作品の探偵を意識しているのか、妙に低く声を発生する。

菅野と話すようになったのは心理学の講義がきっかけだった。菅野も江崎教授の心理学教授の話は気に入っていた。

「ああ、今日は帰ろうかな。心理学ないし」

「不良大学生だな」

「そういう菅野だって帰ろうとしているんだろ」

「よく見破ったな」

菅野が口を片方だけ吊り上げて微笑すると、義高は高橋家のことを思い出した。

「ちょうどいい。屋上でも行かないか」

「いいな」

なぜ今更屋上に誘ったのかを疑わない彼に、昇の他殺説を話すことを迷った。

十号館は校舎で一番高い建物で、その屋上での暇つぶしは学生の間で人気があった。そこそ高い山に作られた大学であるから、下方の平地である街や海までも見渡せる場所。夜はカップルが多い。義高ら二人が屋上に着いて、誰の姿も見なかったのは、皆が講義を受けている時間のおかげだけではない。偶然も手伝った。

「で、なんでここに呼び出したんだ」

「実はな、高橋昇のことなんだけど」

すべてを話した。義高自身の能力以外は正直に言っていると、菅野は興味津々に聞いていた。思ったとおりだった。

「証拠も何もないんだな」

「これから調べる。それには菅野の協力が必要なんだ」

「なるほど、面白そうじゃないか。俺はあまりあいつとは話をしたことはないけど、内に籠るタイプという印象が強かったな。というか、あまり大学に来ていなかっただろ」

「誰もがたいていはそう思うだろうけど、実際も同じだよ。大学はつまらないと言っていた」

「そうになると、当然自分が自殺しようと思っても、他の人に打ち明ける可能性は少ない」

菅野は煙草に火を付けると、ベンチに座り遠くを見つめた。この場所からは隣の東京都まで見渡せる。

「当然だろ。ぼくだって昇が自殺するようなそぶりを少しでも見せていたら他殺を疑ったりしないって」

義高の言ったことを無視でもしているのか、菅野は相変わらず渋い表情をして遠くを見つめ、煙草の煙を吐き捨てる。これもミステリー小説に出てくる探偵を意識しているのかもしれない。

よく考えれば、菅野のように理系の学生が古典ミステリー小説を読むのがなによりも好きだという大学生は珍しい。今の時代、理系のミステリー小説は存在するらしいのだが、義高らがこうしている間にも、皆どのようにお金をバイトで稼いで遊びにつき込むかを考えていた。遊びには恋も含まれる。あるいは、家とパソコンに半生をつぎ込んでいる昇のような人間。少なくとも義高の周りには二パターンの大学生が大多数をしめていた。環境からすると、趣味も性格もアナログ的な菅野の存在は貴重なのだ。

煙草を吸い終えると、菅野は携帯灰皿に入れた。

「彼の交友関係はどうだった？」

「あまり知らない。ネットでは何人か友達と呼べる人はいたらしいけど」

「面と向かって心の内をさらすことが出来なくても、ネット上では案外気軽に悩みとかを相談したりするらしいからな」

「うん、ネットが流行る理由の一つでもあるよ」

「いささか捜査には役に立ちそうな話ではない。彼自身もネット上

で話をしている相手がどういう人で、どこに住んでいるのかさえ把握しているか疑わしい」

「うん、そこら辺は確かにわからないことだらけだけど、とにかく、友達は少なかったと思う。昇から友達と遊んだ話はいつさいしてこのかったから」

菅野はその後、考えても進展が無いことを推理したのか、あるミステリー小説のトリックについて説明した。まるで関係性がなく、義高が今回の事となにかつながりがあるのか問うと、見事に口ごもった。頼りないとは思ったが、そこは無理もなかった。ただの大学生が一つの事件らしき出来事を捜査するなんて非力すぎる。高橋家に聞き込みに行く権利さえ与えられていないのだから。

家路を辿っている間、ずっと人材について考えていた。今必要なのは適切な推理ではなく、証拠を少しでも増やすだけの人材だった。

小さい頃、久美子が元夫の事を調べあげた探偵を思い出した。もう十五年以上も前のことになる。自分に心を開いてくれなかった久美子だけに、くわしくは分からないが、部屋には調査依頼の書類がいつまでも保管されていて、探偵事務所の名前もインパクトがあり、どこに事務所があることぐらいは知っていた。

義高の住んでいるアパートからさほど遠くないS駅から歩いて十分程度の所に位置する三階建ての雑居ビル。元はクリーム色だったと思われる外壁は長年の汚れが染み付き変色していた。空き部屋には、テナント募集という張り紙があった。よく今まで壊されないで残っていた名と思わせる佇まいだった。看板には

『美辞麗句探偵事務所』

5. 事務所内部

と書いてあった。独特の名称である探偵事務所は現在でも顕在であつた。

ビルの右側にあるさびれた螺旋階段を上ると、ドアはガラスばかりでスモッグがかかり、中を見ることは出来なかった。ただぼやけたガラスの向こうが漆黒の闇であることが義高を不安にさせた。義高はこんなことがない限り、絶対足を運びたくない場所だと思った。

ガラスドアを手前に引くと、薄明かりが点灯した。

入り口での出迎えはない。

すいませんと何度か声を掛けてみたが、返事は無い。

かまわず中へとはいっていった。中から柑橘系のいい匂いがした。内装は想像通り、古臭いどこかの事務所でわりと広かった。だが出窓が部屋のわりに小さくカーテンが閉められていた。外界から空間を遮断しきっている感じで、日の当らない部屋は義高に圧迫感を与えた。部屋の右端に設置されたステール製の棚には、驚くほど少ない資料ファイルがあり、その横にあるラックには沢山のCDやDVDが並んでいた。さらに横にシフトするとプライベートルームシアターのつもりなのか、大きなプラズマディスプレイモニターの下にDVDプレーヤーと、正面には背もたれにマージンがある二人用のソファが置いてあった。反対側には全身が映し出されるほどの大きな鏡があつた。それに比べると手前にある客用の椅子とテーブルは粗末なもので、まるでリサイクルショップで適当に購入してきたような代物だつた。

部屋の隅にはエレキギターとアコースティックギターが立てかけてあった。

義高はざっと事務所を見渡しただけでもう不信になっていたが、何度か人の所在確認するために、何度も呼びかけた。

左側に見えるドアの奥からようやく声がした。女の人の声帯だった。妙に気だるい声だった。

「はい。今行きますから」

まさか女探偵？

と義高の頭の中は疑問符で満たされた。

呆然と立ち尽くしていると、ドアが開き、白のワンピースを着た、髪の毛の長い女が現れた。黒髪で、まったく脱色の後もないなく、薄暗い部屋が一層黒さを際立たせていたが、薄化粧でも顔のつくりははっきりしていて、大きすぎない涼しい目、太めのしっかりした眉。唇のグロスが光沢を帯びて艶かしく、肌は美白だった。和風美人を思わせた。そのため暗い印象はなく、華やかに見えた。

「お客様ね、ちょっと待っていてくださいね。今コーヒーを入れるから」

よく通る声だった。その女は微笑むと、今出てきたドアに再度入っていった。香水の残り香があった。

やはり女探偵か！

疑問符が確信へと変化してきた。事情はどうであれ、事件の解決能力があればそれでいいのだから。

女がコーヒーカップを二つ持ってきた。

「どうぞそこにある椅子に座ってください」

義高は粗末な椅子に座ると、テーブルにコーヒーを置かれた。角砂糖とミルクの入った容器まであった。

「どうぞ飲んでください、ご遠慮なく」

事務的な感じがなく、人のよさそうな受け答えで、義高は緊張が和らいだ。探偵というイメージは、どうしても頭が切れる人、なおかつ冷淡で無駄がなく、依頼内容以外の話はまるで聞かないというものだった。それがいい意味で裏切られたことがなによりもうれしい。

「ありがとうございます」

義高は初対面だと、声はどうしても小さくなってしまった。元来義高の声帯は饒るタイプなので、他人は聞き取りづらい。

中学生の頃、音楽の先生が、自分の発した声は自分の耳で聞くと、他人が聞き取るものと違うということを教わり、早速カセットテープで自分の声を録音して聞いた。価値観、見解がごっそり変わるという体験をした記憶があった。カセットテープから聞こえて来る自分の声は別人だった。しかも義高が思っていた以上に変な声だった。義高はそれ以来、自分の発する声にコンプレックスを持っていた。相手が聞き返してくる場合もしばしばあった。

「で、今日はどんな用なの？」

飲んでいたコーヒを噴出しそうになった。距離をぐっさり縮小する態度は外見と合わない。義高は瞬時に口を塞いでかろうじてコーヒを喉に戻した。女はそんな様子は気にせず、義高が答えないので苛立っていた。

「誰かの搜索とか？」

女はいきなり友達口調で接してきた。態度の急変で落ち着きをなくしたのでは、余りにも間抜けに見られてしまうと思い、冷静になるよう勤めた。

「今日は事件の解決を依頼しに来ました」

「どんな事件なの？」

「友達が自殺したんです」

「ふーん、それが事件なの？ まあいいや、それで」

「でも、ぼくには友達がどうしても自殺したようには思えないんです」

確かに義高はここに来るまで、昇の自殺を否定することに対して、事件とは定義していなかったことに気が付いた。探偵事務所で依頼している空気が義高の疑問を事件にまで昇格させていた。

「気持ちわかる。ただ単に自殺と思いたくないのか、それとも疑

問点があるの？」

「疑っている動機を聞かれると正直困るんですけど」

「そこがかなり重要だと思っただけだね」

どうしても人の気持ちを讀んでしまう潜在能力までは言えない。ここが弱みだった。女は聞くだけ無駄と解釈してしまったのか、その後に質問をしなかった。早々に見切りを付けえしまうのも探偵ならではなのかもしれないと義高は思った。

「悪いことは言わないよ。ここの依頼金額は超高いし、君の名前は？職業は？私は亜紀」

微妙なタイミングで質問と自己紹介するなと思った。苗字はあえて聞かなかった。

「京理義高です。大学生です」

「義高君はまだ学生で、とてもじゃないけどバイトの給料じゃきついし、やめな。稼いでいる社会人とか、金持ちの家の坊ちゃんならいいけどね。君は違うんでしょ？」

金持ちとは見えないと思われていることは心外だったが、相手がどんな人にせよ、返答はこうなることは予測していた。どこにでもいるような大学生が、事件性もないものを、探偵に依頼している場面など聞いたことがない。しかし、義高は切り札を持っていた。

「残念ながら今頃はバイトもしていませんし、金持ちでもありません」

「じゃあ、なににも言う必要はないわね。今回はあきらめた方がいいわ。君のためにもならないと思うし。友達が自殺か他殺かが曖昧で心が晴れなくても、真実を知らないでそのままにしておくことが良いときもあるの。しかも、自殺を疑うちゃんとした根拠がないんでしょ。わたしは君の友達思いの優しい性格だってことは理解したから、今日はこれで……」

亜紀は義高がまったく引こうとしない、むしろ何か言いたそうな態度を見て言葉を窮した。第一印象から、亜紀は義高が粘着質のある性格だとは思っていなかったに違いない。

「今日はこれでさよならとは言えません。他にも、依頼がありました」

亜紀は呆れ顔で、少し面倒くさくなっていたが、とりあえず義高の話だけは聞こうとしていた。

「で、なにがあるの？」

「実はぼくをあなたの弟子にしてください」

「はあ、弟子って？」

亜紀は、弟子という言葉を自分の頭の中から引きずり出しているようだった。言っている自分も恥ずかしいとは思いつつ、義高は主張した。

「そうです。古臭い言い方ですが弟子です。といっても、ぼくには経験がありませんから、アルバイトって形で手伝いをしたいと思い

まして。けっしてアルバイト料は請求しませんから。給料はなしでお願いします。ただ、事件の解決だけは協力してほしいんですけど」

「アルバイトねえ。ここは基本的に暇だからなあ」

亜紀は上を向いて考え込んでいた。給料なしでのアルバイトが効いているなと義高は心の中で微笑んだ。

「ちょっと待っていて」

そう言うと、立ち上がったドアの向こうにある隣の部屋へ入っていった。何かを調べるのだろうか。アルバイトというتماず面接があるパターンが多い。

「ケンジ、ねえ起きて」

6. 美形探偵による面接

隣の部屋から亜紀が男の名前を読んでいた。事務所にはもう一人いたのだ。しかも、亜紀は慣れ親しんだ口調呼び捨てで呼んだ男。――これは何かある。

「なんだよ、眠い」

透き通る低い声だった。ベットから起き上がったのか、スプリングがうねる音がした。

「お客さまが超重要な依頼をしてきたの。早く話を聞いてあげて」

「超重要？　なんだそれ」

「いいから、早く」

亜紀にそう言われると、ケンジは無言で身支度をしていた。アルバイト雇いのことを超重要という表現にされると、滑稽だった。ケンジの命令でドアが閉められた。

それから二十分待たされた。その間、どんな男が現れるのかを考えていた。

ようやく義高のいる部屋へ向かう足音が聞こえた。荒々しく、いかにも不機嫌といったことが伺えた。その様子から、義高は再度緊張した。ドアが開かれた。

「おまたせしました。この人がケンジでこの事務所を統べる探偵

よ」

現れたケンジは、現実を忘れさせる風貌だった。ビジュアル系バンド顔負けのサラサラした金髪、長さは後ろ髪が肩にかかるぐらいで中分けにし、髪先には強めのシャギーがかかっていた。細身の体にダークスーツ、グレーのYシャツにノーネクタイ。先細の黒いブーツは綺麗に磨かれていてズボンの中に押し込んでいて、顔はヨーロッパ系人種と日本人のハーフのようで、顔の丸い輪郭とは裏腹に、目鼻立ちがはっきりしていた。肌も透き通るように白い。目の色が黒いことだけが、かろうじて日本人だと思わせる要素だった。とても寝起きの人間には見えない。

慌てて義高は立ち上がり、名前を名乗った。彼の目線は義高より約十センチ上にあった。

「なんだ、男か」

「まあ」

気付くのが遅いので、義高は間拔けな返事をした。なんだはないだろうと思いつつ、ケンジが座るよう促したので従った。

ケンジが義高の話を聞く姿勢になっているのは、亜紀が言った超重要な依頼という言葉が支えているとしか思えなかった。ケンジは椅子に浅く座ると、足を組んだ。信じられない程リラックスしていた。

「で、どんな話があるんだ？」

仕事モードに入っただのか一語一句に威圧感があった。ケンジが本

物の探偵なのかと疑問が生まれた。

義高は先ほど亜紀に説明した依頼をケンジに話した。亜紀とは違って、リアクションがなく、旨く伝わっているのかわからなくなる程だった。話終わった後、間をたっぷりおかれて義高は手から汗がにじみ出てきた。

「けっこうあるんだよね」

ケンジの投げやりな口調に義高は体が硬直した。偉そうな態度をとられているにも拘らず、義高は腹を立てる余裕がなかった。

「給料なしで働くって奴に限っていい仕事をしない」

ケンジはポケットから煙草を取り出し、ジッポで火を付けて吸った。

義高は夢中になって懇願していた。はっきり言って、自分がこれだけ必死になって頼み込んでいることに驚いた。もしかしたら探偵への憧れが漠然と自分にあるのかもしれない。

「もういいんじゃない。バイトで雇ってあげれば」

亜紀は義高のことを哀れむように話しに割って入ってきた。

「しょうがないな。じゃ面接をするか」

「面接？」

「普通の面接じゃないけどな」

ケンジは説明もなく立ち上がり、付いて来いと言って外に出た。義高はわけもわからずケンジの後を追った。

太陽光に当たると、ケンジの姿は光っているように見えた。面接とは言っても、探偵だから、早速何かの捜査だと思い、義高の心は躍った。

『美辞麗句探偵事務所』から狭い道路を進むと、直ぐに大通りに出た。わりと車の通りも多く、途中飲食店と中小企業のビルが数件立ち並び、十時路にある信号を渡った。そのまま直進すると駅前に出た。歩いている最中、何度もすれ違った女が義高の方を見ていたので、自意識過剰な性格から目をそらしてしまっただが、実はケンジの方を見ていたことに気付いて義高は悲しくなっていた。

駅内から電車を降りた人たちがわき出てきた。その様子を気にするわけでもなくケンジは立ち止まった。何人かは通行の邪魔だったので怪訝な顔をしながら彼を避けた。彼がその中の一人を睨み返すと、相手は下を向いて足早に立ち去った。義高は、これではただのヤンキーと変わらないなと思い苦笑いした。

「ここでもいいか」

ケンジは周りを見渡しながらそう言った。

「なにをするんですか？」

「ナンパ」

「な、ナンパ？　をするんですか？」

ナンパとアルバイトの面接の関係性がまったく理解できなかった。遊びで来ているわけでもない。否、ケンジという男にとってはそれも遊びに過ぎないのではないか。

「そうだ。とぼけた顔するな。誰も寄ってこなくなるぞ」

「はあ」

「試験ナンパとも言う。これは始めて会った人にいかに接して、話を聞いてもらうか。そしてこっちのペースで話を進めて、相手の心情を聞き出すか。遊びじゃないからな。交渉能力を試すためにやってもらおう。探偵にとって重要なのは事件を推理するよりもまず、証拠をいかにして的確に掴むかが重要なんだ」

義高はようやくケンジのやろうとしている意図を理解した。

「お前は人見知りしそうだからおまけしてやる。とりあえず時間は二時間。俺はあっちに見えるファミリーストランで待っているから、時間内まで連れてくるように」

ケンジが指をさした方向にはジョナサンがあった。

「どんなネタで誘ってもいい。男でも女でも構わない。ただ警察沙汰になるような勧誘の仕方だけはしないように。後で訴えられても、俺は力を貸さない、がんばれ」

肩をポンと叩くとケンジは立ち去ってしまった。

義高は、今までナンパをした経験はなかった。大学ではサークル

活動もやっていないし、新入生を勧誘することに対しては自身がなかった。ケンジの言うとおり、義高は重度の人見知り体質で、初対面で、まともに他人と喋ることさえ難しい。しかもナンパなんて一生やらないものだとは決め付けていたから、義高は心の中は混乱にまみれた。

立ち尽くすしかなかった。駅からは次々と人が現れては消えていった。放課後、仲間同士でこれから遊びに行く高校生は義高の存在を無視して、ハイテンションで話し合っていた。

どうしたものか。ようやく冷静になってくると、誰を、どのように誘うべきかを思考した。まず、男を誘うのは止めようと決定した。どうみても、ホモか、宗教関係の勧誘、あるいは怪しいぼったくり勧誘と思われるのが落ちだからだ。

かといって、はたして女が自分の誘いに乗ってくるのだろうか。正直外見に自身を持ったことが無い。せめてケンジが近くにいて友達といえど成功率は飛躍的に上がるのだが、ハンディだらけからのスタートだった。

最初に声を掛けた相手は義高のことを旧友だと思っていたらしく、違っていたことを指摘すると直ぐに立ち去っていった。

一時間たって四人に声を掛けた。その中でいかにも遊んでいますといった感じの女に声を掛けた。義高がカッコいい友達がいるからと誘うと、

「うそー、マジでカッコいいの？」

嘘は付いていないと言った。

「どこら辺にいの？」

と返してきたので、ケンジのいるジョナサンの名前を言うと、女とは思えない剣幕で

「なにそれ、超嘘くさい、ありえない。うざい、ぶっちゃけキモいんだけど」

まくしたてて、義高の全身を軽蔑した視線を投げかけたまま消えていった。そこまで言われると、なにも返す言葉も見つからず、義高の背中から汗がにじみ出た。

成果はまるでなかったが、義高は話しかける勇気が湧いてきた。

それから三十分たった。ペースもあがって五人に声を掛けた。同じように立ち止まって話を聞いてくれる人はいなかった。残り三十分。

あせりが襲ってきた。義高は挙動不審者にならないよう自分をコントロールするのが精一杯だった。

優しそうな女の子が来たので、声を掛けると、目尻に皺を寄せて義高を避けた。ナンパしている義高の姿を見て、茶髪三人集の男たちがそれをさかかに爆笑していた。太陽の熱が容赦なく義高の体力を奪っていった。

残り十五分。

「あの、すいません。近くにファミリーレストランはありませんか？」

義高は三十代位の女の人に聞いた。相手は近くにあることを知っているにもかかわらず、丁寧な場所を教えてくれた。いけるかもしれないと感じた。

「ありがとうございます」

女の人はにっこりとほほえんでいいえと返してきた。ここで話を終わりにしてはいけない。

「お礼いってすいませんけど、実はぼく目が殆ど見えなくて、さっき盲導犬がここで逃げてしまったんです。直ぐに探したいところなんですけど、ちょっと休憩してから見つけようと思ひまして。できればそこまで連れて行つてはくれないでしょうか？」

盲導犬は小さいころから逃げないように訓練されていることも義高はその時知らなかった。

「そうなの。大変ですね」

もう一押しと思った義高は、必死に目が見えないことをアピールした。すると、女の人の表情が柔らかくなった。

「わかりました、では行きましょう」

目が見えないのに杖も持っていなかったこともあり、義高の言っていることが嘘だとわかっていたかもしれないが、女の人は義高の手を引っ張り、レストランまで連れて行った。義高は安堵の気持ちで包まれた。

「着きましたよ」

入り口を手探りで確認する仕草をするなど、細かいところを怠らないよう心がけた。

「本当にすいません。中まで案内してくれませんか？よろしければお礼がしたいので」

今まで快く引き受けていた女の人の表情は曇った。だがここで引くわけにもいかない。義高は一緒に来てもらわないと死んでしまうのと同等の気迫で頼んだ。

結局、女の人は中まで付き合うことに決めていた。クーラーの効いた店内に入ると体が蘇った。

ウェイターがお客様は二名様でよろしいですねと尋ねてきたとき、思わず微笑んでしまった。義高が、待っている人がいるのでと言うと、女の人はえっと声を漏らした。義高はかまわず女の人の手を引いてケンジを探した。

金髪の探偵は、窓際の席に座っていた。目立つから直ぐにわかった。でも、そこにはもう一人女の人が出て、よく見ると亜紀だった。二人は楽しそうに話し合っていた。

義高は抵抗している女の人を無理矢理連れてくる状態で二人の前に立った。ケンジと亜紀は六本木ヒルズの話をしていた。

「ケンジさん連れてきましたよ」

そう言って女の方を向くと、彼女はケンジに見とれていた。抵抗

していた力はまったくなくなり、手を離すと微笑んで、ほほが赤らんでいた。漫画のようなアクションで、義高はまったくどいつもこいつもと、心の中で呟き呆れていた。

「お忙しい中すみません。こいつは俺の友達なんですけど、女好きで、あなたのように綺麗な人を見ると、どんな嘘を使ってもナンパしようとするんです」

「いやですわ、綺麗だなんて」

ケンジの間違った義高の説明と、女のいやといいながらうれしうにしている態度に義高は開いた口も塞がらなかった。もうそこにはさっきまで義高と接している時に見せた早く帰りたいという態度はなくなっていた。楽しそうに会話して、適度な時間を見計らってケンジは失礼のないように女の人を帰した。どう見ても名残惜しうだ。

「義高君、なかなかやるじゃない」

亜紀がほめて、義高は嬉しがる暇も無く、

「時間の掛かりすぎだ。しかも目が見えないなんて反則技使うより、普通に誘えないのかよ」

確かにくやしいけどケンジなら普通に女を誘って話をするぐらいは朝飯前だった。

「どんなネタ使っても良いって言ったじゃないですか」

「そんなネタ、お前しか使わないだろうな」

「ひどい」

少しは褒めてくれてもいいだろうと義高は思った。自分にとってはこれで精一杯を考えた行動なのだから。

「まあ、これで義高はケンジの弟子になれるわけだから」

「ギリギリの合格ラインだったけどな。よし、二日後から俺の事務所に来い」

「いや今日からお願いします」

「駄目だ。自分の顔を鏡で見てみる。青白くて病人なみだ。今日は帰ってゆっくりしろ」

義高は安心したのか疲労が急に出てきた。体力が現実を起こった事実を追いついてこなかった。義高は動こうとした時、足元がおぼつかなかった。

「わかりました」

義高は、運ばれてきた氷の入った水を一気に飲み干すと、金髪探偵とパートナーに別れを告げた。

今日つまり一九九九年七月十四日、アルバイト探偵が誕生した。

7. 第1の殺人

2

森明子は仕事帰りで多摩川沿いの河川敷を歩いていた。タイトなジャケットにパンツスーツを着た明子のような姿は、この辺りでは珍しい。自宅から五十分の大手メーカー会社に勤めて三年間。彼女にとってはとても長い期間だった。

それは、学生時代で過ごした三年間とはまったく違った部類の長さであり、事務という仕事に生きがいを感じたことはなかった。男社員に少しでも持てはやされると、先輩の女社員には冷たくされ、陰口を言われた。御客の対応はたちの悪い人であっても、笑顔を絶やしてはならなかった。そのような境遇であっても、持ち前の明るさで仕事と人間関係においては懸命に対応した。仕事後友達と飲みに出かける時間が大切だった。明子はそこで日ごろのストレスを解消していた。

来年の春には結婚をする相手がいた。友達の紹介で彼と出会ってから一年の月日が流れていた。結婚を決意するには少し早かったように思える。このまま仕事を続けていくか、退職して家事に専念するか、葛藤があった。

彼からは仕事を止めてほしいという要望がある。でも、もし退職したとして、今付き合っている彼と同棲するようになれば普通に生活するだけの収入は確保されてはいるが、自分が彼との間に子供が出来たとして、育てるだけの貯金はなかった。

愛の幻想が現実を勝る時間はあまりにも少なかった。あるいは現

実をみる冷静な心がすっかり根付いていた。けっして彼が嫌いじゃない。外見が崩れているわけでもなく、普通の容姿をもっている。真面目で、普通の人ならこういう人を結婚相手に選ぶような模範的人格をもっている。実際、親や友達から結婚を反対の意見はなかった。何もかもしがらみがなく、順調だった。でも、物足りない。

彼と一緒にいると息が詰まる時があった。束縛心が強く、一緒にいる時間以外は常に監視されているような錯覚に陥る。仕事に掛けてくる電話がなくなったことが救いだった。大勢いる友達とパーツと遊んでいる時の方が何倍も楽しかった。そんな時間も結婚してしまえば制限されてしまう。否、なくなってしまうかもしれない。そうなる则自分の輝ける時というのと同時になくなってしまうのではないかと思った。

明子はそのような陰の部分に秘めていた。親友には飲んだ席で愚痴ったこともあった。彼には悪いなとは思いつつ、溺愛した記憶がなく、プロポーズを受けたときも仕事のように事務的な返事で受け入れた。彼の目は輝いていた。あまりにも嬉しそうな顔をしていたので、私もそれにつられて喜んだ。演技に近かった。

それからは明子にとっての人生を決定させた時間をただひたすら過ごしていた。誰かに縛られる感じは、会社の内定が決まった時よりも上だった。この場所を歩いているといつも様々なことが頭をよぎった。考えたくないことまですべて。自分の体と心が隔離される感じだった。

明子は他人から見れば心配されかねない状態だった。

川沿いの公園は人口的な芝生でコーティングされていた。

彼女の背後からは電車の走る音が聞こえてきた。

下を向くと無数のゴミ屑が転がっていた。

正面には川上を渡る大きい橋が見えた。

右手側から川の流れる音が聞こえた。

左手側にはテニスコートが見えた。

空は曇っていて星は一つもない。

虫達は鳴き声で合唱していた。

生ぬるい夜風が吹いていた。

遠くの街灯が綺麗だった。

暗闇に目が慣れてきた。

不吉な予感があった。

人気は皆無である。

ただ静寂な空間。

民家が少ない。

草のにおい。

長い歩道。

不安感。

直感。

何？

いつもとは違う場所にいるようだった。見慣れた景色、空気が歪んでいるようだった。息苦しさもあった。頭で考えても言葉が浮かばない。明子の今後を考える思考を無にする嫌悪感。この原因はいったい？

足音がした。方向は背後からだった。つま先立ちをして、地面に接する面積を最小限に抑え、音を押殺した歩き方だった。明子は歩みを止めた。自分の足音を無くしたことで、背後からの足音はより鮮明なものとなった。体に寒気を感じた。容赦なく足音は自分の所に近くなる。恐怖から背後を振り向けず、硬直した体は逃げることにすら忘れた。体全体が震えた。

突然衝撃と共に、体の中に異物が進入してきた。生の感触がとも他人事のように思えた。痛みを感じる間もなく、人間の肩が背中に当たった。数秒間、時間が止まった。激痛が襲ってきた。背中の部分に冷たいものが伝った。

明子が悲鳴をやっと挙げようとした瞬間、皮の手袋が口を塞いだ。全身の力が加速的に抜けていった。顔面から滝のような発汗があった。それは直ぐに全身へと移行した。目の前が暗くなってきた。周りが暗いというのに、それが手に取るようにわかった。明子は体を支える力がなくなり、膝から地面に倒れた。アスファルトにぶつか

った時の痛みはなかった。神経はすでに上半身しか機能していなかった。

「誰？」

明子の人生で発した最後の言葉だった。相手は答えなかった。否、意識が薄れ、五感が働いてなかったのかもしれない。自分を見下ろしたスレンダーな体躯で黒服、顔の半分を覆った深い帽子の姿。暗闇の中から不気味に光る二つの目は据わっていた――ように思えた。死神に見えた。

その後、相手が持っていたナイフは五箇所明子に襲ってきた。生命を支えるものすべてを奪いさった。明子は婚約中の彼を始めていとおしくなった瞬間、絶命した。

黒服の人物は明子の姿を見て笑っていた。

8. 捜査開始

3

探偵に弟子入りしてから二時間後、義高は菅野の住んでいるアパートの部屋にいた。部屋の壁を覆いつくした本棚の収納スペースを殆どミステリー小説で占領されているワンルームは慣れないと圧迫感がある。菅野はこれをミニチュア図書館と呼んでいた。本の購入は古書店で済ませているらしいが、お気に入りの作家が新刊本を出す、発売日に購入する。大学生の菅野が、どこにそんなお金があるのかが今だに不思議だった。彼にもそれなりに友達付き合いもある。

「金髪の探偵？」

驚いた菅野は吸っていた煙草の煙でむせた。痛んだ喉をウーロン茶で潤した。

さすがに義高の説明では理解できない。無理もない。百聞は一見にしかずというが、一見した義高でさえケンジが探偵で、依頼を受ける場面や、解決している姿が信じられないのだから。

菅野いわく、ミステリー小説にでてくる探偵はリアリティーのボーダーラインを少し超えたぐらいのキャラクターがメジャーであり、いずれも自分たちが生活している現実存在しないだろうと判断できるらしい。言われなくても大体の想像はついた。

「正直信じられないな。テレビドラマでちょっと前、永瀬正敏主演の『私立探偵マイク』のようにパンクファッションで事件を解決す

る探偵とか、アメリカでは私立探偵が普通に政府から公認されているが、両方共環境があつての探偵業だからな。義高の言うことが本当なら、調査にならないだろ。そんな目立つ探偵なんて」

付け入る隙もない。義高はあまり吸わない煙草に火をつけた。頭がクラッとし、血管の収縮を実感した。

「だまされているんじゃないか。実際試験だか面接だか言ってナンパをさせられたんだろ。バイトの給料もなしで、ほんととは昇の事も全然調べてくれない可能性があるぞ」

「それは」

給料のことは自分から言ったことだからと言い返したものの、昇の件については、反論する要因が見つからなかった。

「よく考えてみるよ。相手は大人だぞ。お金のためなら学生をだます方法だっていっぱい知っているはずだ。もちろん、大人の全員が同じだとは言わないけど、少なくとも金髪の探偵なんて胡散くさすぎる」

実際だまされそうになっていたり、甘い言葉でだまされた友達をけっこう知っていた。個人情報結構悪徳商法をしている企業にリンクしているものだ。義高の知っている悪徳商法とは違った類のものであることも充分考えられる。菅野の言うことで急に落ち着きがなくなった。

「とにかく、今は調査に協力者が必要なんだよ」

菅野は調査という言葉に弱い。義高の意見が不利になっても、そ

ういった話に持っていけばまずプラスマイナスゼロとなる。

「明日から仕事が始まるなら、俺も着いていく」

「えっ、菅野も来るの？」

「当然だ。そもそも探偵というのは俺にとって神聖なものなんだ。探偵に成りすましていたり、もどきであっても俺は許せないんだよ」

「はあ、なるほど」

火がついたら大学教授も真っ青の蕚蓄を披露する菅野。義高は少しでも昇に関することを調べたかったが、どうやらしばらく続くらしい。聞いている時間は苦痛でしかなかった。しかし、自分一人であの探偵事務所に行くよりも、菅野がいればすこしは不安が軽減されると思い、我慢した。

菅野と別れてから、早速義高は調査にかかった。といってもどのような進めていったかわからないので、昇の過去を探ることにした。まず生前彼に聞いていた話を頼りに、通っていた高校の資料を調べようと、駅前の小さな本屋で立ち読みした。学力を測る偏差値制度が消えていたから、進学率を見ると、結構有名大学に進学するパーセンテージは高かった。昇はパソコンには詳しかったが、どこことなく勉強に興味はなかったようだし、大学の講義にはあまり出ていない。そうすると、彼は中学までわりと勉強を真面目にしていたのか、たまたま要領がよく、理工学系の分野に興味があったため、進学率の高い私立高校に合格したのかもしれない。

立ち読みを止めて書店を出た。

お世辞にも、義高の通っている大学は総体的に見積もって一流とは言えないし、他人に質問されて大学名を答えれば知っているという返答はあまりないのではないか。

電車に乗って、自分の住んでいるアパートがある白楽駅へと向かった。

何らかの形で、大学受験の時にはもう勉強に対する意欲が薄れていて、ここなら楽に合格できるだろうと考えていたとしか思えない。見たところ高橋家は厳格な両親で成り立っているようだし、きっとこういう事実が本当に起きれば許しがたいだろう。将来はエリートになるよう教育してきた息子なのに、名もない大学に入学すること、一時は我を忘れて……

まだそれを息子殺人の線と結び付けるのは早い、充分な動機にはなる。

白楽駅から降りると商店街を直進し、五分程度でアパートに着く。

義高は唯一、昇と親しくしていた人物思い出した。武本博之。同じ大学でかつ学部も同じ。身長が高く、ほっそりしていて髪の毛を肩より下まで伸ばしている。いかにも何かのオタクに属していると判断出来る風貌。近寄りがたいので、特にまともな話をしたことはなかった。彼は昇とタイプが似ていることが分かる。そういえば、昇の通夜に彼の姿はなかった。推測からすると、二人とも人情に熱いようには思えない。仮に武本の方が亡くなったとしても、昇が彼の通夜に来るか考えると、来ないと思えるし、別に不自然ではない。

自分と同世代を見ても、友達の死を他人事として受け止められる

性格を持った人間は結構いて、義高は珍しくないように思った。社会現象にもなっている。認めたくはないが、自分もその中の一人なのだから。

どの推理にしても、実際確かめなくては断言できなかった。いずれは武本にコンタクトをとって聞き込みを試みよう。証拠云々は二の次だ。義高は部屋に帰って横になると疲れからか意識を失うまでに時間はかからなかった。

9. 心理学教授の推理小説論（前書き）

推理小説の情報はネット関連資料を参考に書かせて頂きました。
まるまる移している部分もあります。

9. 心理学教授の推理小説論

翌日、嫌な夢を見て起きた義高は大学に向かった。昇は武本がよく学校のパソコンを使ってインターネットをしていることを言っていた。

どの学部も上半期のテストを終えて、夏休みに入っていた。サークル活動に専念している生徒を除いて、人気はなかった。広い校内を貸し切にしたような錯覚に陥った。

出入り門を通ると、着ていたTシャツは汗まみれになり、真っ先に近くの本館に入った。クーラーが効いていて、義高は生き返った気持ちになった。

義高のいる本館からパソコンが置いてある第七号館までの道のりは、まず中央の廊下をまっすぐ中央広場まで進んで、そこを通過して途中左に曲がり、第五号館を通り、またそこを出てすぐに第七号館へと続く。他に、建物を通らず、出入り門から外の道を通って行けないこともない。

パソコン室は二つあり、講義で使用したり、たまに空き時間をそこで潰すこともあった。インターネットは常に可動していて、自分のパスワードさえあればいつでも使える。

第七号館は静寂に包まれていた。パソコン室を覗いてみたが、誰もいなかった。もう一つの部屋も同じ結果だった。どちらもクーラーだけが付いた状態でもったいないと思った。

期待はしていなかったので落胆はなかった。義高はしばらくパソ

コンをいじって時間を潰した。大学のホームページを開いてみると、自分は通っているにも関わらず知らなかったことが多かった。自分自身、大学に興味がなかったことを再確認した。

昼時に来てからもう午後四時になっていた。閉館は五時半だから、今日は来ないだろうと考え、もう一つのパソコン室にもいないことを確認すると義高は第七号館を後にした。

義高が捜査を始めてからまだ時間は浅いものの、このペースですつと続くのではないかと考えた。なに一つ手がかりもないままで、いずれはあきらめて普段の生活に戻ることになる。しかも、ケンジがもし、いんちき探偵であればなおさら真実を探りあてる可能性は薄れる。義高の心が読める能力はこういう時に旨く機能しない。せめて手がかりになるようなものを関係者から読み出すことが出来れば……

中央広場のベンチに座って煙草に火をつけた。夕日も落ちてきて、それが夜へと変化しつつあるのがわかった。熱気はだいぶ和らいできた。

遠くから誰か義高の方に向かって来た。暗かったので顔を確認することは出来なかった。

義高はわかるまで顔を凝視するのは失礼かと思い、違う方向を向いた。少なくとも武本ではない。今は彼以外の人物を発見したところで何も得することはないと決め付けていた。

向かってきた人物は義高の近くで足を止めた。

「あれ、義高君ではないか。大学に用でもあったのかね？」

目をあげると、そこには江崎教授がいた。年の割には強い眼光をもっていて、表情は逆に温厚でやさしい。茶色のスーツで手持ちバックを持っていた。

「いえ、ちよつと立ち寄っただけで、もう帰ろうと思ひまして」

「そうか。私は今出張から帰ってきたところなんだよ。よければ私の部屋で話でもしないか？」

「いいんですか？」

もちろん江崎教授は言った。いくら自分が好んで出席している講義とは言え、実際江崎教授と話しをした回数は数える程だった。教授から誘われるのは初めてだった。小、中学校とは違って、大学というものは教師と生徒にいかんともし難い距離があった。教授達は生徒達の一人一人の顔と名前を把握していることは皆無だし、出席しない生徒は放っておかれた。もちろん、義高が自分で思っていることではあるし、そこには年の差異があり、自分で選択する自由をもつ年齢であり、担任の先生が存在しない等の要素もあった。義高が大学に入学して、教授と呼ばれる人物とまともに会話した経験がなかったのも、これから会話するんだと思うと不思議な感じがした。

広さにしてワンルームアパートくらいで、江崎教授の部屋は他の教授と比べ整頓されていた。研究の資料が少ないというわけではなく、旨く収納を生かしているのだ。バックから取り出した資料も直ぐに片付けた。江崎教授は椅子に座りなさいと言うと、スーツを脱いでコーヒーを入れた。

「職業病とでも言うのか、わたしにとって長い間この部屋で過ごすので自分の家みたいになっているよ」

「今日はまだ仕事していくんですか」

「少しね。出張先で会議を行ったので、それをまとめなくてはならない」

邪魔してしまったみたいで義高は恐縮した。江崎教授はいいんだよと言った。

「心理学の研究をしているとね、昨日まで赤の他人だった人と合って、挨拶をしたぐらいから、この人はこれこれこういう人間だろうと仮定してしまうんだよ。第一印象でね。まあ、これは誰でも共通だと言えるけど、そこからさらに分析して会話の内容を組み立てる。円滑に話を進める時には大切なことなんだ。統計から見ると、仮定が確定になることが多い。でも、たまに私の仮定を裏切って、相手が予想外のパーソナリティーを持っていることわかった時は、読みが外れてしまったと悲願するより、意外性に驚き話をしていて喜びさえわいてくる。今回の出張にもそういう人がいて嬉しかったな」

「教授の仮定とはもちろん研究で得た知識の産物ですよね？」

微笑ながら頷いた。

「もちろんだよ」

義高は江崎教授に読心能力のことを打ち明けた。まるで隠していることが面倒くさくなって、あるいはお金をつまれて目が眩み、秘密情報を提供してしまうかのようにだった。自然の流れと言ったほう

が正しいかもしれない。

教授は心理学のプロであり、あらゆる心理パターンを知っている。義高の読心能力は思い込みであると言われ、それを説明する内容的確だった。

「常に人の心が読めるのではなく、ある時期突然この人はこう口で言っではいるが、実は違うことを考えていると感じる。疑いが思い込みを凌駕してしまつて、結果的に自分は目の前にいる人の心が手に入るようにわかると錯覚するんだろう。例を挙げると読心術は占い師や宗教などにけっこう用いられていることなんだ。しかし、信憑性はない。完全に心を読んでしまうわけでもなく、相談内容から読み取りただ抽象的な表現を用いて相手に言い当てられたと思ひ込ませるのだよ。彼らは心理学に精通しているとも言われているから、要は知識の上で成り立っているんだ。もちろんそこには長い間人間と接してきた経験を生かしていることも多い」

「確かに、ぼくにはそういう思い込みが見えていないかもしれない」

「一概にもそうとも言い切れないけどね。思い込みによることが多いということだよ」

「ぼくは、相手の心が読めると言っても、漠然と相手の言っていることが本当か嘘かを判断しているに過ぎないんです」

「本当か嘘かがわかり、事実見当違いであつたことがない」

「はい。頻度は少ないですか」

正直、義高は自分の読心についてわかりやすく表現する手段を持っていなかった。自分以外の他人に打ち明ける機会が絶対的に不足していた。それでも義高の迷いは断たれた。否、だいぶ晴れてはいた。幼児体験のトラウマがあるのであれば、義高はただ単に初めて両親の心を読んだ気でいたことを今でも引きずって思い込んでいるだけなのかもしれない。物心がつく前に浮気という行為を的確に捉えていたことは、江崎教授に説明する過程になかった。

その後、たて続けに、自分が昇の事を調査している話をした。思ったとおり、それを否定しないで、励ます言葉が返ってきた。

「私は犯罪捜査には詳しくないが、興味はあって資料は見ているよ。推理小説も良く読んでいる」

なんだか自分より菅野を連れてくれば喜びそうだと思ったが、江崎教授と話をしているだけで心の蟠りが紛れたので、推理小説の歴史や意見について質問した。

「推理小説はへなぞを論理によって解明する操作をおもな筋とする小説」というのが、妥当な定義であろうが、今日の現実を眺めると、これでは十分に包括しつくしているとはいえないね。さらに推理小説という語自体、その意味するものが昔と現在では違っているし、この語と他の類似の語、例えば探偵小説、ミステリー小説、犯罪小説との関係も、時代によって変わってきたんだ」

「推理小説というのは一つではないんですね。それぞれの違いってあるんですか？」

「探偵小説はすでに明治時代から用いられたんだ。探偵小説の定義としては、例えばD・L・セーヤーズの「犯罪とその捜査を取り

扱った小説のうち、なぞの設定とその解決が、もっぱら論理的操作によってのみ行われるもの」という手本がある。しかし、当時からこの種の作品を本格的探偵小説と呼び、探偵小説はもっと広いもの、例えば論理的操作がほとんど欠けている小説やもっぱら行動とスリルだけの小説、あるいは、プロとアマを問わず探偵が登場するすべての小説などをも含むと考える立場があったんだよ。

第二次世界大戦前の日本においては、探偵小説の語がほぼ独占的に用いられ、推理小説の語はほとんど見られなかった。しかし十九世紀においてアメリカの作家 エドガー・ア・ポーは、すなわち直訳して推理、この場合は短編小説という語をすでに用いている。これはセーヤーズの定義よりももっと狭いもの、純粹の推理作用による解決を扱った物語で、犯罪が関係しないパズルや暗号解読なども含む。したがって推理小説という概念はきわめて狭いものながら以前から存在したのであるが、イギリス、アメリカでも日本でもあまり一般には知られていなかった」

「日本で推理小説が出来たのは、今江崎教授の言われた歴史よりも遅いんですか？」

「日本で推理小説という語が一般化したのは、第二次世界大戦後のことなんだ。まず、木々高太郎の提唱があった。より広い内容をもつものとして新たに推理小説という語を持ち出した。木々の定義によると、これは〈推理と思索を基調とした小説〉で、探偵小説、怪奇小説、スリラー、考証小説、心理小説、思想小説などすべてを含むものであった」

「では、それらの原型となる作品はあるんですか？」

「なぞ解きを扱った文学作品といえば、古くは旧約聖書にまでさかのぼることができるが、一般に推理小説の起源と考えられているの

は、イギリスで十八世紀後半に流行した「ゴシック・ロマンス」なんだ。例えば、W・ゴドウィンの《ケーリブ・ウィリアムズ》は殺人事件を一個人が究明し犯人を自白に追いつめる物語がある」

「菅野から聞いたんですけど、エドガーアランポーっていう作家が始めて推理小説を書いたと言っていました」

「そうだね、ポーが発表した短編《モルグ街の殺人》は、彼自身が呼ぶ《推理小説》、すなわち本格派探偵小説の起源と呼ぶべき画期的作品なんだ。続く《マリー・ロジェのなぞ》《盗まれた手紙》の全三作で、近代的推理小説のパターンがほとんどすべて実践されてしまった。読者に事実をすべて提供し、探偵（つまり作者）と読者がフェアプレー精神で知恵比べをする。トリックとかがけぬ解決。ポーはこのほかに暗号解読の物語《黄金虫》、意外などんでん返しの《お前が犯人だ》、合計五つの短編を発表したが、長編は一つも書かなかったんだ」

「その後に、ぼくでも知っているシャーロックホームズシリーズが出てくるんですね？」

「そうだね。コナン・ドイルの《シャーロック・ホームズ》シリーズの花が開くこととなる。この名素人探偵が初登場するのは長編《緋色の研究》だが、ポーのアイデアをドイルはかなり借用している。しかしホームズ・シリーズが世界推理小説史上不滅の地位を今日なお占めているのは、創始者ポーのやらなかった新機軸を出したからなんだ。語り手のワトソンに、ポーの場合見られなかった人間味を添えたこと、なぞ解きの興味だけでなく、時代の風俗や冒険的興味などである。以後ホームズの後継者、今日に至るまで後を絶たず、推理小説の一つの定型が確立されたのである。第一次世界大戦後のイギリス、アメリカで推理小説の黄金時代が築かれた。一九二〇年

にアガサ・クリステイの処女作《スタイルズ荘の怪事件》と、F・W・クロフツの処女作《伍》がともに発表されたのが、その幕開きである。クリステイは以後アマチュア探偵ポアロを主人公とした、パズルとトリックに重点を置いた（そのため現実性が希薄と批判されることもある）推理小説を半世紀以上も書き続けた。一方、クロフツの作品は、超人的頭脳に恵まれたホームズ、ポアロ型と正反対の、平凡な警察官や素人が、もっぱら足と根気で試行錯誤を繰り返しながら真相に迫るという、より地味だが現実味あふれるものであった。以後の時代の推理小説を大きく二分するなぞ解き型と現実型の典型例というべきであろう」

「なぞ解き型と現実型の代表作はどのようなものなんですか？」

「なぞ解き型の代表としては、アメリカのバン・ダイン（探偵フェアイロ・バンス）、エラリー・クイーン（探偵エラリー・クイーン）、アメリカ生れでイギリスに帰化した J・D・カー（探偵フェル博士）などがある。この種の小説の作者には主人公たる探偵と同じようなアマチュアが多いんだ。デュパン以後の素人探偵が、あまりにも人生をゲーム視しすぎ、鼻につくほどの知性やペダンティズムを示すのに不満な現実派は、市井の泥沼で手足を汚すことを迫られる現職警官や素人探偵を主人公に置くようになる。とくに社会不安が深刻になってきた一九三〇年代から、タフな神経と肉体を持つ一匹狼が巨大な社会組織に立ち向かうという、いわゆる「ハードボイルド」小説、例えば ダジール・ハメット、レイモンド・チャンドラー、ロス・マクドナルドなど、アメリカ独特の作家の作品が広く世界中で歓迎され、同傾向の作家が各国に出現した。この種の小説の特色は、感情におぼれない、とくに女性の魅力に動かされない男の強烈な個性と、心理より行動に重点を置く簡潔な口語的文体である」

「現実型の代表は？」

「現実型の代表としてのエミール・ガボリオの《ルコック探偵》ほか同じ探偵を主人公とする諸作、密室殺人の古典的傑作であるガストン・ルルーの《黄色い部屋》、本格推理小説とは呼べないが数多くのトリック操作で日本にも有名な モーリス・ルブランの《アルセーヌ・ルパン》シリーズなどを生み出している。ジョルジュ・シムノンの《メグレ警部》シリーズも忘れることができない。概してフランスの推理小説はなぞ解きパズルよりは、人間心理や物語性、社会・風俗に重点を置いているんだ。まあざっと話すところなるよ」

義高の知っている作家は一部しか話の中に出てこなかったが、江崎教授の個人講義を受けたことはすごく貴重だった。菅野の蘊蓄とはやはり違った類の、資料をきちんと把握し、頭の中で整理されたものだった。

「ただ、義高君のやっていることは正義とは限らないよ。時には法に触れて、裁かれているかもしれない。探偵社で働くというのなら安全だが、それだって危険な目にあう事だってある。誰かの恨みを買い、知ってしまうことで現実絶望するかもしれない。心はいつだって引き締め、身の危険を感じたらすぐに退散すべきだ。逃げることだって勇気。捜査を断ち切ることもだって勇気だよ」

「はい、ありがとうございます」

江崎教授に別れを告げると大学からでた。帰り際、コンビニで六本のビールを買った。気分が高揚していた。少し前の疲れはすっかり消えた。アパートに帰宅すると、すべて飲みきってアルコールが体を侵食した。

絶対に犯人を見つけて、あの金髪探偵にみとめて貰おうと心に誓った。協力してもらわなくとも、自分一人で解決する。うまくいけば探偵社の社員として雇ってくれるかも知れない。収入なんて生活していれば問題じゃない。就職活動して、やっと内定が決まった会社で興味もない仕事をするのも、退屈な日常生活を送るのも義高には嫌だった。

10. ヘンテコ探偵

4

翌日、探偵社の初出社時間三十分前に、義高は菅野とS駅改札口で待ち合わせをした。午前九時半、彼はいつも朝方までミステリー小説を読んでから寝るので、この時間に現れるか心配だった。のぼり電車が到着し、改札口から大勢の人ごみが目的地を目指して早歩きしていた。この様子を見学していると、義高は二日前のナンパ試験を思い出し意気消沈する。しばらくトラウマになりそうだった。

人ごみから青白い顔をした菅野が力ない足取りで現れた。どうやら睡眠不足らしい。目付きが悪く、それでいて今にも瞼が閉じそうで、友達でなければとてもじゃないが近寄りたくないオーラを発散していた。

「おはよう菅野。大丈夫か？」

「たいしたことない。それじゃ行こう」

スーツ姿のサラリーマンの群れと一緒に歩き出した。菅野は俯き加減だった。

「目が充血しているぞ」

「寝たら起きられないと思ったからな。さっきまで探偵の研究をしていた」

外見こそひどいものの、菅野の声はしっかりしていた。

「その苦労も、今日のためにしてきたことだ。怪しい探偵もどきを捜査しなければならない。こんなことで頭の回転が鈍ることはない。心配するな」

弱っている状態でもハードボイルド気取りとはたいしたものだった。頼もしい限りだけど、菅野の言葉が真実であることを祈るばかりだった。少し歩くと、事務所のある雑居ビルに到着した。階段をのぼる。

「美辞麗句探偵事務所？　ますます怪しい」

菅野は看板を見ると声を荒げた。眠気は消えていた。

「ここが例の探偵がいるところ」

「よし、入ろう。もしかしたら犯罪に巻き込まれるかもしれない。気を引き締めろよ、義高」

「おおげさだな」

ドアがキィーと鳴る。中は薄暗かった。今日は電灯が付かなかった。菅野は人がいないことを確認すると、すばやく忍び込み、事務所を調べ始めた。義高はドアを閉め、呆然と菅野の行動を見ていた。

菅野がラックに収納されたCDを見ていた時、ものすごい勢いで右手側のドアが開いた。

「誰だ、こんな時間に」

突然あらわれた金髪の探偵は、菅野の胸倉に掴みかかった。まだ反応しきれていない。

「うわーすいません」

「誰だお前？ 朝から人の事務所に不法侵入か。いい度胸しているな。入った場所が悪かったようだな。相手が俺だってことを後悔するだろう」

菅野を掴んだ手に力を入れながら、ケンジはニヤツと笑った。その表情は男が見ても魅力的だ。

「い、いえ、違うんです。俺はただ……」

完全に菅野の腰は抜け、体を支える力を失っていた。辛うじてケンジの手を離そうと試みるが、ビクともしなかった。声は情けないぐらい高かった。

「いいわけはするな。現行犯だ」

ケンジは殴りかかった。長い金髪が靡いた。優雅で無駄な動きがない。義高はその様子を呆然と見ていて止めることを忘れかけていた。

「待ってください」

義高の声で拳は菅野の鼻先数センチで止まった。ケンジは掴んでいた菅野を、ゴミを捨てるように投げつけた。菅野はだらしなく床に倒れこんだ。

「なんだ、お前か」

「はい。彼がいるのはわけがあつて」

こうなつた事実を簡潔に説明した。ケンジを本物の探偵かを疑つていた事実は、できるだけ遠まわしにごまかした。

「ふーん、要は俺が探偵業を本当にやっているかを見に来たわけか。俺が信用できないってことだな」

声が威圧的なトーンだった。遠まわしに言つたつもりが、ケンジにはすべてお見通しだった。義高は体が硬直した。

「いえ、そういうわけではないんですが」

「まあいい。おまえ一人じゃ役不足だからな。もう一人いたほうが仕事になる。おい、いつまでそうしているんだ」

菅野は声を掛けられて、やつとの思いで立ちあがった。千鳥足の菅野は病人に見えた。

「まったく頼りないな。そういえば、お前の名前はなんだっけ？」

「義高です。それで、彼が菅野」

「そうか。義高も俺の試験にしろうじて合格はしたが、菅野とやらはもっと使えないようだな」

厳しい目だった。大きく穏やかな目と、甘いマスクは完全に消えた。やはり探偵なのかもしれないと義高は思った。ここらへんの変

化は普通の人からは伺うことが出来ない。少し前に義高は、菅野から本当に凄い探偵は、普段から切れ長の鋭い目をして頭の回転がよさそうに見える人物より、普段は温厚そうに見えて、いざとなると瞬時に表情を一転させて鋭くさせる人物だと聞いていた。目の当たりにして、ケンジは温厚とは言えないにせよ、すっかり義高はそれを信じ込んでいた。

「俺には調査の知識があります。きっと役に立ちます」

先ほどまであんなにケンジのことを疑っていたのに、もう相手に吞まれて疑いも忘れている。義高はやれやれとつぶやいた。

「知識ね、調査の知識って具体的にどんな？」

「古今東西のミステリー小説を読んでいて、勉強し、それで得た知識です」

ケンジはため息を付いた。

「わかった。アドバイスをしよう。探偵というものは知識よりもまず行動力に交渉力が必要なんだ、わかるな？」

「はあ」

発言を否定されて間拔けな返事だった。

「推理よりも情報、犯罪のケースよりも証拠がないと話にならない。それだけは覚えておけ。現場でいかに臨機応変に対応するかを鍛えろ」

「は、はい」

険悪な空気を浄化したのは亜紀だった。半分閉じた目を擦りながら現れた。寝起きだったため、化粧をまったくしていなかったのが幼く見えたが、シルクのパジャマ上下と、気だるい雰囲気は艶しかった。亜紀は大きな欠伸をしながらソファに足を組んで座った。覚めた目で男たちのやり取りを見た。

「また弱いものいじめをしてるの」

「こいつらが勝手に事務所に入ってきたから怒っているだけだ。しかもこんな時間に」

「確かにそうね。こんな時間に起こされたのはむかつく」

亜紀までケンジの見方になってしまったらやっかいになる。

「いや違いますよ、勝手ではなくケンジさんがこの時間に来いと言ったんでしょう」

怒った口調で言ってしまったから義高は後悔した。菅野は信じられないといった目で義高を見た。もう俺はしらねえぞといわんばかりだった。

「うるさい。俺に口ごたえするとはいい度胸だ」

涙目になってきた義高を見て、やっとケンジは声を和らげた。

「第一、義高が紛らわしい奴を連れてきたからいけないんだ」

「すみません」

「この子泣きさそうじゃない。もうしょうがないわね」

亜紀がそういうと菅野は名前を名乗った。亜紀はそれを聞いて適当といった表現が似合う自己紹介し、再び大きな欠伸をした。と思うと、亜紀はシャワーを浴びてくるといって事務所の右にある部屋に入っていた。義高は気持ちがいぶ落ち着いた。

「あの、質問があるんですが」

義高はどうしても聞いておきたいことがあった。

「なんだ。俺は秘密が多いからあまり答えないが」

「単刀直入に聞きます。いいですね」

「くだいな。じらされると眠くなるタイプなんだ」

ケンジはソファに体を投げ出した。テーブルに置いてあったシガレットケースから煙草を取り出し、火をつけた。

「ケンジさんと亜紀さんて、付き合っているんですか？ 前にぼくが訪れた時も同じ部屋から二人共出てきたと思いますし雰囲気もあります」

「子供だな」

義高と菅野は鳩が豆鉄砲を食らったような目になった。

「どうしてですか？」

「同じ部屋で暮らし、同じベットと共にしているだけで恋人同士だ
と思うことがだ」

「ごく自然だと思うのですが」

「普通の感性ならしょうがないか。だが、俺たちは付き合っている
わけでも、体の関係があるわけでもない。ただパートナーとして一
緒にいるだけだ」

それを聞いて胸のモヤモヤがなくなった。恋愛経験の浅い義高に
とって、ケンジの言っていることは素直に理解できるものではな
かったが、付き合っていないという事実が、今後、二人への対応が楽
にはなる。

「俺が女をここに連れてくることはない。亜紀もそういうときは外
泊してくる。ただそれだけ。お互い恋愛感情もないから、外泊があ
っても、仕事に影響はない。仮にお前たちが亜紀のような女と仕事
上一緒に生活をするとして、変な感情を抱かない自身はあるか？」

義高と菅野はハミングするように、

「そればかりはわかりません」

と言った。二十歳そこそこの自分達にとって、同じベットに寝て
いる女性に手を出さずにコントロールできるほうがすごい。

「だから子供なんだ」

どんな発言もあっさり切られるようだった。ケンジは前髪を手のひらでかき上げた。

「こんな時間になってしまった。仕事をしないと」

そういうと、ケンジはプラズマディスプレイが置いてある近くのソファに浅く座った。リモコンをいじって画面を立ち上げた。写ったのは朝のニュース。殺人事件の報道だった。ケンジは長い髪を掻き揚げ、煙草を吸った。

些細の内容は、今日の早朝五時、多摩川のほとりで釣りに来ていた男が死体を発見したらしい。遺体は森明子という二十五歳の女性で、全身をメッタ刺しにされた状態で地面に埋められていてカモフラージュはなく、明らかに掘り起こした地面が、浮き上がっていた状態で、取材を受けた発見者の男は地元民でありその場所で頻繁に釣りをしていたことから、怪しいと思い、発見は早かったそうだと。

今いる場所からはそれほど遠くなく、テレビモニタに映し出された映像は義高も良く知っている場所だった。遺体の身元は二十五歳、都内の大手メーカーM株式会社に勤めていたOLの森明子。会社側は昨日彼女が無断欠勤をしていた事で実家に連絡。両親も娘と連絡がとれなくなり、警察に捜索願をだした矢先だった。

テレビの映像は彼女の両親が泣き叫ぶ場面と、婚約相手である加藤和夫を写していた。その姿は悲惨で、全国ネットを通じ放送するものではなかった。

「暗い話ばかりで参るな」

違うニュースに切り替わると、ケンジはリモコンをいじって画面

を切り替え、GLAYのライブ映像の入ったDVDを見た。途中から再生されていて、近代的なデジタル音、照明効果のなか、ヒサシがソロでギターを弾くパフォーマンスをしていた。

「やっぱりバンドはGLAYに限るな」

ケンジは立ち上がり、部屋の隅に置いてあったギターを持ち、『HOWEVER』のイントロを引いた。コードのみの弾き語りで、彼の声はボーカルのテルにそっくりだった。生で聞くとプロ顔負けの歌声だった。菅野はうっとりとした表情で聞き入っていた。

「今日は捜査一課の根本さんが来るんでしょ？」

シャワーを浴び終わった亜紀は、タオルで髪の毛を拭きながら現れた。身体をバスローブで纏い、肩まで素肌が出ていた。義高達は息を呑んだ。

「根本は俺の力が必要らしいからな」

すごいナルシストだというツツコミを必死で飲み込んだ。ケンジは悪びれもなく自信満々な発言をするので、反応に困る。

「あの？」

義高の問いかけるとケンジは顔を傾けた。

「今日からの仕事ってどんな事があるんですか？」

「今はゆっくりしてな。そのうち捨てたくなるほどの仕事を与えてやるから」

「わかりました。後、ぼくの依頼の件も忘れないでくださいね」

「それは後だ。俺には常人じゃ抱えきれないほどの仕事を抱えているからな」

そのわりには朝から暇そうにしているのではという言葉も飲み込んだ。どうやらケンジと話をするときはいちいち突っ込もうとしないうがいらしい。もし反論なんかしようものなら、倍になって返ってくるに違いないし、義高は勝手に自分で決め事を作成した。

「私の給料上げることも忘れないでね」

「聞かなかったことにする」

「なんでよ。今の給料じゃ厳しいの。全然遊べないし、ブランド品だって買えないわ。ライブだって行かなくちゃいけないし」

「無理言うな。不景気なのは少ない頭でもわかるだろ」

「なにが少ない頭よ。失礼ね。明日から飛んじゃおうかな」

飛ぶとは理由もなく無断欠勤するというギャル語である。勝手にしろとケンジはいった。亜紀は顔を背けて拗ねていた。

「まあまあ二人とも、ここは温和にいきましょう」

「菅野は黙っている」

「そうよ、君には関係ないわ」

菅野は簡単に反論できなくなって黙った。やれやれと義高は思った。先が思いやられる。

「ちわ、Y警察の根本です」

出入り口から現れたのは、大柄な若い警官だった。浅黒い顔に真っ白な歯が際立っていた。制服を着ていてもわかる鍛え上げられた頑健な体躯、でかくてはつきりした声。どれをとっても義高のイメージする警察という人物像にピッタリだった。

「久しぶりです、ケンジさん」

「来たか。さっそく状況を聞こうか」

「はい、ですがこちらにお客様が」

根本は義高たちに視線を向けた。どうもと小さくあいさつをした。

「違う。今日から俺のところで働くことになった二人だ。まったく役には立たないけどな」

「それはあまりにも……」

菅野はケンジの粗雑な紹介方法に閉口した。

「ここに座ってくれ」

ケンジは菅野を無視して根本を座らせた。どう見てもケンジより根本のほうが年上に見えた。上下関係がうまく掴めない。義高たち

が怪訝な表情をして二人のやりとりを見ていた。

「根本は俺より年下だ。変な目で見るな」

「えっ、そうなんですか？」

「あ、申し遅れました、捜査一課の根本孝治です。今年三十になります。まだ新米ですが、殺人、強盗、婦女暴行、放火、誘拐等の、犯罪の中でも重い罪の事件を扱っていますが、元氣と体力が取り柄です。よろしくお願いします」

ケンジはいったい何歳なんだという疑問を飲み込んで、

「始めまして。京理義高です」

「ぼくは菅野清です」

「根本君にはお世話になったことがあるの。私、前にストーカーがいて、襲われそうになった時、助けてもらったの。けっこう頼りになるのよ」

「それほどでも」

亜紀の言葉に根本はまんざらでもなさそうだった。日焼けした頬が赤らんだ。

「俺はお世話しっぱなしだからな。いずれは飯を返してもらわないと。なあ根本」

「勘弁してくださいよ」

やはりこの人にかかるみたいがいの人は目下になってしまおうのか
と思った。ころなしに、さっきより根本の体が小さくなったよう
に思えた。

「すみません、ケンジさんは今おいくつなのですか？」

菅野は尋ねた。彼が質問しなければ自分が質問していたことだろ
う。

「三十五だ。そんなことはどうでもいいだろう。それより、根本、
はやく例の事件の概要を話せ」

年齢不詳とはこういう時に使用するに違いないと思った。ケンジ
には年齢さえあったのかと思わされる。整形しているのかもしれない。
い。

根本はさっき見ていたニュースの内容を話し始めた。和やかな空
気は一掃した。

「検死官の話では遺体の体温低下、死斑、死後硬直から昨夜の午後
十時頃と断定。現場の状況としてはまだ捜査中で、目ぼしい証拠は
出ていません。しかも、犯人の指紋は残されていなかったようです」

リアルな事件現場を体感することで、義高は息もしてない程聞き
入った。義高の心臓の鼓動が高まっていた。

「現場の状況は俺もこれから行く予定だからよしとしよう。それで、
被害者の女性に悪い虫がいたのか？」

「まだわかりませんが、彼女には婚約相手がいました。彼女の両親

や、交友関係を当たったところ、婚約していたことはあまり嬉しく思っていなかったそうです」

「婚約相手は知っていたのか？」

「知らないそうです。被害者の女性は人の心を慮る性格のようでしたので。それに婚約相手はあんなに愛し合っていたのにと泣き叫んでいました。話を聞く余裕はなかったです」

「複雑な話ね、相手の本心もわからず、ずっと婚約相手だった人のことを思っていて生きていくなんて」

義高は実際自分がそういう境遇になってみたところを想像した。すくなくとも相手が自分の事を余り好きではないことぐらいはわかるのではないか。否、不幸な人間を蔑むことで罪悪感を覚えた。逆にそれだけ好きだった、愛していた相手が被害者なのだ。

「死者に権利はないが私情は禁物だぞ、亜紀」

同情もしたくなると義高は思った。もし自分が結婚を間近に控えた相手がいて急にこの世からいなくなったとしたらどうなってしまうのだろうか。

ケンジや根本ぐらいの経験を積んでいれば、こういった状況でも能面で対処できるようになるのだろうか。

「被害者に同情し犯人を憎むことは、事件解決の原動力になるが、逆に解決を鈍らせることにもなる。覚えておけ、二人共」

すべてお見通しだった。ちょっとした表情の変化が、彼には手に

取るようにわかってしまう。

「新しい情報は随時知らせます」

「そうしてくれ。犯人はまだこの近くに出没している可能性がある。いつ同じような事件が繰り替えされるかわからない」

「はい、では引き続き捜査に戻ります。ぜひ協力の程よろしく願います」

「わかった」

根本は立ち上がると、大きな体を真っ直ぐに伸ばし、右手のひらを斜め四十五度にしておでこにつけると、足早に事務所を去っていった。

義高は冷静になると、探偵業務について考えた。菅野は普段から物語上で接しているから免疫があると思うが、義高はいまだに警察が探偵に協力を依頼していることが不思議だった。浮気調査ならいざ知らず殺人事件がからんでいる。第一捜査の内情を自分ら素人に打ち明けてもいいのか。

「ぼやぼやしていないで、仕事だ」

「ですが、何からやっていいか」

「菅野。お前は知識があると言った割には発想がよくないな。事件が近くで起こっているんだぞ。お前らが調べている友達の死を捜査する絶好の機会じゃないか」

「どういう意味ですか？」

義高は問うた。

「馬鹿か、もし今回の事件が起きなかったら、お前たちがそいつの両親にだって接触したくたって出来づらかったはず。俺なら別だが、お前らが行ったところで、話にならずに、しまいには不審者が息子のことを聞きだしてくるからと言って、警察に連絡されてしまうだろう」

「なるほど」

「納得している場合ではない。まず、事件のことを説明し、探偵事務所のアルバイトであることもきちんと言うんだ。それから聞き込みをし、どこまで情報を引き出せるか後はお前らの実力しだいだ。うまくいけば、今回の事件と、お前らの捜査している情報、いっぺんに聞きだせる。まあ、俺は期待していないがな」

「わかりました。やってみます」

きっかけとは思わぬところからわいて来るものだ。

「あら、やる気満々のようね。頼もしいわ。それにしても菅野君はひどく顔色が悪い様だけど、そんなんで大丈夫」

「なんとか」

言われてみれば、菅野の顔色はさっきよりも悪くなっていた。元々健康的とはいえない菅野でも、さすがに心配させられる程だった。

「じゃあ、俺らは早速昇の両親に会ってきます」

管野がそういうと、ケンジ達と携帯の番号を交換し、義高たちは『美辞麗句探偵事務所』を後にした。

11. 接触

5

初めて会ったときから苦手だった。高橋孝造の方は紳士的要素を表に出しているものの、どことなく内面から人を見下すエリート特有のオーラがあった。昇は自分のことを、同じ大学の友達と両親に紹介していたのかは知らない。でもあきらかに義高を見る目はよくなかったように思えた。

高橋文子の話し口調は芝居がかっていて、まるでお嬢様スパルタ教育を受けてきたかのようだった。実際、広い洋風家に住んでいるし、昇の家で遊んだ時は終始落ち着かなかった記憶があった。空間そのものが、義高のような素人を萎縮させる効果があるのだ。数回しか昇の家に立ち入らなかったのはそういう経緯があった。

できれば聞き込み調査は菅野に任せたかった。だが、今の菅野は寝不足に加え、昨晩起こった事件の細部を聞かされ、さらに気分が悪くなったと昇の家に来る途中告白していた。誰から見ても満身創痍だった。入り口のゲート前に立つと、塀の向こうにある芝生の庭から大きなゴールデンリトリバーが義高たちを見ていた。右側に見える車庫にはベンツが置いてあった。菅野は思わず「すげー」とつぶやいた。それもそのはずで、これほど広い土地と大きな住宅は富豪とは周囲に存在しない。また、義高達の周囲にいる知り合いなり友達に金持と呼ばれる人種はいなかった。

インターホンを押した。直ぐにスピーカーから文子らしき声が聞こえた。表札近くに設置されている監視カメラがひどく気になった。

「はい高橋です、どなた様でしょうか？」

スピーカーからの声は業務的だった。自分たちの姿を確認したかなのだろうか。義高は思わず構えた。

「あの、昇君の友達だった京理と申します。あと菅野君もいます」

「どうも、お久しぶりです。今出て行きますんで、少々お待ちください」

玄関のドアが開き、中から昇の母親が出てきた。微笑んでいるように、警戒していない様子だった。夜で見たときより少しやつれていた。目の下の隈が目立つが、外見に惑わされて疑うことは忘れてはいけない。同情もここでは捨てなければならぬ。義高は今日ここを訪れたのは昇の調査なんだと心中で意気込んだ。

「すみません、急に訪れてしまって。こちらが菅野君です。昇君とは同じ大学の友達でした」

菅野は義高の嘘に戸惑いを見せず、自己紹介をした。

「そうですか。今日はどのような用事で来られたのですか？」

「失礼でなければ、ちょっと昇君に線香を上げさせて頂きたいと思ひまして」

「わざわざすみませんね。あの子も喜ぶと思うわ。さあ、あがってください」

昇の母親はゲートを開け、義高達を家の中へと促した。菅野はし

つくく高橋宅を見渡していた。

「随分立派な家ですね。びっくりしました」

「ありがとうございます。菅野さんと会うのは始めてでしたわね？」

ええ、そうですという、菅野はお辞儀をした。

玄関から廊下を通り、リビングルームに案内された。優に二十畳はある。大きなソファにテーブル、数々の骨董品。どの家具も高価だった。義高は何度来ても驚きは隠せなかった。さらに奥の部屋に案内されると、神棚がある。二人は昇の位牌に線香をあげた。飾られた生前の頃の写真は、通夜の時に使われていたもので、昇はあまり笑っていないかった。義高はあまり楽しそうじゃない昇の写真を見ていたたまれない気持ちになった。しかし、目的はこれだけではない。昇には悪いが手早く済ませた。

文子は、義高達のために紅茶とケーキをテーブルに並べていた。動きは落ち着いていて、一つ一つの仕草が鮮烈されていた。二人は昇文子にどうぞ召し上がってくださいと言われるまでその姿を黙って見ていた。

「すみません、いきなり訪ねてきてこのようなものまで出してもらってしまって」

「いいんですよ。昇は滅多に友達を家に連れて来なかったから。私も嬉しいんですよ」

テーブルには文子が右側、義高と菅野が左側に座り、向かい合った。正面から見ると文子は少しやつれてはいるが、やはり普通の主

婦とは違うと義高は思った。飛びぬけて美人というほどではないが、肌の色が年齢のわりにはくすみがなく、背筋がまっすぐに伸びていた。

「実はぼくたち探偵の事務所でアルバイトするようになりました」

「探偵事務所？」

文子は明らかに不信な目の色になった。しごく当然なことだった。それでも直ぐにいつもの鮮烈されたお嬢様のような態度に変わった。

「はい、それで最近この近くで起こった事件を調べているんです、ご存知ですか？」

「なんとなくは」

菅野は事件を説明した。簡潔ではあるが、彼の説明は的をえたもので、緊張している義高よりは適任だった。

「なにか情報とかはないですかね。この近くで不信人物がいたとか、そういう類の話でもかまいませんので」

「そう言われてもね」

文子は考え込んだ。情報を隠蔽しているようには見えない。もちろん義高の持っている素人の見解だ。主婦の情報網を見くびつてはいけないと、ここに来るとき何度も菅野から言われていたから、期待していた。

時間だけが沈黙状態でも過ぎていった。やはりこの話題は無効果

かと思った菅野は痺れを切らした。

「では、何かわかったことがあればここに連絡してください。どんな事でもけっこうですから」

そうは言ったものの、自分たちのような素人に情報提供してくれるとは思えない。せいぜい、警察に通報するのがオチだろう。

菅野は小さなアルミ製のケースを胸ポケットから取り出すと、蓋を明け、自作の名刺を差し出した。氏名、携帯電話の番号と住所が書いてあるだけのシンプルな作りだった。いつの間に作ったのかわからないが、菅野からは調査の意欲が伺えた。

「あの、つかぬことをお聞きますが」

「はいどうぞ」

「昇君のことで二、三お聞きします。彼が自殺した当時の状況を教えていただきたいのですが」

「おい、菅野。それをこんな時に聞くのは失礼だろう」

昇の母親は目線を下げたが、諦めたように、

「気になるでしょうね。大丈夫ですよ、京理さん」

と言った。紅茶を飲んで一息つくと続けた。義高は椅子を乗り上げるように前屈みになった。

「あれはちょうど二週間前だったでしょうか。私と夫は仙台の親戚

の所に行っていて、この家を留守にしていました。長男の健太は仕事の関係で現在海外に出張中ですし、長女の亜由美も結婚していて、相手側の家に嫁いでいる状態だったので、昇だけがこの家に残っていました」

昇に兄弟がいたことは把握していなかった。通夜のとき二人がいたのかは定かではない。

「それで、私たちが親戚の所から帰る時に、昇に連絡を入れましたが、その時は電話にもでませんでした。普段もそういう子だったので、特には気にせずに帰宅しました。昇の部屋はカーテンが占めてありました。部屋の電気が付いていたので、普段通りに昇は部屋にいるのだらうと思っていました」

ここまでの話は何ら怪しいところはない。義高達は静かに頷いた。

「私は帰ってきた事を昇に伝えたのですが、返事がまったくありませんでした。部屋は鍵が掛かっていましたし、私たちも長い移動で疲れていたので、寝室にもどり、その日は直ぐに寝ました。ですが次の日です。夫が仕事に出かけて、いつもなら不規則ではありますが大学に通学するか、部屋に籠っていても、物音はしますので、その日に限ってはなんの動きなく、トイレに行った形跡もありませんでした」

記憶では、確かに昇の使っていた部屋にはトイレ、風呂は存在しない。

「それに加えて、昼間なのに部屋の電気が付いていました。部屋にすることは間違いなかったのですが、何度声を掛けても返事は返ってきませんでした。私はその様子が気になって仕方ありませんでした」

た。よく見ると、部屋に通じるドア以外に、ベランダにある出窓の方も締め切られて、カーテンも閉まっていたので、中の様子を伺うことも出来ませんでした。私はいても立ってもいられなくなり、意を決して警察に連絡しました」

「密室だったと言うことですか？」

「はい、警察が駆け付けた時はもう昇が亡くなってから一日は経っているようでしたから」

昇の母親はそういうと目に涙を浮かべた。ポケットからハンカチを取り出し、零れ落ちそうな涙を拭きながら、

「ごめんなさいね、急に」

と言った。悪いことを聞いてしまったという嫌悪感があった。昇の母親がここまで追い詰められる光景を想像したことがなかったの
で、驚きさえ沸いてきた。

「ありがとうございます。私たちのような者にそこまで話してもらえて」

「いいえ、昇のお友達ですものね。知る権利はありますよ」

その後、昇が睡眠薬を多量摂取したことによる自殺ということまでを聞き出し、義高達は高橋家を後にした。

菅野は頼りないと思っていたが、調査に対する姿勢は自分よりずっと頼りになると思った。そのことは落胆よりも安堵感を与えた。

「部屋が完全に締め切っているんであれば、やっぱり自殺の線が濃くなるよね」

「ああ。一応後で当時の現場の状況について警察にも聞いてみよう。根本さんなら多少は教えてくれるよ」

「もし違わないとしたら、ぼくの疑いは水の泡になってしまうな」

「気を落とすなって。まだ何らかの推理が浮かんでくるかもしれない」

「でも、昇に兄弟がいることは知らなかったよ。そっちにも聞き込みを試みようか」

「いや、今は止めておこう」

「なんで」

「昇の自殺の件は、警察の領分だし、俺たち素人がそこまで動くとかえって怪しまれる。しかも兄弟が昇の母親のように律儀な回答をくれるとも限らないし、ここはケンジさんの見解をきいてからにしよう。俺たちが勝手に動くことは返って捜査をややこしくしかねない。小説と現実の違いなんだ」

「うん、菅野はどう思う。さっきの話を聞いた限りで」

「俺はやっぱり自殺のような気がするよ。両親はエリートのようなだし、そういう人は体裁を人並み以上に気にするから、自分から手を汚すようなまねはしないだろう」

「では他人に手を汚させてということはないだろうか？」

「お金持ちということで誰かを雇うことは出来るだろうが、密室で自殺を装って殺害することに何のメリットもないだろうからな」

菅野は煙草に火を付けた。

「ちよつと俺、体調が良くないんだ。この後家に帰って俺は休むよ。義高はケンジさんに今あったことを話してくれないか」

「そうだね、いいよ。早くかえって休めよ」

「悪いな」

駅に着いて、菅野と別れた。一人になると、急激に不安になった。もしかしたら、昇は本当に自殺したのかもしれない。警察が調べを終えているようだし、江崎教授の言う、自分の読心能力はただの思い込みだとしたらと考えた。今回の読みは初めての外れなのか、それは信じたくはなかった。これが事実だとすれば、自分ほとんどピエロになってしまう。まだ自分が読心能力を皆に露呈していないことが救いだ。このまま一人考え続けると自己嫌悪に浸ってしまうと思い、義高は『美辞麗句探偵事務所』に携帯電話で連絡を入れた。数回の呼び出し音の後、電話にでたのは、亜紀だ。

「もしもし、どうしたの？ ケンジは留守よ」

「そうですか。いつ頃戻ります？」

「さあ、いつも決まってるからね」

「わかりました。じゃあ、戻れたらぼくの携帯に連絡貰えます？
あと戻られるまで休んでいてもいいですか？」

「いいよ、そんな気遣わなくたって。なんせ君はただ働きだもんね。
がんばりすぎないよう、適当にサボらないとね」

「そう言われるときついな」

「あらごめん。でも給料がほしくなった時はちゃんと自分からいう
のよ。相当がんばらないと最初に言ったことを撤回はしてくれない
けど」

「まあ、ぼくが最初に言ったことですから。かわりませんけど」

「真面目なのね。わかったわ、戻ってきたら連絡する」

「お願いします」

電話の向こうでルナシーの『WISH』が流れていた。

あのころには戻れない

あやまちさえ返せない

正に今の自分の境遇にはまった曲だと義高は思いながら、携帯電話をズボンのポケットに入れた。

12. メトロポリスから

6

昇の兄である高橋健太は、現在アメリカ合衆国のイリノイ州にある、シカゴシティーに出張中だった。やり手の若手は支店のあるシカゴに移動してから海外の視野も含めた経営、営業力を身につけ、三年間修行させる会社の方針があり、二年間の海外生活は健太にとって苦になっていない。都心部には日本の企業も進出していて、日本人を見かけることは少なくない。健太の職種は大手の外資系で、勤めるY株式会社から数分のところに世界最大級の高さを誇るシアーズタワーが聳え、ミシガン湖も目と鼻の先に存在する。ミシガン湖は五大湖の一つで北アメリカ大陸中東部、アメリカとカナダの国境にある巨大な淡水湖群である。セント・ローレンス川上・中流部に位置し、上流からスペリオル湖、ミシガン湖、ヒューロン湖、エリー湖、オンタリオ湖が並び、総面積二四万五千三百平方キロメートル、日本の本州より広い。カナダ楯状地の外縁部にできた湖群で、洪積世の水河作用によって湖の形がつけられたものと言われている。

Y株式会社は十階建てのビルで、辺りを見渡すと決して高いビルとは言えないが、土地の総面積は結構広く、社員一人に対し八畳クラスの部屋が割り当てられていた。日本にいた頃は重役クラスでなければ決して味わえない境遇だったが、健太はこの環境にすっかり慣れてしまっていた。

健太は窓の外にある街並みを、なにをするとも無しに見ながら考え込んでいた。

「昇は居なくなってしまったか」

健太は独り言をつぶやくと弟と過ごした小さい頃の記憶が蘇った。勉強をよく教えていた。その反面、殆ど一緒に遊んだ覚えはなかった。健太が高校生になると、体力が持つ限り塾の勉強や友達との遊びで連日帰宅時間は遅くなり、昇と顔をあわせる回数も微々たるものだった。

健太は後悔していた。肉親を失ったときに初めて気が付く心境はどうにもならなかった。いや、自分が自殺に追いやったのかもしれない。

自分が世の中の楽しいことをもっと教えていれば、昇はまともな生活を送っていて、両親の教育にも嫌気がささず、自殺しなかったのかもしれない。健太は自分の兄としての勤めは失格だと思い込んだ。

外からパトカーのサイレンが鳴り響いた。

「相変わらず物騒だな、ここら辺は」

部屋のドアが開く音がした。それがきっかけで、健太はようやく正気に戻った。

「なにばやいているんだ、ケンタ」

部屋の外から現れ、英語で話しかけてきたのはアメリカ人のステイブンだった。ピンク色の皮膚に、痩せてはいるが身長が高く、グレー色のスーツは似合っていて、覇気のある高めの声はいつでも健康そのものだった。

「いや、別に」

「働きすぎなんじゃないか？　ちよつと喫煙所で休憩しよう」

Y株式会社の喫煙所は大きな休憩所であるホールの片隅に設置されていた。三年前から自分の仕事部屋でも禁煙が義務付けられ、今ではすっかり喫煙者の肩身は狭くなっていった。もう慣れてしまったが、喫煙所が隔離された当初、健太やスティーブンは煙草を吸わない社員が近くの休憩所でくつろぎながら自分の方を見ている姿がどうしても気になって仕方がなかった。

二人は喫煙所の椅子に腰を下ろした。スティーブンは愛用のピースに火が付けられると独特の匂いがした。健太も煙草に火をつけ、灰の深くまで吸った。

「風の噂で聞いたんだが、ケンタの弟は亡くなったのか？」

「まいったな、もう知っているのか」

「ああ、どのぐらい前なんだ？」

「二週間が経つ。葬式には忙しくて参加できなかったが、最近それを思い出して仕事に身が入らないんだ」

「例のプロジェクトか。これだからワーカホリックは好きになれないんだよな」

「そういうスティーブンも変わらないだろ。せめて、少し遅くなったが、今週末にでも日本に帰国しようと思っているんだ」

「当然だろう。本当は仕事を投げ出してでも帰るのが人間ってものだぞ。お偉い方もちゃんと言えば許してくれたはずだ」

勢いよく煙を吐くと、ステイブンの携帯電話がなった。

「わるい、じゃまた後でな」

ステイブンが立ち去ると、ホールは静寂に包まれた。彼のストリートな性格から、昇の死因を聞かなかったのは急な電話のせいではなく、彼なりの気遣いなのだろう。実際、健太の上司は誰も死因については聞いてこなかった。今さら説明するのも億劫なので、都合は良かった。

健太は海外からも通話可能な新機種の携帯電話から実家の電話番号をプッシュした。しばらく立ってから発信音が聞こえた。

「もしもし、健太だけど母さん？」

「健太なの、久しぶりじゃない」

文子からの声だった。音の伝達が悪く、声が途切れた。健太は何度も聞き返した。

「なに言っているんだよ。前連絡してから二週間しかたっていないだろ」

「そう？　今は仕事中なの？」

健太は通話する場所を移動し、だいぶ電波がよくなった。

「ああ、そっちはもう夜か。状況は少し落ち着いた？」

「うん、こっちは大丈夫よ。でもたまには帰ってきなさいよ」

「電話したのもその件なんだけど、今週末には帰国する予定なんだ」

「そうなの。あら、それならお父さんに知らせてどこか行く予定でも立てないかね」

文子は元気そうだったので健太は安心して近くにあった椅子に浅く座った。

「大げさだな。今はそういうのは控えたほうがいいよ」

「確かにそうね。で、どのくらいこっちに居られるの？」

「だいたい五日ぐらいかな。今は仕事が落ち着いたけど、また忙しくなりそうだから、五日が限度だよ」

「五日しかないの。残念ね。もう少し居ればいいのに」

「マザコンみたいなこと言うなって」

文子は機嫌を損ねたのか、会話が途切れた。それを打ち破ったのは健太だった。

「聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「昇なんだけど、本当に自殺だったの？」

数秒の間があった。短い時間だが、相手の戸惑いを感知するには充分な時間だった。

「今更なに言っているのよ。警察の方が確認したのよ」

本当に怒って言った。

「ごめん、それだったらいいんだけど」

「変な子ね」

健太は少しの間近況を話した後、文子に七月二八日の午後七時ぐらゐに帰国することを告げると電話を切った。

電話を切っても健太は昇の自殺説にひとひらの疑いがあった。

周りの皆は昇が自殺だと納得しているのか。

なぜ俺はそんな事が気になるのだろう？

おかしい。今日の俺はどうかしている。

たぶん忙しい日々から開放された反動だろう。

否、昇が自殺したのは七月十一日。これは彼が昔、道端にダンボールと一緒に捨ててあった、それから中学生二年生から高校二年の時まで飼っていた雑種の猫の命日と同じだ。いつも一緒にいて、まるで昇の友達は猫しかいなかったかのような関係だった。

だからなんなんだ。健太は考えるのを止め、七月二八日までによ
っておかねければならない仕事に取り掛かった。

ある人物の番号をプッシュした。

「もしもし俺だけど」

「先日はどうもれ」

機嫌良い返事が返ってきたが、呂律が怪しかった。

「二十八日に帰国する。その時會おう」

13. 復讐の決意

7

明子の元婚約者、加藤和夫はやり切れない思いをぶつける手段がなかった。枯れ果てた心身が加藤の氣力を削いでいった。真面目というレッテルを体全体に貼って生きてきた男。

今日の早朝死体として発見されたのは本当に明子だったのか。加藤は確認のため、警察所に出頭した。その時、灰色の壁でコーティングされた何もない部屋に案内され、目の当たりにしたのは、白いベットに横たわり、白い布で顔を隠された明子。血の氣を完全に失った彼女の額に触れた時、手のひらに伝わった無機質な冷たさはいまでも感触が残っていた。意識は遠くなりそうだったのをよく覚えていた。

変わり果てた明子の姿。顔をよく見ることは出来なかった。

嘘でもいい。警察の身元確認が間違いであってほしかった。あるいは、テレビのバラエティー番組でやるドッキリ企画のように、最後に実は死んでいませんでした、といった類のオチでもかまわない。

今でもそんな知らせがあれば……

身を削るような仕事の日々。帰宅すれば、たいがい家族の皆は眠っていて、ひっそりと疲れて寝るだけの日常だった。起きれば仕事へと向かうというサイクルは、自分が自分であることすら疑問に思えた程だった。

そんなモノクロの生活に、色彩を与えてくれたのは明子だった。

加藤は明子と出会った時、生まれて初めて運命を感じたといっても過言ではない。仕事上のトラブルで上司に怒鳴られ、鳴きそうになりながら頭を下げた時、忙しくて手が回らなかった時期に、ちょうど新しい仕事が始まり、顧客からの理不尽なクレームがあった時、いくら仕事が悪くても明子のためと心に言い聞かせれば大丈夫だった。

給料をこつこつと貯めて購入した結婚指輪。明子はいつもと雰囲気の違いで自分戸惑っていたけれど、デートの帰り際、自分の知っている一番綺麗な夜景が見えるところでのプロポーズに首を縦に動かしてくれたあの時。自分の絶頂期はこれからも続くと思っていた。

生涯で唯一運命を感じた恋人の損失。

どんなエピソードと天秤にかけても釣り合うことはないほどの不幸。自分が死んでしまうことよりずっと残酷だった。誰かの慰め言葉はいくら聞いても、心に届いていなかった。

明子と過ごせた時間は刻一刻と過去の出来事になってしまふ。しかし、自分にとって明子といった時間はいつまでも永遠のものなのだ。

朝に尋ねてきたマスコミの報道人。視聴率を獲得する目的で、カメラとマイクを駆使し、大切な人を失った人の不幸を全国に放送した。ただのスクープとして自分取材し、涙を流しながら思い出を語っている自分を仕事の種にしまった。

絶対に忘れない。

自分の精神に叩き込まれたモラルだの社会的常識だの、そんなも

のはどうでもよくなった。築き上げてきた真面目な性格なんて捨ててやる。

こんなことがあって、ただですまされる社会などなくなってしまえばいい。

だが、社会全体を恨んでもしょうがない。意味もない。恨むべき人物はただ一人。すべてをそいつにぶつけられたいことだ。加藤の怒りは絶頂に向かっていった。

悲しみが恨みに変化した。

悔しさが憎しみに変化した。

天使が悪魔に変化した。

俺は絶対に許さない。明子を殺した犯人を。必ず見つけ出し、この手で裁きを与えてやる。犯人は、人の心の痛みなど知らないだろう。せめて明子が受けた痛み、俺が受けた心の痛み、すべての苦しみを繰り返してやる。

家族も会社も俺のことを異常とみなし、排除するようになった。当たり前だ。人畜無害な性格の男が、ある時まったく違う人間に変身してしまえば、誰だってそのギャップに驚くだろう。後悔はない。自分の気持ちに嘘を付いてまで日常に溶け込もうとすれば、俺が先にこわれてしまう。

例えば犯人が捕まったとしても、何年でも待って刑務所から出てきた時に。どんな手段でもかまわない。

明子、明子、明子、明子、明子。

気が狂いそうになった。日常生活では理性を保たないといけない。でもこれもそう長く持つとは思えない。

はやく犯人を、お前を殺すしかない。

もう、誰も止められない。

止められるのは犯人の死。

14. スリープレス

8

ケンジから電話があったとき、義高は『美辞麗句事務所』近くにあるファミリーストランにいた。チョコレートパフェとドリンクバーで九十分程粘っていたのでちょうどよかった。向かいには寝不足から回復し、いつもの調子を取り戻した菅野が雄弁に最近呼んだ小説についてしゃべっていた。

「じゃ、行くか」

事務所に着いた時、ケンジはまだ戻っていなかった。亜紀はインディーズのヘビーマタルバンドのCDを聞いていた。名前を聞いても義高と菅野は知らなかった。むしろ菅野はジャズやクラシックといったアナログなジャンルの音楽聴かないので、このジャンルに関しては疎く、興味がないらしい。顔は不機嫌そのものだった。

「ビジュアル系バンド以外でも聞くんですか？」

「義高君知らないの？ ビジュアル系バンドは、初期に出すアルバムって殆どヘビーマタルのノリなのよ」

「そうなんですか。知りませんでした」

「詞なんか良く聞くと普通の全然ヘビーマタルバンドと違うよ。やっぱどんなバンドでも初期が好きね。売れたりすると、大勢に受ける詩を書いて、曲も落ち着いてくるし。このバンドは、ボーカルのリュウが女の子みたいでかわいいのよ。メイクもばっちり決まって

いるし」

CDジャケットに写っている五人は純白のファンデーションを顔全体に塗っていた。少年のようであり女の子のようで、美しかった。自分の顔を鏡でのぞきたくなくなってしまう。

「へえ」

義高は亜紀から男がメイクすることを聞くと不思議に不快感はなかった。美を追求するのは男でも正常なことで、異常ではなく、固定観念がたんに作用して、少しでも女の真似事をすることで普通に人は異常と思うだけだ。亜紀の発言は真面目なものだったので感心した。どちらかというと、実際ビジュアル系バンドのように、自分でメイクをすることはしないが、義高はそういう人を軽蔑する傾向はなく、ニュートラルに受け止めることが出来た。十人十色だと思うだけだった。

「気持ちがわるい、これじゃ男じゃないよ」

菅野は小声で言った。

「なんか言った？ 菅野君」

「い、いや、なにもいいっていません」

「ならいいけどね、あ、菅野君コーヒー入れて。奥の部屋につくつてあるから。三人分ね」

「わかりました」

さつき会った時とは違い、黒のドレスを身に纏った亜紀は、まるで女王様みたいだった。亜紀が言うには、この衣装はあるバンドのコスプレらしい。外見的な部分で女が男の真似をするのも義高には不思議だった。

「亜紀さん、ケンジさんはいつ戻ります？ 連絡があった時は直ぐに戻るから、事務所にいろって言われたけど」

「ならその通りなんでしょ」

まったく相手にされていなかった。そのぐらい自分で確かめておけと言わんばかりだった。

曲が変わると、亜紀はリモコンで音のボリュームを上げた。次の曲は爆音そのものだった。

「私はこの曲が一番好きなの」

激しいドラム、早弾きのメロディアスなギター。内臓まで響くベース音。なによりもCDジャケットに移っている美少年とは思えないような声で叫んでいる。憎しみの感情をむき出しにして歌っていた。義高は閉口した。

あつと言う間に終わった。亜紀はボリュームを元に戻した。義高は自分の聴力が低下していることに驚いた。

「なんて言う曲なんですか？」

『SLEEPWAING』

作詞 KOU
作曲 GURA
編曲 NARUSISU

現世に生きるあなたと 暗闇の中の俺
霧に包まれた幻想の夜 気が遠くなる
ナイフの刃が手首を攻める

絶望が体を刻む

あなたを失った時から 永遠に
夢遊病が俺を支配する

BREAK MY HEAT
THE SAME DEATH

覚めた都会の視線 強烈な欲望の渦
傀儡のように醜い 腐りかけた俺がいる
千夜一夜のあなたとの記憶が
美しく崩れ去った

飛び去った奇跡から 永遠に
夢遊病が俺を支配する

BREAK MY HEAT
THE SAME DEATH
TRUTH SLEEPWAINING

「いいでしょ？ でも、貸してあげないからね」

「はあ」

唾然とするしかなかった。義高は完璧に亜紀の世界に引きずられていた。

「コーヒーはいりましたよ」

「ありがとうそのデールに、適当に置いて」

亜紀はどうやらコーヒーをあまり飲む気がないらしかった。菅野は翻弄されっぱなしだった。

「奥の部屋って、パソコンとかありましたけど、あっちが仕事部屋なんですか？」

「そうよ。あと、極秘資料室と、寝室があるけど、鍵が掛かっているし、君たちは入室禁止だからね」

「余計気になって入りたくなるな」

菅野の小声は音楽にかき消された。

「えっ？ なに？」

「気にしないでください」

「余計なことは考えなくていいのよ。もし入ったらケンジの天罰がくだるだけだけど」

「それは、こ、こわい」

「俺の天罰がなんだって？」

急に他の男の声が聞こえたので、びっくりした義高たちは踵を返

した。

入り口にはケンジと捜査一課の根本が立っていた。会話に気を取られていたというより、二人の気配がまったくなかった。探偵と警察の職業柄なのだろう。義高は、気を抜いて陰口もたたけないと思った。

ケンジの長い金髪は乱れがなかった。

「どうでした？ 捜査の方は」

「順調に決まっているだろう。それより俺の問いに答えろ」

「菅野君が寝室とかにはいったらケンジが怒るって言ったの」

納得したらしい。特に極秘資料室に入るなどケンジから念を押された。どっちにしろ、自分のような人間が見ても役には立ちそうになかった。

五人が集まったところで一つのテーブルを囲うように座った。ケンジが咳払いをすると緊張感ある空気になった。

「まず、義高たちの捜査結果を話してくれ」

「はい、じゃあ俺が話します」

今日あったことを菅野が説明した。ケンジは退屈なのか、加え煙草で上を向いていた。逆に他の亜紀や根本は新人のお手並み拝見と言った感じで興味を示して聞いていた。文子から聞いた内容は義高にとってあまり納得はいきたくなかったが、得た情報はなかなかの

ものだったはずだと、義高達は自身があつた。

こういう捜査は、探偵のケンジよりも昇と交友関係があつた自分の方がスムーズに行くものだと言高はわからせたかった。

「以上です。俺たちの見解からすると、かなり自殺説の可能性が高いと思ってきました」

「なるほどね。全然捜査は進んでないってことか、期待はしてなかったからしょうがない」

「えっ？」

「そんな」

義高と菅野はそこまで言うかと言葉を失なった。少しの間、なにがなんだかわからなかった。根本はフォローと励ましの言葉を言ってくれたが、亜紀のほうは急に無関心になった。もし詰めが甘いと注意されれば仕方はないが、自分としては情報を聞き出せた方だと思っていたから、義高の受けたショックも大きかった。

「すいぶん前から警察が報告した情報をそのまま反芻しただけじゃないか。むろん、昇の遺書を手に入れている分、警察のほうがよくぼどましたが」

「遺書？　ですか」

「やはりそれも知らなかったような。俺の予想はよく当たる。根本、預かりものの遺書を見せてやれ」

「はい、これは昇君がなくなった後に見つかった遺書だよ」

ケンジは義高たちがまだ気が付いていないと予想して、根本に遺書をわざわざ持ってくるよう頼んでいた。

昇が最後に残した遺書は、A四のコピー用紙にパソコンのワードで打った文字がプリントアウトされているだけのものだった。だいたいぶ折れ線が入っていて、汚れが付着し、まるでシュレッダー行きを待っている没になった書類のようだった。

「実際パソコンに詳しい捜査官が調べて、この文章の保存された生データ更新日時から、昇君が生前に書いた物だと確認もしているんだ」

根本は遺書を手渡してきた。

15. 昇の遺書

この文章は遺書になる。

発見者が直ぐに現れることを願って、この歪んだ世界全員にこれを捧げる。

下界との接触を遮断した事で、心が海のように広くなった気がした。恨み、憎しみ、嫉妬、怒り、緊張、ストレス、悲しみ。精神に及ぼすマイナス要素を取り除いた気になっていた。自分はなんでも出来るという意味を持った。

朝早く、雨水を傘で凌ぎ、今日のノルマを達成しに駅へ向かう人々を見下ろした。中には社会的に認知された人も、偉い人も、フリーターも、学生もいる。ぼくには誰もが同じに見えた。また、誰もが自分より苦勞ばかりでつまらない人生を送っているように見えた。

己の体力を削り、精神をすり減らすのであれば、自由になって過ごせるほうが利に叶っている。他人に、親に、知り合いに何を言われても構わない。心の中でそいつらの事をこう言うだろう。やりたいたい事も出来ずに生きていることが楽しいのかと。もし言葉にしたら彼らはやりたいこともやっているし、例えそうでなくても未来を考えて生きていると言うだろう。お前のこれからは暗黒だと返してくるだろう。しょせん戯言だ。でもそうなる前に彼らと接しなければ、変な争いも起きないし、お互い嫌悪感に会わずに済む。

ぼくは未来も予想していた。自分が今老人であれば、過去の足跡が無い限り生きる屍として存在する。だから今しかない。世界から

隔離し、まるで自分以外誰も存在しない状態になるには。

前にぼくの友人がこう言っていた。

「人は自由になれば、それが不自由になるんだ。むしろ少し縛られているぐらいがちょうどいい」

確かにわかる。だが、それは寂しがり屋か時間の使い方がわからない人、あるいは普通の考えをもった人に言える。そうでなくても対外は友人の意見に当てはまる。

自分はどこまで一人で居られるか。ぼくはふと冷静に分析した。会話も電話さえもしないで、どこまで言葉、思考を溜め込むことが出来るか。夜を超えて、やがて朝へと変化していく空は現実から引き剥がした。人より少し早く起床する鳥のさえずりも、郵便配達員が乗っているバイクのエンジン音も、すべてが自分から離脱したものが聞いている気がした。幻覚のような夢を見ることもある。この感覚が世間でいわれている夢遊病なのだろうか。例えそうだととしても、ぼくは今の感覚が好きだった。

ぼくの好きな感覚、否世界を邪魔するのはいつも現実という世界だ。何かと自由になれたと思っても外力がぼくを引き戻そうとする。これは自然の摂理でもない。所詮争い事が好きな人間の成す事。現実世界の心理は弱肉強食だと思う。高学歴、エリート、経済力、権力、主役、ナンバーワン等。複雑に絡み合っているようで、実は簡単なことなんだ。強者は弱者を永遠に踏み台として使用し、時には跡形もなく食い尽くす。それをあからさまにしない様、皆偽善者を演じ、複雑に捻じ曲がっているだけのことだ。

でも、これ以上人間の悪口を言うのはよそうと思う。今までこの

文章で言ってきた内容がぼくにも当てはまってしまいうから。

孤独でいる事にも飽きたとき、ぼくはもう一つの世界に行こうと思う。例えその意味が普通の人に理解できなくても、違う世界に行く手段ぐらいはわかるだろう。

義高は黙読し終った時、痛烈な思いが心を錯綜した。自覚した通り、自分は昇のことに対しなにより一つ理解していなかった。むしろ生きたなかで、自分以外の他人を充分理解している人物が一人でもいるのかさえ曖昧模糊としていた。とても血のかよった人間だとは思えなかった。

「友の死を悲しむ気持ちがあるなら、全力で解決したらどうだ。このままだとお前たちの行き着くところは、自殺説が高いという思いが勢いを失い、やはり自殺だったんだと断定して終幕を迎えることとなる」

「現時点の情報と今見せてもらった遺書がより決定的になってきたと思うのですが」

菅野は遺書まで見せておいて、これからどう解決していけばいいのかといった表情だった。

「阿呆かお前は。俺は解決しろと言っているんだ。自殺と決めていたら言わないだろ。まだ俺もお前達もまだ情報不足なんだよ」

ここで解決に繋がる糸口を発言できれば株がぐっと上がる時だというのに、義高にはなにも浮かばなかった。

「今日、お前たちが高橋家の聞き込み作業を終えてのんびり休んでいる間、俺はまったく違った仕事を同時進行しつつ高橋家へ聞き込みに行った」

「えっそうなんですか？」

言い終えると、口を半開きの状態で固定した。

「鈍い奴のような顔をするな。それで高橋家の長男である健太は七月二八日に帰国するそうだ」

「出張している兄さんですね」

「調べれば分からないことも無かったんだが、あそこの奥様は男好きだ。なんでもしゃべってくれそうな勢いだったよ。帰れなくなりそうだったが、流石にエリートのお様と不倫関係だけは御免だからな」

「ケンジは捜査より、そういうところを強調するんだから」

亜紀は呆れていた。緊張感が和らいだ。現実問題として男好きではなくてもケンジのような男が紳士な態度で訪問してくれば、帰したくない女の気持ちはわかった。

「兄さんと言っても、海外出張が長く、家族暮らしは最近していなかったのでしょうか。それが手がかりになるのでしょうか？」

菅野は妙にケンジに食って掛かった。朝来た時とは別人だったが、義高も菅野の感性に近いので文句は言えない。

「この機会を逃したらもうお前たちは解決できないだろう。いや、誰も関心を持たなくなるから、そこで終わり。彼は自殺に決定」

「そうなるでしょう」

義高は自然に言葉が出た。

「根本さんにお聞きしたいことがあるんですが」

「なんだ、義高君」

「はい、昇の自殺した部屋は密室だったと親は証言していました。その状況をもっとくわしくお聞きしたいのです」

「わかった」

咳払いをしてから続けた。

「彼が自殺と断定したのは遺書でもなく、母親の高橋文子の証言でもなく、現場が密室だったことだ。家宅捜査もして彼の部屋に鍵が掛かっているとして、外側から中に入れる手段は見つからなかった。要は彼の意思がないと、ドアか、窓ガラスを壊さない限り中には入れない状態だった」

「てことは、誰かが彼を殺して中に閉じ込めることも、元々中にいて彼を殺すことも出来ないわけですね？」

「まず不可能だろうね。しかも彼は睡眠薬を大量に飲んでいたし、外傷もない。薬の容器は近くで発見されている。疑いの余地はないよ」

「それでもねえさ」

「えっ、なんで、なんで？」

亜紀は意外な展開に興味を示すらしい。

「密室でも十分彼を殺す手段はあるからさ」

「そんな方法があるんですが？」

「推理小説ならともかく、現実にとこまで賢い犯人はいるでしょうか？」

「俺に聞くな。ただ、手段についてはまだ話すことは出来ない」

「うそー、ずるいよー」

「そうですよ」

「せいぜい自分で考えるんだな。お前達が思いつかなくてもいずれは話すから。今は俺にも確証できるものがない」

一同期待が落胆に変わった。もし自殺説を打ち破ることができるとすれば、ケンジのもっている推理が唯一の頼りになるだろう。

「じゃあ、殺人鬼の捜査はどうなったの？私、罪もないOLとかを殺すのは許せない」

「確かに、亜紀もいつ襲われるかわからないな」

「怖いと言わないでよ」

「気を付けろとしか言えないな。俺は守らなければいけない女は沢山いるからな」

満面の笑みだったケンジは鏡で身だしなみをチェックしていた。その時は直ぐに厳しい表情に戻った。

「今日の捜査についてお聞きしたいのですが」

「得た情報は、現場近所の住人が不信人物を見たらしい。体格は百八十前後の痩せ型。黒ずくめの服装で、黒い帽子を被っていたらしい」

義高と菅野はまず消えた。二人は身長が百七十センチに届くか届かないぐらいだった。第一、義高たちには殺人出来る度胸もなかった。

「後は今朝もいいましたが、再捜査した結果、死体から指紋は発見されなかったようです。傷の状態から、ナイフ等の鋭利な刃物と断定していますが、近くの店で凶器と思われるナイフを購入したという人物の情報もありません」

「犯人は用意周到ですね」

「自分から証拠を残すような奴はあまりいないだろ」

ケンジは菅野の発言に呆れていた。こちらの事件もまだ始まったばかりだった。

「他にあるとすれば、現場に靴底の一部と思われる破片が残っていました。鑑定官の話では、その素材についてはどこにでもあるようなものだったらしいです」

根本の話を聞いた一同は反応が鈍かった。犯人の履いていた靴という断定で出来ないわけだし、証拠としては不十分だったからだ。

「なんか気軽に夜道も歩けないわね。これじゃ遊べないからストレスがたまっちゃう。ねえ、根本さん、私のボディーガードやってよ」

「甘えた声で言われても、仕事があるんで」

「亜紀が劣りになればいいんじゃないか？ 根本に影から見張っていてもらって、襲ってきたら現行犯で逮捕するというのはどうだ？ ボディーガード兼、事件解決と一石二鳥になるだろ？」

「もう、冷たいな。あなたたちには頼みませんよ」

亜紀は目元に指をあて、あっかんべーをした。

「夜遊びは控えてくださいよ、亜紀さん」

「根本さんに注意されなくても、私を守ってくれる男なんか一杯いるから、大丈夫です」

「すねないでくださいよ」

亜紀はそっぽを向いて聞いてない。ふりをした。

「自分は自分で守れと言うことだ。そこの貧弱な二人も気を付けろ」

殺人犯がこの近くに潜んでいるかもしれない。女性だけをターゲットにしている確信はなかった。誰でもよかったという動機で無差別殺人を犯す容疑者は巷でも溢れているし、自分だっていつ襲われるかわからないのだ。むしろ犯人を追う探偵事務所で働いている情報犯人にリークすれば危険性は高くなる。

「話しは戻すが、前にお前が言っていた武本博之の方も忘れるな。彼からどんな些細なことでも聞き出すんだ」

「昇の友達ですね。わかりました。あつ、そういえばさっきケンジさんが言っていた不信人物が武本のイメージにぴったりなんですけど」

「同時に聞き込んでくれ。どうしても怪しいと思ったら俺に報告するんだ」

「はい」

もしかしたら偶然が起こるかもしれないと義高は思った。昇の調査と殺人事件の調査が同一線につながれば、こんないいことはない。

「それでは私は署に戻りますので、失礼します」

「今度会う時、たまにはいい知らせを持って来い」

「厳しいっすね、ケンジさんは。出来るだけそうなるようがんばります」

スポーツマンのようにさわやかな挨拶だった。朝夕変わらず元気な根元が羨ましかった。

それを機に一同は事務所から解散した。義高と菅野は帰路をたどった。

「なあ、ケンジさんの言う密室での他殺方法ってどのようなことかわかる？」

前を向きながら菅野に聞いた。

「うーん、遠隔殺人とかにしても、昇には外傷がなかったって言うしな。さらに巧妙なトリックを使ったのかな」

「巧妙なトリックか。例えばどんな？」

「携帯電話で脅迫するんだ。お前は死ぬしかないとな。でも遺書の内容からすると、悪徳宗教関連の人にマインドコントロールされていた可能性も捨てがたい」

「昇の携帯電話の着信履歴は、七月に入って誰もなかったらしいよ」

「それも悲しいな」

「どっちにしても現実離れしているな」

「前にも聞いたと思うけど、義高はどうして昇が自殺じゃないって思ったんだ？」

「読心したから、は言えない……」

「親が自分の息子を亡くしても全然悲しそうな態度を見せなかったからだよ」

「今思うに、あまりにも疑う動機としては薄いんじゃないか。他にないの？」

「どうしてだろう？ 江崎教授には本当の事を言えたのだが、菅野に対してはなぜかブレーキが利いてしまった。」

「これといった動機はない」

きっぱりと言った。菅野は急に空を仰ぎ、煙草を取り出すと火を付けた。

「そうか。俺には今やっていることが無駄のように思えてきたよ。ケンジさんの推理がなければ完全に俺たちの負けになる」

「弱気になるなよ。前はぼくよりやる気になっていたじゃないか」

菅野は苦笑いをするだけだった。

16. 第2の殺人

9

私は人を殺めることが生きていく手段だと最近わかった。厳然たる事実で、これを抑制するのは不可能だ。強いて言えば幻覚を見るようになった。いつも私が人を殺し絶頂を味わっている場面だ。その時は体の細胞がすべて活性化する程の万能感もある。

殺人の手段は様々だが、殺して、なお人体を解剖したり、首だけをどこかに放置したりという趣味はない。以前から私は心得ていたが、初めて人を殺した時もそれは変わらなかった。

ただ実際に殺した瞬間が私の絶頂なのだ。

夜が私を発狂者とさせる。

得体の知れない凶暴な肉食動物になるのだ。

血液が沸騰し、動かずにはいられない。

今日の獲物になる人物は誰でもよかった。

マスコミは私の犯行を女性狙いだと思っている。やり易かった。過去の経験から、殺人鬼は弱いものを狙ってくるものだと思っている。

固定観念に縛られている内は、意外な事に対して防衛能力がなくなる。ある地域で犯罪が起これば、違った場所での犯行もたやすく

行える。

私はH町にいた。以前にも訪れたことのある場所だ。東京の西端に位置したこの町は、どこから見ても田舎である。郊外という部類に入れるにはためらいがあった。夏という季節が鬱蒼とした草の生える川辺を構築し、水かさが減っていたせいもあり、まるで草から川の流れる音が聞こえてくるようだ。街灯は数える程しかなく、周りに聳え立つ山々があたりをいつそう暗闇にした。

午後十一時を過ぎた時刻ともなれば、この町は眠っているのと同様になった。民家から漏れている部屋の電気は疎らで、時折車が通り過ぎて行くぐらいで、人の気配がなかった。

唯一の住宅密集地を少し離れば、物騒な夜道が現れた。ここで待ち伏せていればきっと獲物がくるだろうと私は思った。

相手に関しては無心だった。これからやるべき行動のことも、行動を起こした後のこともなるようになるしかない。ただ、現場に証拠だけは残してはいけない。犯行現場をくだらない警察や一般市民に見つかってしまったら、私の欲望を満たすことが出来なくなってしまう。

私は精神異常者ではないと思う。私利私欲のために犯罪を犯しているだけだ。世間はそれがわかっていない。食欲や睡眠欲、物欲、性欲と同類に位置しているのだ。獲物の対象になる人に対して、恨みや憎しみは存在しない。ただ、鋼鉄のような精神を持っていることは否めない。

熱風が私の体温を上昇された。夏という季節としては決して着るものではない服装をしていても不快ではなかった。緊張感とうまく

絡み合い、私を前進させてくれた。

手袋に手を通した。顔面を帽子で覆った。空気から皮膚を遮断すると、いよいよ私の心は興奮してきた。脈拍が上昇し、発汗が激しくなった。ウォーミングアップは万全だった。私は躁状態になっていた。

足音が聞こえてきた。そう遠くはない距離だった。一瞬見た限り、健康なスポーツマンといった男だった。短く刈った髪の毛がぴったりだと思った。

個人的な感覚として私は彼のようなタイプの男は好きではない。どこにいても元気をアピールするためにうるさくて、健康と肉体を武器にして自信に満ち、偉そうに振舞うのだ。

今日の獲物は私の中で完全に決定した。日夜鍛え上げた肉体をナイフで使えなくなるまで切り刻み、絶望の淵で死を与えてやろう。

私が彼を殺した後に見えられた時、あんなに元気に明るく育った息子が突然こんなことになってしまふなんて、と親は悲しむだろう。馬鹿の一つ覚えで悩みもなしに生きてきた息子と、幸せ一杯の家族が崩壊する情景が脳裏をよぎった。私は思わず笑い声をたててしまふようになった。

回り道をし、そこで隠れて待っていれば、直ぐに背後をとれる。わたしはこの周辺の地理に関しては完全に把握済みだった。

狭い路地に入った。近くに覆い茂った大木によって私の姿は隠蔽された。

男はまったく気付いていない様子だった。たぶん、気付いていたとしても虫か動物が草むらのなかで潜んでいるのだと勘違いするのが関の山だろう。田舎もののおめでたさがかえって私を味方に付けてくれるのだ。

足音が私の直ぐ近くを通しすぎたことを確認すると、物音を立てないように動いた。

路地を出ると完全に男の背後を取った。よく観察すると、男はヘッドホンで音楽を聴きながら歩いていた。これは私にとって好都合だった。

男の歩調は早かった。それ以上のスピードで追いついた。男が振り向く様子はなかった。

私はポケットからナイフをすばやく取り出し、男が振り返る瞬間、飛びかかって背中に突き刺した。

硬い肉にめり込んでいく感覚があった。力を入れないと、なかなかナイフは男の体に侵入しなかった。切りかかる形であれば、刃先を振りかぶる勢いがとまってしまい致命傷にならないとどこかのマニュアルに記載されていたことを思い出した。

男は何が起こったか把握出来ずに、ただ呻き声をあげた。この場所では誰にも聞こえない。

男の体内から赤黒い液体が流れた。私はそれが付着しないよう直ぐにナイフを男の体内から抜いた。前屈したような姿勢になると、男の耳からヘッドホンが外れた。

刺したナイフが男の着ていたTシャツに楕円形の穴を作り、そこを中心として赤い染みが広がっていた。

ようやく男が反撃をしてしようと拳をつくり、私に殴りかかろうとした。まるでスローモーションで現実を見ているようだった。ちよつと手間取っても充分交わせるタイミグだった。いくら強そうに見えても、私が裁きを下せばここまで非力になってしまうのかと優越感に浸った。

次に右胸にナイフを刺した。男の繰り出した拳は、私に当たる前で力を失い、落下した。

返り血を浴びないポイントを狙ったので、私の服は汚れなかった。男は地面にゆっくりうめき声をあげながら膝をついた。刺さった箇所を手のひらで押さえ、血の海が付着した自分の手のひらを凝視すると、信じられないといった表情で傷口を凝視していた。

男の体が痙攣し始めた。

当人のダメージは知る芳も無かったが、念のため男の口にタオルを巻いた。抵抗はなかった。

むき出しになっている腕の筋肉を縦にスライスした。骨の切断が完了するとあっけないもので、切断面が魚をさばいたときのように開き、赤黒い肉がむき出しになった。時間差で血が噴出した。次に太ももを横にカットした。手足の筋肉組織は意外と脆かった。男は地面に仰向けに倒れた。

タオルを取ってやった。もう息をする力ぐらいしかないだろう。さっきまでの元気な男の姿はなかった。

男が最後の力を振り絞った声を発した時、私の興奮はさらに高まった。心臓の動きが手にとるようにわかった。体中が痙攣してきた。

「今まで鍛えてきた体を切り裂かれるのは痛いかな？ 私はすごい気分がいい」

私の声は高揚していた。

いくら鍛えても人間は無力であることを私は教えた。だが男はそれを実感する時には死んでいるが。

男の目が空ろになってきた。意識が朦朧として、自分を自分として意識することも困難になっているのだろう。呼吸動作は蚊が泣く程度に弱弱しく静かになった。

道路は鮮血に染まっていた。前に殺した女より血液の量が多かった。赤い液体は低い方へと伝っていつて、数メートル離れているマンホールに達した。

絶命の一撃を男の胸に突き刺した時、私はあらゆる快楽を凌駕した感覚を得た。

17. V系コス女

10

モーニングコールは、『美辞麗句探偵事務所』からだった。亜紀は今日あるバンドのライブに行く予定があり、二日の間、事務所を留守にするということで、義高にケンジの助手代わりをしてくれというのだ。

早速支度を終え、事務所に着くなり、中には異様な衣装をきた女の子？ が座って待っていた。義高は事務所を出ようと思ったが、とどまった。

「あの、ケンジさんと亜紀さんはいますか？」

義高は客かもしれないのに咄嗟で聞いた。女の子は髪の毛を真っ赤に染めて、目の周りにはグレーのアイシャドウをこれでもかというぐらい塗って、赤黒い口紅、顔色が真っ白のファンデーション、黒いスカートに編みタイツ、厚底靴といったいでたちだった。

「あんたがケンジの弟子になった人？」

「はい、そうですけど」

「よかった。女じゃなくて。私はてっきり女かと思って、嫉妬して損した」

「聞いてなかったんですか？」

「教えてくれないのよ。ケンジだったらいじわるだから。でもそこがまたそそられるのよね」

微笑ながらそんなことを言われたので、義高は苦笑いするしかなかった。

「ライバルは亜紀なのよね。いつとも一緒にいるし、はやく手を打たないと先を越されちゃうわ。でも今日は亜紀とライブに行くからいいか。ねえ君？」

「なんででしょう？」

自分より年下に見える目の前の女の子に、敬語で接する義高は情けないと思った。

「今日はケンジの事をきっちりガードしてよね。危険なめにあわせたら承知しないから。あっ」

「次はなんですか？」

「君頼りなさそう。ちゃんとケンジを危険から守れるかな」

ならそういうことを言うなと心で突っ込んだ。

「死んでも守るからご心配なく」

義高は呆れた口調でいった。

「けっこうかっこいいこというのね」

「いや、そういうつもりで言ったんじゃないけど」

「そういえば、君何歳？」

「二十歳です」

「へえ」

話は途切れた。終わるかよ、と突っ込んでやりたかった。

「あなたは何歳なんですか？」

「年は聞いちゃ駄目。ビジュアル系は永遠なの」

「はあ」

どうやら会話のキャッチボールは難航しそうだった。義高はここに集う連中は皆同類だと気がついた。

「おまたせ、ユキ子」

亜紀は勢いよくドアを開き現れた。ユキ子という女の子に負けず劣らず派手であり、着ている服は似ていた。どうやら今日見に行くバンドの、メンバーにいる誰かの真似をした格好らしかった。

「遅いよ亜紀。待ちくたびれた」

「あら、義高君も来てたの？」

「無視しないでよ亜紀。今日は十時からファン倶楽部会があるんだ

から忘れないでよ」

「はいはい、知ってるよ」

「あの、ライブって何時からやるんですか？」

「午後六時開演よ。だからけっこう急がないとね」

義高はなんで急ぐんだよ、と言いきうようになった。まだ午前八時を過ぎたあたりである。

「やっとその気になったね。メイク道具はちゃんと持った？」

亜紀は手のひらを叩いた。

「やばい、ちょっと待っていて」

「もう、早くしてよ亜紀」

義高は言葉がでなかった。朝からここまで元気なのは才能だった。

「うるせーな、朝から」

「ケンジだ。おはよう」

もう来ていたのかというと、ケンジは現実離れた女二人の衣装に目もくれず、ソファに座った。

「今度またデートしようね」

ユキ子の声が急に高くなった。こういう姿は、まだあどけなさ
と純粋さが伺えた。

「わかった。最高のデートコースを考えとくから、楽しみに待っ
てくれ」

「ありがとう、やっぱりケンジ大好き」

とり残された状態で、義高は帰りたくなってきた。

「義高もいたのか。あいさつぐらいしろ。弟子の基本だぞ。まあ今
は許してやろう。で、今日は俺の仕事に手伝ってもらうからな。こ
れから現場にいくから着いて来い」

「どんな仕事ですか？」

「殺人事件の捜査だ」

「殺人事件？　また起きたんですか」

「ああ、詳しいことはあとで話す。けっこう体力的につらい仕事だ
からしっかりしろよ」

「わかりました」

このごろはよく事件が起こるようだ。しかもよりにもよって初
の探偵らしき仕事に殺人事件だとは思わなかった。

義高はケンジからバックを受け取った。なにが入っているかは疑
問だったが、ときかく重かった。昨晩は持って行ってなかったので、

どうやら操作も本腰をいれる段階に来ているのだろう。

「じゃあ私たちは先に出かけるね」

「浮気しちゃ駄目だよケンジ」

ユキ子は深刻そうにいった。どうやら本気らしい。

「ユキ子もあいかわらず一途ね。あんまり人間を信用しちゃ駄目よ」

「ひどいよ亜紀」

二人が去っていくと、急に事務所は静かになった。ケンジはお構いなしといった感じで煙草に火を付けた。

18. ダイイングメッセージ

11

犯行現場は東京都のH町というところだった。『美辞麗句探偵事務所』からは車で二時間半の距離だった。ケンジが運転するセダンの車内で二日前に起こったOL殺人事件の事を話した。

「昨日ちょうどお前らが帰った後、被害者森明子の婚約者加藤和夫が事務所に来たんだ」

「えっ、そうなんですか？ 様子はどうでした？」

「かなりやつれていた。仕事のほうは、会社の許可をもらってしばらくは休暇をとっているらしい」

「体のほうは大丈夫ですかね？」

「それ以上に気になるのは、探偵に依頼をすることだな。確かに俺の仕事は信頼があるからというのわかるんだけどな」

義高は軽く受け流した。

「どんな依頼内容だったのですか？ やはり犯人捜し？」

「ああ、警察よりも先に見つけるという条件付きでな。捕まる前に犯人と話しをしたいらしい」

「じゃあ、正当な依頼でしょう。ケンジさんが気にするのも変です

よ」

ケンジはため息を付いた。

「相変わらずだな。ちょっと考えれば素人でもわかるんだけどな」

「どういふことですか？」

「だから、条件は警察より先に犯人と話しがしたい。しかも結婚前の恋人が殺されているんだ。犯人に対する恨みも並大抵じゃないはず」

「ということは……」

義高の目は見開かれた。

「やっとわかったようだな。そうだ、加藤和夫は俺に犯人を見つけさせ、身柄を少ない時間でも自分に預けてもらう間に、犯人を殺す可能性がある」

「ケンジさんが犯人を見つけてしまっただけじゃないんですね」

「そうもいかねえさ。俺は客として警察や加藤和夫から依頼を受けているのだし、このまま放っておけば犯行は続くだろう」

車は西東京地域を進んだ。それに比例して景色は田舎になった。ケンジはFMラジオの内容が退屈だったので、ラルクアンシエルのCDをかけた。

「でも、殺人に殺人で対抗するのもなんだか悲しいですね」

「探偵業なんてそういうものだ。恨み、疑いと言った人間の持つ負の感情を解決するのが仕事だ。結果が良い方向に行くとも限らない。いちいち悲しんでいたら体が持たないぞ」

運転するケンジの横顔は日にあたって、一段と日本人離れた整った顔に見えた。そこにどことなく孤独な空気が混ざっているように見えた。

「今日菅野はどうした？」

「いや、ぼくが呼ばれて急いでいたから、連絡はしていないです」

「まっいいか」

投げ遣りな態度になった。しばらくケンジとのドライブは続いた。緑の多い風景になってきた。

「もうすぐ着くぞ」

ケンジが指差した方角には立ち入り禁止用の網が張られた区域があった。そこには数人のやじうまと三人の警察官がいた。

近くに車を止めると、一人の警察が近寄ってきた。

「ごくろうさまです」

「佐々木さん、依頼していたように現場はまだそのままだよね？」

佐々木は、意志の強そうな目を別にすれば、警察ではなく気の良

いサラリーマンといった印象だった。ケンジの登場で野次馬の中にいた女の子二人は、あの人カッコ良くない？ とか超カッコいいと言いつつ合っていた。ケンジはその様子をまったく受け取っていなかった。

「はい、これから本格的な捜査が始まりますんで、こちらの方は？」

「弟子だ。最近アルバイトで雇っていてな。それよりさっそく見させてもらう」

ケンジと佐々木は義高を気にしないで話あった。

「いやあ、こんな平和な場所で殺人事件なんて何十年ぶりなんですよかね」

義高は気にしないであたりを見渡した。立ち入り禁止の区域に入ると、現場には血が凝固し、赤黒いシミが道路を染めていた。被害者の倒れていた位置は、テレビドラマでよく見る白いテープでかたどられていた。

もう一人の田中と呼ばれる警官は、野次馬を現場に入れないように警備していた。やせていて、冷たい目をしていた。何となく挨拶をしない方が良いと判断し、目を合わせないようにした。

「これは？ おい義高、バックを持って来い」

はいと返事をする、義高は、後部座席に置いたバックをケンジの前に持ってきた。ケンジがバックを空けるとルーペを取り出した。それ以外の中身は黒い布に包まれていて確認ができなかった。

「この位置は被害者が倒れていた所だよね？」

ケンジは地面を指差した。

「そうだ。ちょうどこの位置は被害者の手のひらが置かれていた」

工藤というもう一人の中年警官が答えた。中肉中身で貫禄があった。義高も近寄って見た。

血で書いたような、それでいて、ただ被害者が偶然血の付いた手のひらが地面について出来た跡のようなものだった。どちらかは判別できなかった。

「私も気になったんだが、これはアルファベットのSとBに見える」

「ああ、確かに被害者が残した痕跡が強い。これはダイイングメッセージかもしれない」

「ダイイングメッセージってなんですか？」

「被害者が死に際に残す、事件に何らかの意味を持たせたメッセージということだ。何かを暗示しているのかもしれない」

「もしそうだとしたら、私たちの捜査領域ではないですね。もっと指紋とか物的証拠がほしいところです」

「まだ見つかってないのか？」

「ええ、犯人は結構用意周到のようです。現場近くには髪の毛一本残っていません。事件が起きたと思われる時間は被害者の容態から

昨晚だと推定されています。その時間、不振人物をこの辺りで見た人さえまだ見つかっていません」

「前回と同様だな。現場には被害者の遺体と血痕しか残っていない。もしかすると、犯人はプロの可能性も出てくるな。ただ、この文字は気になるが」

「いや、一つ有力な証拠になると思われる事を見つけたよ」

工藤は道路の脇にある土の地面を指差した。わき道があり、奥には木が植えてあった。工藤が歩き出すと、ケンジと義高はそれに付いていった。佐々木の方は携帯電話が鳴り、そっちの対応にあたった。

「ここを見てくれ。これは靴跡だ」

「確かにそうだな。だが工藤さん、それだけでは証拠にはならないと思うが」

「いや、H町は昨日朝から夕方まで雨が降っていた。その前は一週間晴天だったらしい。それに硬い土質であるから、結構な重圧が掛からないと足跡は付かない」

「少なくとも昨日の朝以降の土が雨によって柔らかくなるまでに出たものだという事か。サイズは二十五センチってところか」

「靴の種類によって多少の大きさは異なるが、調べによると二十四センチ半から二十五センチの靴だという結果が出ているよ。型からすると、ローファーとか皮の靴のように思われる」

「男にしては少し小さく、女にしては大きい。多摩川沿いで起きた事件で、不振人物を見た人の証言は、体格が百八十センチだから、そっちと結び付けるのは難しいか。否先入観を持ってはいけない」

「先ほど入った情報なんですが」

佐々木は走ってきて、話の輪に割り込んだ。

「昨晚のよる十時、この場所から最寄りのM駅で怪しい人物がいたとのこと」

「怪しい人物？」

「はい。全身黒ずくめで体格は細身、身長ですが、百八十センチはあったとのこと。季節はずれの服装をし、帽子で顔の半分以上を隠していていたらしいんです。その時間となると、M駅はおりる人が極端に減少し、かつその様な姿だったので目立っていたようです」

「バックとかの持ち物はあったのか？」

「そこまでは覚えていないようです。ただ、切符を受け取った時、買った場所がT川駅だったそうです」

「T川駅」

ケンジは考え込んだ。

「ここからそう遠くはないな。ただ、同一人物か、殺人による影響で他の犯人が連鎖反応で起こしたものはまだ検討できないな」

工藤がそう言うと、三人は現場近くに帰り、田中が警備していた野次馬は誰もいなくなっていた。多分ケンジの登場で女の子たちが騒がしくなり、捜査の邪魔になりそうだったので追っ払ったのだろう。誰かを追っ払うのは何の苦もなく出来て、むしろいいきっかけになったと思っているに違いない。

工藤は電話で誰かと連絡を取っていた。

「被害者安原辰巳の情報はるか？」

ケンジは佐々木に聞いた。

「はい、被害者は殺害される数時間前、Z島駅にあるスポーツジムに通っていたそうです」

「頻繁に行っていたのか？」

「話しによると、週末は必ず来ていたみたいです。彼は大学生で、平日も学校が終わった後等にも来ていたみたいです。それと、彼はよくジムが終わる十時近くまでトレーニングをしていたそうです。その時間から電車を乗り継いで、駅から歩いて帰宅していたみたいなので、どこかに寄り道していた可能性は低いですね」

「じゃあ、被害者が夜遅くにここを通ることは結構あったわけだ」

「知っている人間も何人かいるみたいですね。ただ」

「なんだ」

「ええ、被害者との交友関係を捜査している時、必ず相手から言わ

れることがあるんです。あの人が殺されるわけがないって。少し前までは柔道で段持ちだったそうです」

「不意打ちを食らってしまえば、どんな強人だって手が出ないだろ」

「そうですね、でも皆さん信じられないといった状態で、聞き込み捜査は手こずっています」

ケンジは佐々木との話しを途中で打ち切って、数分辺りを見回っただけで捜査を止めた。警察からは他の重要な情報は得られなかった。

ケンジはセダンにキーを差し込んで発進させた。まだ捜査を続行している検察官たちが小さくなっていた。

「この事件も警察に依頼されたんですか？」

「いや、これは俺のボランティアだ。偶然知り合いの警察が捜査していたのもあるけどな」

「協力した意図はあるんですか？」

「犯人一人による連続殺人事件だと考えているんだ」

「二件供同じ人の犯行ですか」

「確信はまだないけどな。そうすると犯人はH町や、T側付近の土地勘が多少はあるということになる。本物のプロクラスではない限り、見知らぬ土地での犯行はしないものだからな。ただ、さっき現場に残っていた血痕と足跡は有力な情報だ」

「SとBに見えた文字と小さい足跡ですね」

「俺はむしろダイイングメッセージが今回の事件解決に重要な要素が隠されていると思っている」

「SとB、犯人の名前のイニシャルだとしたら、被害者は知人である可能性がありますね」

「俺はあまり関係ないと推理する。あれにはまったく別の意味が含まれていると思う」

「では、ケンジさんはどう考えています」

「名詞ではなく形容詞を現しているとか。被害者はどうしても犯人の名前まで知っているとは思えない」

「なぜそう思われるのですか？」

「これと言った確証は出来ない。ただ俺の勘というものだ。俺には直感をどうしても揺るがすことが出来ない性格が宿っているんだ。即急に事件解決が求められる時には特に冴える」

ケンジの自己陶醉も、こういう時には嫌味にならないものがあった。不思議でたまらない。例え自分みたいにたいした人間じゃないとしても、でかいことを言うのは大切であると義高は思った。もちろんケンジはまったく違うタイプではあるが。

「シルバーのブレスレットとか」

自信なさげに言う。

「やっと冴えてきたな。そういうことだ。被害者が死に際に視覚で感じ取ったものが隠れている」

「でもなぜ英語なのでしょう？」

「頭に浮かんだものが、何かのイニシャルだと思うが、第一に、犯人に悟られないためだろ。簡単なひらがなで書いたらすぐ見つかって消されてしまう。いや、待てよ」

「どうしたんですか？」

ケンジは黙り込んだ。義高は早く聞きたくてしやうがなかった。

「もしかしたら、このメッセージは犯人がわざと残して行ったのかも知れない」

「わざわざなんでそんなことをする必要があるんですか？意味がないと思いますよ。犯人は誰かにばれないことを優先的に考えているでしょうから」

「ヒントになるような事を残して俺たち捜査する側を挑発しているか、まったく関係ないことを書いてかく乱させるためか、どちらのパターンも考えられる」

もしそうだとしたら、犯人は殺人に慣れていて、第二の殺人を犯した際、それでは退屈であると、事件に色をつけたことになる。そうなると、連続殺人事件の可能性も濃くなる。

「被害者が死ぬ直前に書いたのか、死んでから犯人が書かせたのか

は血痕で分からないんですかね？」

「むりだな。血痕はあくまで被害者であり、それ以上はない。第一被害者の死亡推定時刻はあくまで推定だ。二、三十分の誤差は確実にある。その間、お前の言った行動はどっちも可能だ」

「難しいですね」

「ただ俺はSとBに似た文字が、たまたま被害者が倒れたときに出たものだとは思えない。捜査している間にでも頭の片隅に入れておいて考える価値はあるだろう」

19. 単独調査

12

ケンジは別件の依頼を進行しなければならないといって、義高と途中で別れた。

義高はその足で大学へと向かった。武本博之と会えるかは不確かであったので、あらかじめ調べておいた名簿で、彼の家に連絡を取った。武本は大学にいるとこのことで不在だったが、彼の母親に自分が友達であることをいうと、すんなり携帯の番号を教えてくれた。義高は即座に大学へ向かい、そのまま番号をプッシュした。

「もしもし誰？」

元氣のない陰気な声が聞こえてきた。

「もしもし、ぼく武本君と同じ大学で学部も一緒の京理義高です。わかりますか？」

「ああ、何のよう？」

「実はちょっと昇君ことを聞きたいんだけど、今から会えるかな？」

「えっ、ちょっと忙しいんだ。今度にしてくれよ」

「わかったよ。今どこに居るの？」

彼が大学にいるのは彼の母親に確認済みだった。そして予想通り

の回答があった。

「じゃあ今からそっちに行くから待っていてよ。ぼくも今大学にいるんだ」

しぶしぶ了解してくれた。武本は意外にも図書館に居た。外は暑いのでクーラーの効いた場所に非難するのは当然でもあるが、どうしても本を読み漁る文系といった感じではない。

図書館は出入り門から四号館の脇道を通って坂を下った所にある。方角的にはこの大学の南西で、端っこに位置する。

一階は入り口から正面に受付があり、横には荷物用のロッカー（バック等を館内に持ち込んで盗難を防止するため）、自習室がある。受付では大学の学生証明書がないと通れない。受付を通った後、奥には新聞や大学内で出版されたものが置いてある。さすがにこの時期は学生の姿はまばらだった。

二階には文学、哲学、法学、社会学、心理学、経済学、電気電子工学、機械工学、物理学、科学、倫理学、その他の専門書と大学で使用している教材が並んでいる。三階は比較的価値のある書物やオブリジェが置いてあり、一般の学生は、受験生の大学見学期間以外は立ち入り禁止となっている。一階には文芸小説や雑誌が置いてあるのだが、エンターテインメント性の強い現代作家の書物やミステリー小説は殆どないので、菅野は図書館に興味がない。

武本は二階の読書用テーブルの椅子に座っていた。他に人はいなかった。義高にとっては好都合だった。

「ひさしぶり、とうよりはじめましてのほうがいいのかな」

「どっちでもいいんじゃない」

義高はなるべく明るく接したが、武本の反応は冷たかった。痩身で青白い顔は、ケンジから得た不振人物情報のイメージにぴったりだと再確認した。義高はなるべく疑っていることを隠すよう努力し、同時にどのように彼の行動パターンを聞きだすかを考えた。

「急にほんとごめん、どうしても聞きたかったんだ」

「で、なにが聞きたいの」

そう言われてみると、義高はなにから聞くべきか整理が付いていなかった。

「昇が自殺したって事なんだけど」

「さっき聞いた」

突っ込みがきつくて冷たかった。義高は彼が友達だとしても絶対一緒には遊びたくないタイプだと思った。辛抱するしかなかった。

「彼は以前からそういうそぶりみたいなのはあった。武本君なら仲良かったし、知っているかと思って」

無愛想な顔がさらに渋面になった。

「まず、君はなんでそんな事を調べているか教えてくれよ。でないと気味悪い」

義高はこっちのせりふだ。という言葉を読み込んだ。

「実は今探偵のアルバイトをしていてね。仕事の一問で調べないといけないんだ」

「探偵？」

「そう、彼の家は金持ちだろ。だから、他のところから調べてくれて依頼があつて。些細はいえないんだけど」

「別に言わなくてもいいよ。知りたくないから」

嘘を吐いた。

「昇は常に自殺を考えていたよ。俺にはちょっと迷惑だったな。確かにパソコンのことはくわしかったし、趣味も似ていたから話は合ったけど」

「じゃあ、武本君が引いてしまうぐらいひどかったの？」

「普通の人なら絶対思うよ。だって睡眠薬や自殺に使えるような毒性のある薬を常備していたからね。さすがにぼくの前で自殺未遂しようとはしなかったけど、これを何錠飲んだら死ぬるとか、サイトで自分の体を極限まで痛めつけてから、最後に自殺をしたマゾの人の話を読んだとか言われてみるよ。気分が悪くなるよ」

「深刻だったんだね」

義高は腕を組んで考え込んだ。否、沈黙を作ったら武本から相手にされなくなる。

「いつまでに自分も自殺するとか言ってなかった？」

「それはない」

「じゃあ、家から出たいとかは？」

「ない。元々自分の部屋に籠るやつだし、引っ越したところで今までの環境を整えるのが面倒くさかったんじゃないか」

「不満とか悩みも言ってなかった？」

「パソコンの機能が良くないとか、ネットの繋がりが遅くてダウンロードする時間が遅いとかは言っていたよ」

「それだけ」

「そう」

友達同士とはなんだろうと考えさせられる話だった。お互いを深く干渉しないのが彼らの友情だったのかもしれない。

「もういいだろ？ 俺はやることあるんだ」

「わかった、最後に昇と親しかった人は知っている？ ネット上でもいいから」

「自殺サイトのチャット仲間がいたらしいが、俺は知らないよ」

「ありがとう」

義高は武本のいる図書館を出た。彼の心は閉ざされてしまい、ケンジの調査している事件の情報はまったく得られなかった。ただ、彼の靴のサイズは明らかに二七センチを超えていた。

ムツとする熱気が義高を襲ってきた。冷蔵庫から熱帯雨林地域に移動したようだった。

気が付くと、義高は江崎教授の研究室に足を向けていた。部屋前にある居場所確認ボードには在室の文字が記入してあった。

ノックして中に入ると江崎教授は笑顔で迎えてくれた。

「捜査は進んでいるかな？」

「ぼちぼちというところです」

「暑いのに大変だね。でも何かに打ち込むのは大切だ」

「ありがとうございます」

教授は冷たい麦茶をだしてくれた。捜査の些細を話すと教授は私もニュースと新聞で見たよと言った。義高は江崎教授に調査中の連続殺人について聞いた。

「犯罪学では大量殺人と呼ばれ、人間の行ためとして最も危険で異常な犯罪と言えるね。連続殺人事件は、殺人者と被害者との間に人間関係がない＞通り魔＜的な犯罪が殆どなので、ことが終わった時点でなにも隠すことなく捕まってしまうことのほうが多いのだが、逆のケースでは捜査が難航することが多いんだ」

「では、犯行する人種の特徴とかはあるんですか？」

「異常な連続殺人者に特徴的なのは、思春期以後の空想生活が挙げられるね。男の子の場合は思春期を迎える頃から性的な空想に浸る事が多く、またそれが自然であるが、将来的に連続殺人者となる少年達の空想内容は特異なんだ。つまり血なまぐさく、サディスティックで、将来の犯行を予言するような種類のものだ。こういう空想が、強い刺激となって次第に強化・習慣化されていく。ある例としては動物に虐待や虐殺を試みたりする」

「動機はそういうことから発生するんですね？」

「異常な殺人者は、けっして偶然の成り行きによって起こるものではない。長年にわたる空想生活の中のイメージが、ついに現実の世界で実現されたものにすぎないんだ」

「連続殺人は必然性があるということですか？」

「精神医学の立場からすれば、精神病質や異常性格とは、治療の必要があり、病的な状態なんだ。しかし、研究や治療的実践は、個々の医師や私等のような大学教授の熱意や学識だけではとうてい不可能であって、これには国家的な関心と協力が必要なんだよ」

「でも実際捕まってしまうえば大げさに考えなくてもいいのではないのでしょうか？更正する意欲もわいてくるだろうし」

「さっき言った空想は犯罪が行われ、逮捕され、受刑生活を送っている間も後悔や罪悪感によって消えるものではない。むしろ殺人の時の興奮を思い出すことが刺激となって、性的な興奮や満足が起こ

ることすらあるんだ。サディスティックなファンタジーやイメージは、いわば第二の天性のようなものであり、生涯にわたって彼らに取り付いて離れないことがある」

「それでは、犯人は可能な限り犯行を続けるんですか？」

「犯罪者は社会体制が変わっても、経済状況が恵まれたものとなっても、けっしてその姿を消すことなく、社会を脅かし続けるものだよ」

殺人はいつでも起きてもおかしくない。人間という人物が作り出す不条理な弱肉強食世界。自分の知らないところで数え切れない殺人事件が生産されている、あるいは生産される事実を考えただけで眩暈を感じた。

20. 論より証拠

13

翌日、義高は菅野に恐る恐る電話をした。不安感の意味がなく、菅野との連絡は直ぐに取れた。思った以上に沈んでいる様子はなく、むしろ自分が殺人事件の捜査に加わった事や、細かいいきさつを話すとどんどん元気になっていく様子だった。菅野は電話を切る間際、推理が浮かんだと言って、早速お互い家から中間点にあたる駅の喫茶店で落ち合った。

「どこのテレビでもやっているよな。連続殺人事件として犯人を見つけているようだけど」

七月二十五日の早朝、警察はT地区周辺の捜査網を大幅に強化するとの報告があった。テレビもそれに食いつき、全国ネットで危険地域として報道された。現場付近の住民から得た情報を元に犯人像を作り出し、指名手配された。

「すごいよね。あそこまで報道したりすると、犯人にばれてしまうんじゃないかな」

「あまいな。今までの犯行からするに、犯人はそこまで単純じゃない」

「えっ、どういうこと?」

「つまり、テレビで大々的に放送された内容を鵜呑みにして、例えばT地区に捜査網を拡大しているから他の地区で殺人を犯そうなん

て思わないってことさ」

「なるほど」

「警察もそこまで馬鹿じゃないから。夜ドライブしているときに抜き打ちで車を止めて飲酒反応を確認したり、ある場所で待ち伏せしてスピード違反を取り締まったりするような緻密さを裏で隠し持っていると思うよ」

「捕まえたら給料倍増なんてことあったりして。それでいつもより捜査に力がはいるとか」

「夢がないな。そんなの当たり前だろう。正義感だけじゃ成り立たないことだってあるんだ」

「それより、さっき言っていた推理ってなんだよ」

「あせるな。あせりは緊張を生み実力を半減させる」

菅野はコーヒーをゆっくり飲み、煙草に火を付けた。

「俺はT川沿いで起きた事件、H町で起きた事件の被害者はどちらも犯人となんらかの関係があったと思うんだ」

「またすごい推理だな」

「ああ、といえそうになると死ぬ直前まで犯人と話をしているもなんら不思議はなくなる。また、ナイフ等で刺されても気が付くまで時間がかかり、負った傷のダメージで悲鳴すらあげられなくなる」

「ちょっとまった。現場ではたまたま周りの人は気が付かなかった可能性だってあるぞ」

「いや、H町ならともかく、T側沿いは夜でもけっこう人通りが多いんだ。ジョギングしている人もいる。現に被害者は駅からそんなに離れていない所で殺されているわけだし、民家だってないわけじゃない」

「そうだけど、犯人がどこかに潜んでいて、いきなり現れて殺したってことも考えられるだろう」

「いや、そういう場合、大抵は異変に気が付くはずだよ。逃げる時間だって生じる。助けを求める時間だってあるだろう。俺はH町に直接行ったことはないけど、聞いた話だと思ったより田舎じゃない。例えるなら郊外と言った感じで、場所によっては住宅街だって密集しているらしいからな。そういう場所で、しかも野外で殺されているとなれば、夜でも誰かしらわかるだろう。だから警戒心を持たせない、あるいは周りに誰かいたとしても怪しいと思われない犯人は被害者の知り合いなんだよ」

「さてよ。そしたら今頃捕まっているでしょう。被害者が殺される前の時間に誰かと合う約束をしていたら、知り合いや友達が知っていることもあるし、もし他人がその様子を見たとして、被害者が犯人と歩いていけば直ぐに警察に通報しているだろうし。あと菅野は誰かに聞いたか分からないけど、H町はけっこう田舎だったよ。これでも東京都なんだって思うぐらい」

「テレビを見て、この被害者はあの時間、こんな人と歩いていたと覚えている人がいるといたいんだろ？ H町の情報は、地元がH町の友達に聞いたんだ」

菅野が言った友達がH町に住んで要れば、それを知らない人には実は田舎でも、地元は田舎じゃないぞと嘘を付く可能性は大だと義高は思った。十代後半から二十代前半という時期は、自意識とプライドが石のように硬くなり、その一種で、どうしても都会への憧れからか、地元を田舎と悟られたくないという感情がうかんでくるもんだ。

とりあえずH町の話は執着しなかった。

「今頃つかまっているってのは少し大げさだったけど、菅野の言う推理だと捕まりやすいって言うこと」

「でも、その条件が揃わなかったら？」

「というと？」

「今義高が言った仮定に補足説明を加え、もし、犯人が以前から被害者に何らかの恨みを抱えていた関係をもっていて、被害者の方は何も恨みを持っていないようなパラドックスだよ」

「かなり限定されるね」

「そうだ。つまり、犯人は他人がいないのを確認し、被害者と偶然を装って、ばったり合ったシチュエーションを作り出す。そうすると身内や友達、他人の証言もなくなる。また、犯人は適度に被害者と親しい関係で、なおかつ被害者が犯人は自分に恨みを持つ要因なんてないと思わせるような人ってことになる」

「すると、偶然のシチュエーションの作り方が難しいでしょ？」

「いや、簡単だよ。例えばT川での事件はたまたま周辺を散歩なり、マラソンなりをしていたと言えば相手は偶然でも納得する。H町でも同じじゃないか？ 近くの友達の家歩いて行く途中だったというのもいいだろうし」

「うーん、でも不振人物情報とどうしても繋がりにくい」

「なんでだよ。だいたい、不振人物と言っても犯人である証拠はまだないんだし、犯人だとしても、元々そういう奴であつた可能性だつてあるだろ。今のご時世、怪しい奴なんて掃いて捨てる程いるんだから」

今日の菅野はどこを攻めても自信のある即答を用意している感じがあつた。

店内はすいていた。コーヒーだけでも店員から文句は言われそうにない。店員もやる気がないのか、調理場の方に引っ込んでいて、義高たちのいるテーブルには殆ど来る様子がなく、気はらくだった。会話している内容も、流れている音楽でかき消されて、誰かに聞こえることはなかった。

「菅野の推理が正しければ、解決は時間が掛からないんじゃないかな」

「警察が犯人を捕まえるのは時間の問題だと思うよ」

「被害者と何らかの関係があれば、犯人はそう何人も殺せないだろうし。いや待てよ、江崎教授が、『連続殺人は通り魔的要素が殆ど』、と言っていたから、これから関係ない人も殺すかもしれない」

「そうだとしたら、なおさら直ぐ捕まるよ。マスターベーションのために殺人を犯しているのであれば、証拠の隠ぺい工作なんて面倒になるだろ。警察や住民の情報網を舐めてはいけない。だいたい小説に出てくる犯人は強い動機があつて初めて綿密なトリックを構築していくもんなんだ。かの有名な推理小説……」

義高は適当に頷いた。犯罪を犯す人の心理は小説の中ではなく本人の心の中を除く以外明確にならないという言葉は呑み込んだ。

場所は美辞麗句探偵事務所へとシフトした。

菅野は義高に話した推理をそのままケンジに説明した。

「少ない脳みそで考えたにしては上出来だが、残念ながら俺が今日得た情報によって、その推理が当たる可能性は0パーセントに等しくなった」

「なぜですか？」

「まず被害者の二人は性格がわりとオープンだったらしい。交友関係を友達や親友、家族は把握していて、俺や警察達は一人残さず当たってみた。信じがたい話だが、アリバイは全員持っていた」

「本当に全員アリバイを持っていたんですか？」

「俺を疑うのか。まあいい。もうすぐ根本がくるだろう。あいつから説明してもらう言うから待ってろ」

ケンジはDVDの映像を再生した。東京ドームで行われたLUNA SEAのラストライブだった。メンバーの登場シーンが画面に

移り、ファンの歓声が大ボリュームで流れてきた。

「ロックバンドが東京ドームで初めてライブを行ったのがB O φ W Yのラストギグス。それからビジュアル系バンドブームに火がつき、Xの登場で一気に本格的になった。その後、L U N A S E A、ラルクアンシエルといったバンドは東京ドームでも納まらない十万人動員のライブを東京ビックサイトでやって、G L A Yは幕張で至上最高の二十万人動員ライブを行うまで昇りつめたんだ」

誰に話しかけているのかわからないケンジは、煙草に火を付けた。

タイミングよく根本が現れた。表情を見ると、前より疲れている様子ではあったが、あいさつは元気そのものだった。義高は根本の体を見て自分も体を鍛えようと思い始めた。

ケンジは根本に今あった話のいきさつを説明した。

「確かにT川沿いでの被害者森明子と、H町での被害者安原辰巳は明るい性格だったらしいです。それは彼らの家族や広い交友関係を持っていた人達の証言で全員一致でした。そのおかげで、アリバイ捜査は大変でしたが、確認は取れています。誰一人被害者の死亡推定時刻一時間前後のアリバイがありました。類は友を呼ぶと言いますが、明るい性格で交友関係の広い被害者の友も、同じ類の人ばかりで、皆さん誰かと話していたり、誰かと一緒にいたがるものなんですかね」

「ということだ。これでもまだ疑うのであれば、俺ではなく警察を疑え。出頭して自分で確認すれば済むことだ」

菅野は納得したようだが、気持ちは晴れていなかった。どうして

菅野はそこまで疑問に思うのか。彼が提案した推理が完膚なきまでに否定された事実にはプライドが傷ついたのかもしれない。

「では、こういう推理はどうでしょう。まず被害者の二人に当てはまるかは別として、仮にどちらか一人に、安原辰巳当てはめて言います。まず、小学生時代になんらかのきっかけでいじめ等の被害にあった同級生がいたとします」

「パターンから言うといじめられた側はいつまでも覚えているが、いじめた側はまったく覚えていない。よってばったり会ったとしても罪悪感のかけらもなく、菅野が前回の推理で強調していた、警戒心を被害者に持たせなかったということかな？」

「はい。それでしたら現在被害者二人の交友関係である人のアリバイだけではカバーできないでしょう」

「ただのこじ付けとしか受け取れないな。そういう推理だとある意味無限の可能性を秘めるだろう。例えば、遠い親戚の親の息子の友達のだって被害者と関係を持っていることになる。第一お前の仮定した、いじめられていた同級生が犯人だったらまだ話しは早いが、俺らには全国に散らばっている知り合いを当たっている暇はない」

「菅野君、捜査もある程度妥協は必要なんだよ。でも、なかなか解決されない事件は何万人という捜査員達が、何年もかけてケンジさんの言ったような無限に近い交友関係をあたって行くケースはあるんだ。でも、今ぼくたちは推理より証拠が必要なんだ」

「その通り。口を動かす前に自分で証拠を持ってくるのが先決だ」

さすがにミステリー小説が好きな菅野も、職業としている人物に

は齒が立たないようだった。義高はまだ江崎教授から聞いた連続殺人事件を起こす犯人の心理が引かなかった。人を殺すのであれば誰だっていいという心理。慢性的に定着する殺人に対する快感。動機としても、起こっている事件と一緒に考えてもなんら不自然はない。

21. 犯人の独白

14

私は人を好きになつたことがない。

人を物と同類項にカテゴリしたのはいつ頃だったのだろうか。わりと社会のシステムを理解し始めていた頃だと思う。

異性がどうしても好きになれなかった。同性しか恋愛対象にならないといった類ではなく、純粹に誰かに引かれたことがないのだ。恋愛ドラマを見ていると、現実離れしたシチュエーションに虫唾がはしり、街で見かける恋人同士が仲よさ気に話をしていたり、歩いたりすると、出来るだけ見ないようにしている。

ただ性欲はある。異性に対して体が反応することだってある。体の交わりを経験したこともあるし、嫌いではない。

でも、心底から恋愛感情が芽生えてこないのである。

どこか人間としての機能が低下、あるいは無機能状態であるのだろう。

精神医学者なら簡潔にこう言うだろう。

「現代の若者が増えつつある傾向の精神病といってよい。幼年期からの人と接する習慣、あるいは必要性がなく、コミュニケーション不足という人格が通常に形成されて育ったから、対人関係には深く関わろうとしないことから生じるものだ。こういう若者は決まって

関わることで傷付くのが怖かったり、傷付いたことに耐性がない」

これは違うと思う。

私は機械的な人間でもなく、私の内面を知らない人が私の事を形容した場合は割りと普通の人であると言う。

対人関係の認識はごく自然だし、人と話すことがそれほど嫌いじゃない。ある時は刺激や影響も受ける。性格も大人しいといわれたことはなく、協調性が欠いているとも言えない。これはあくまで客観的なものだ。私自身が診断しただけでなく、誰かに言われた意見をまとめた結果、出した結論だ。

心が曇っていると思えるのは、私の協調性は抑制でもあり、自我をそのままアウトプット出来ずに、皆に合わせてしまう事だ。集団行動の際、一人になるのがなによりも怖かった。いつも一人でいる人を見ているとそうでもないが、実際自分がそういう境遇に立たされると地獄を見ることになる。寂しさとは違い、一人ではやりたいことが何も出来ないのだ。

また、誰かと話をしないと自分自身のエネルギーさえ損なわれる。本来楽しいはずの時間を、一人でいるという意識、あるいは自分だけ仲間がいけないという疎外感から精神状態は鬱になってしまう。少し前まで私は生きている屍の様に弱った人間だったのだ。

しかし、私は内面に持つ精神を、自分という人物そのものだけで飼いならし、殺人をカタルシスとして消化できるようになった。そうになると、孤独なんてつぶやくのはまだ自分に酔った段階で、気取っているとは思えない。ビックスターだって見えない多数の人に支えられて孤独を気取るわけだし、引きこもりと呼ばれる人種さえ

親や、社会保険等に支えられているのだ。

精神的な孤独と言われ、周りに話が合う人が存在しないだの、自分と同じ考え方を持った人がいなくて喚いているのは、ただの魯鈍でしか思えない。自分の弱さを誰かのせいにしてしているだけだ。

何もかもが欺瞞に見えて仕方がない。私のすべての精神がリンクした時、またたどり着いた境地が殺人なのだ。

今ではこういう人だけは絶対殺さない、殺したくないといったリンクスは皆無。殺してしまったことで、後悔しない自信がある。

故に、私は殺しの素人ではあるが、殺人にためらいもない。この要素はどれだけ大切か、身に染みてわかった。人体にナイフを刺し、相手が絶命するまでの、一連動作を仕損じる可能性が著しく減少しているのだ。この感情を、誰かと共有したいとは思わない。私は私のみで十分だからだ。殺人という境地は誰にも止められない、否止めさせない。

22. 本当のことを探すまで

15

根本は『美辞麗句探偵事務所』から神奈川県警P署に戻った。上層部はけっこういたが、キャリアが浅い捜査員達は外回りが多く、同期の警官はほとんど見当たらなかった。彼は妙に引っかかっていた。殺人事件には何か落ち度があるんじゃないかと思っていた。これまでの事件調査結果、犯行現場での犯人が残したと思われる証拠がまったく見当たらなかった。現実問題として、本当にそんなことが可能なのだろうか。自分には決定的な欠如があると根元は思った。

上層部はきつと自分には気が付いていない欠如を捜査の重要ポイントとして中枢に置き、もう既に計画に移っている可能性があった。自分のような新米警官にそれを教える価値はまだないと思われるのか。

体力には人一倍自信はあるが、捜査や過去の経験やデータを生かした推定がまるで出来ていない。そして事件解決の実績がない。根本はあせっていた。この仕事について上司から命令が下らない限り、自主的に動いた記憶がなかった。

頭をクリアにするため、資料室で捜査ファイルを開いた。

薄暗い資料室のドアが開く音がして、根本はファイルから目を離した。入り口に立っていたのは、検死官の黒田だった。年齢は四十歳を今年の五月に向かえ、雰囲気は普通の人より長く生きているかのように仙人じみていた。黒田は最近たて続けに起きている殺人事件の遺体状態を検死していた。

「こんな時間まで残業なんて感心だね」

「いえ、ちょっと調べものついでに勉強でもしようかと思ひまして。たいしたことではないんです」

「若いんだから、早く帰って遊びたい時期だろ。仕事命もいいが、たまには生き抜きもしないとな」

「わかりました」

黒田を前にすると、たいていの方はその雰囲気にも飲まれ、いつの間にか自分のほうも静かな口調になっていた。根本もだいたい穏やかなトーンでしゃべっていた。

「黒田さん、少し聞きたいことがあるんですが、お時間はいただけますか？」

「私は時間たっぷりあるよ」

二人は資料室の椅子に座った。黒田の場合腰掛けたといったほうがいい。

「今現在進行中の殺人事件のことなんですが」

「私は検死官であり、そっちの課ではないはずだけど」

「いえ、ちょっと被害者の状態について聞きたかったです」

「うん、それなら私の領域だね」

「それで、まず黒田さんは二週間ちょっと前にあった高橋昇君のご遺体についてお調べになったと聞きましたが、詳しいことを教えていただけませんか」

「高橋昇君？　あの自殺した二十ぐらいの若者のことか？」

黒田は腕を組み、考え込む時の癖でうーんという独特の唸り声を上げた。

「そうです、覚えていますね」

「覚えているよ。あの金持ちの家の子だ。しかし、今根本君は被害者と言ったよね？」

「あっ、すみません。実は今探偵のケンジさんと共同で捜査しているのですが、最近弟子を雇ったんです。その子がちょうど高橋昇君と同じ大学に通っていたらしいのです。彼は高橋昇君の友達でもあって、じかもケンジさんに弟子入りした動機というのが特殊でして」

「弟子入りに、特殊な動機か」

「はい、その動機が高橋昇君の自殺説を否定するためにケンジさんに依頼し、大学生であり、探偵に協力を依頼するにはまだ経済的な余裕がなく、一緒に働くことで協力してもらって形なんですよ」

「探偵のアルバイトだね、それにしても、高橋昇君の自殺説を否定しているのか？」

「ええ、それで私も完全に高橋昇君は自殺と決め付けていたんです

が、その影響もあって、彼が被害者と言ってしまったのも事実です」

「おもしろい発想ではあるね。私たちの見解からは、完全に自殺の線で終始それが揺らぐことさえなかった。わかった」

そういうと、黒田は小さな手帳を取り出し、パラパラと捲った。

表題に七月十一日と書いてあるページで動きを止めた。書いてある内容は根本から見ると何かの暗号にしか見えなかった。二進数の二という数値を十進数に表すと一〇という数値置き換えられるように、書いてある内容も黒田自身にしかわからない定義があるのかもしれない。

「高橋昇君の死亡推定時刻は七月十日の午後八時から半までの間。死因は大量の睡眠薬服用によるもの。彼の手のひらには睡眠薬に含まれる成分が付着していた。勉強机には水の入ったコップは置かれていて、その状態から、第三者が侵入して用意したものでも、飲ませた痕跡もない」

「睡眠薬で死んだ時の特徴を教えてくださいなのですが」

「睡眠薬はバルビツレートと非バルビツレート催眠薬に大別されるが、彼が使用したのはバルビツレートであり、過量（薬用量の五〜十倍）に用いると、重篤な中枢神経系の抑制をひき起こし、札幌睡眠呼吸停止に至ることになる。応急処置としては、胃洗浄、人工呼吸、保温、酸素呼吸を行い、体液中の薬物を希釈し、尿の酸性化を防ぐためにリンゲル注射をも行う必要があるが、発見された次の日の午前十時十五分には時がすでに遅かった。遺体に外傷及び、睡眠薬服用後に出来た傷もなく、ただ死後硬直や体温低下、死斑が残っているのみだった。現場の状況については根本君のほうが詳しいだろう

う？」

わけもわからないメモからよくここまで言葉がでてくるものだと関心しながら、根本は必死に自分がわかるメモを取った。

「自殺か他殺かを選別した経緯についてももう少し詳しく教えていただきたいのですが？」

根本の問いに、黒田はまず自他殺の選別方法十項目を挙げた。これは、仕事として遺体を観察し、得た情報から各項目に当てはめ、項目に該当する確率が高ければ自殺を満たすのだ。高橋昇の場合、殆どが該当していたらしい。

「睡眠薬には即効性はない。先ほど述べたように、致死量まで飲ますということは、かなり大量でなくてはならないわけで、他殺には適さないんだよ。であるから、私の経験から言うと、睡眠薬による死は、おおよそ自殺と考えていいだろう。後、死体の容態をはしよっていたので、もう少し詳しく話すよ。睡眠薬を飲んだ死体の特徴は、目の窪みにドロっとしたものができるといのが一つ。それから顔が脂ぎっているということ。ときどき皮膚の弱い部分に赤い火傷状のものができている。さらに死斑が強くなる。彼のケースはいずれも今の話に該当していた」

「聞く限り、やはり自殺の線を疑う余地はありませんね。但し黒田さんは死体を解剖したわけでもない」

「私はしていないというより、彼の両親がしないでくれと懇願していたからね」

「では、死体の状態からすべてを判断したといっても過言ではあり

「ませんね？」

黒田は顔を曇らせたが、そうだと断言した。以前から知っていた、少なくとも外的要因から、例えばナイフや鈍器等で致命傷になった線は完全に断たれた。

「それにしても、高橋昇君の友達という子はなぜそう思っているのかね？」

「特にはっきりとした経緯はないようです。ですが、探偵のケンジさんのほうも他殺説を完全に否定しているわけでもなく、何か推理があるようです」

「どんな推理なのかね？」

「それはまだ言えないらしいんですが。私としては、今でもひっかかるんです」

黒田でもさすがに他殺説は肯定できないようだった。今までの経験、実績があるので無理な話でもあった。

「次にT川沿いで起きた事件の被害者の状態をお聞かせ願いますか？」

黒田はメモ帳を次のページにシフトさせた。

「わかった。被害者森明子の死亡推定時刻は七月十五日午後十時半から十一時の間、死因はナイフのような鋭利な刃物による刺殺死。死体には六箇所刃創が残っていた。また後頭部、膝には打撲傷があった。」

一、肝臓付近。これは背後から突き刺された痕跡があった。
二、鳩尾付近。これは正面から突き刺された痕跡があった。
三、四、右と左わき腹、いずれも正面からのもの。
五、へその少し下の付近、これも正面から。
六、心臓付近。正面から刺し、肋骨をきれいにはずし、心臓まで貫通していた。

以上だよ。この状態から仮定すると、犯人はまず背後から最初の
一撃を食らわれ、被害者は傷の深さから大量の血液が失われ、自分
から倒れたのか、あるいは犯人に倒されたのか地面に膝を打ちつけ
た。それから、仰向けに倒れた。そこで後頭部を地面に打ち付ける
勢いで倒れた。この時すでに死んでいた可能性もあるのだけれど、
加えて犯人は被害者の体に五箇所を傷を負わせた。順番は定かでは
ないが、箇所の刃創位置を見ると、どうしても素人が頭に血が上っ
てめった刺しにしたとは思えない。特に肋骨をすり抜け、心臓を貫
通させる技術は相当なものだ。これは現場で冷静に殺人行ためをこ
なしていたと考えられる。また、続けてH町事件での被害者の遺体
状態についても話そう」

息を付く暇もないと思った。普段は仙人のような黒田も、仕事の
話となれば、プロの領分。別人のように真剣になった。

「被害者安原辰巳の死亡推定時刻は七月二十四日の午後十一から半
までの間。死因は先の事件と同様、鋭利な刃物による刺殺死。死体
には五箇所の刃創が残っていた。争った形跡は殆どなし。

一、おしりの上付近、これは背後から突き刺された痕跡があった。
二、右胸付近、これは正面からで、被害者の胸板は厚く、肋骨まで
には到達していなかった。

三、右腕の上腕筋を縦に切られていた。

四、左太ももを横に切られていれ、刃物は骨にも到達していた。

五、心臓付近、こちらも正面から肋骨を避け、心臓を貫通している。

以上、被害者は体格がよく、現場付近は血の海と化していた。また、被害者森明子、被害者安原辰巳を結びつけて考えてみよう」

「遺体状態、殺人方法は殆ど似ているように思えますね」

「そうだね。死体状態から怨恨による犯行なのかは定かではない。めった刺であれば多少の目星はついてくるところだけれど、犯人が被害者とは赤の他人でも、具体的な出血や、相手の状態を見て致死量を把握していない者の犯行であれば、これだけ傷を負わせないと、死なないかもしれないと思ひ込む」

「被害者の交友関係は殆ど当たったつもりですが、まだなにも出てきていません。アリバイもありましたし」

根本は、一連の捜査の流れを説明した。

「そうか。ただ一つだけは言える。殺人方法ではなく、被害者の負った傷口は両方同じ形をしている。決め手は心臓を貫通させた時の傷。深さ、広さが殆ど一致しているんだよ。例え違った人物が時間差で行った犯行だとすると、同じ刃物を使用する確立は限りなくゼロに近い。また、背後から突き刺した傷。私はこれが最初の一撃と推定した」

「そうですね。どうみても、いきなり前方から襲うのであれば、犯人にも相当なリスクがありますから」

「否、私が言いたいのは、この位置は、被害者森明子の場合、肝臓付近。被害者安原辰巳の場合、おしりの上付近」

黒田はそういうと、間を置いた。根本はなかなか黒田の言わんと

していることが見えてこなかった。

「共通項でもあるんですかね？」

「あるよ。被害者森明子の身長は一メートル五十八センチ、被害者安原辰巳の身長は一メートル七十八センチ、根本君はまだ気がついていないようだが、両者とも地面から一メートル十センチ付近の右手側に傷を負っていた。これが信じられないのであれば死体を二体横に並べて確認するとわかりやすい」

思わず想像して、嫌悪感を覚えた根本であったが、直ぐに持ち直し、目を見開いた。

「では、犯人が被害者を殺そうとしたとき、必ずその位置から刃物を突き刺すという癖があるんですね」

近くにいて十分小声でも聞こえる位置にいる黒田に、大きな声で声を発した。黒田は目を窄めた。

「そうだよ。犯行をした本人さえ気が付いてないこともあるんだ。健康体の人間を背後から襲おうとするとき、犯人でも少なからず不安も入り混じる。そういう時は、まず自信がある体制から最初の一撃を加える。死体は雄弁に事件解決の手がかりを教えてくれるものなんだ」

「両者の事件は」

「そう、この事件は同一人物による犯行だ」

彼からの穏やかな雰囲気は、なくなっていた。

23. 捜査憂鬱

16

七月二十七日は早朝から雨だった。気温が下がって過ごしやすくなるものの、じっとしているだけで湿気がうつとうしい。義高はアパートに居ることも出来ずに一人で横浜にいた。桜木町を下車し、海潮の臭いと、人々の歩く方向に歩けば海に到達した。みなとみらい、赤レンガ邸、山下公園、ランドマークタワー、マリントワーはどこもカップルや家族連ればかりだった。

早くも男一人で歩いている義高の姿をみて、何組かのカップルは怪訝な顔付きと冷たい視線を送ってきた。それらの様子を気にもせず、淡々と歩いていた。

昨晚、義高は事務所で、亜紀とユキ子がライブから帰ってきたのを迎えてから帰宅した。自分のアパートに付いて直ぐにケンジから連絡があった。

「明日はこっちに来なくていいから、好きなことでもやっている。亜紀をかしてほしかったら、俺から言っておくぞ」

探偵事務所にアルバイトとして働き始めてから、まだ日がたっていなかった。ケンジからは大変な仕事といわれ少々脅され気味だった義高だが、実際ここ数日の仕事を振り返ってみると、たいした仕事をしていない。ケンジの役に立つようなことはなにもしていないかった。

これからだ、と意気込んでいた矢先だった。本当は不休で働きた

いという意気込みさえあった。こういった感情は、義高のなかでは大変革命的な出来事にもなっていたわけで、誰にも止められなかった。

出鼻を挫かれた。大げさにいうと、生きがいを失ったような気がした。空からは雨が降ってきた。

山下公園を歩いていると、先に見える海の間こうは霧で覆われていて、幻想的だった。遠くに見える船は霧の影響で現れては消えていた。ただ、傘でも防げない雨が義高の靴元を濡らし、皮膚まで侵入してきたことは妙にリアルだった。

海の波はだいぶ荒れ、押し寄せた波は近くの海岸にぶつかり大きな音を立てていた。さすがに公園内のベンチでカップルが休んでいることはなかった。

大黒ふ頭は、よく刑事ドラマで見るようなロケーションだ。地面の高さからはよくわからないが、マリンタワーやランドマークタワーから見下ろすと、今でも銃撃戦や、麻薬の闇取引が行われているように見える。

マリンルージュ乗り場の近くで足を止めた。従業員は船上掃除をしていた。幾人かは乗り場近くの休憩所で雨宿りをしていた。

殺人という名の事件は、日常で行われていることに過ぎない。人間の持っている、負の部分が露呈したとき、事件は起こる。事件を起こす側の人間、事件を解決する側の人間。

そして、何にも関わりがない人間。少なくとも、今の義高にはこの三パターンの人間分類しか頭になかった。人はそれ以外ないとき

え思い始めた。視野が狭くなっているという自覚はなかった。起こった事件が、完全に義高の心を浸食しているに過ぎなかった。

初めて殺人事件現場というものを見たとき、血痕が残った道路を見て義高が感じたものは、案外しらけたものだった。遺体を目の当たりにすれば全然違った受け止め方が生じるのであろうが、自分は早く捜査の手助けをしたいがために、出来るだけ客観的になるよう勤めた。ある意味、自分が捜査員と一時でも同化したことに自惚れがあった。

こうして考えてみると、それはその時だけの感情で、雨が降っている山下公園で遠くの海を見つめている自分はとても無力に思えた。殺された遺族はどのように思っているのか、死んだ被害者はどれだけ恐怖を味わったのか、犯人は今どこにいて、もしかしたら次の犯行を着実に実現させようとしているのか。まだまだ思いつきは浮かんできた。でも、自分は思いつく限りの事を何も解決できていなかった。

ここ数日間ですれを十分思い知らされた。実際、夜中に起こった殺人の現場を想像するだけで怖くなってきた。まだ自分の心は現実に対応していなかった。

気が付くと義高ははいていたズボンの膝下まで濡れていた。不快感を覚え、休憩所に入った。さっき雨宿りしていた人達の大半は乗船し、残っていたのはおじさんしかいなかった。

休憩中に雨は止み、昼過ぎには空から晴天が覗いていた。

事務所では、亜紀達を持ってきたライブの土産話が一段落してい

た。深夜まで続いたかと思うと、あつという間に朝を通り越し、昼にまでなっていた。ケンジはアルコールの力もあったが、亜紀とユキ子は高揚感だけでずっとしゃべり続けていた。

「いいの？　こんなときに義高君を拭き放してしまつて」

「妙にあいつの方を持つな。何かあるのか？」

「へんな言い方止めてよ。そういうのじゃなくて、あの子ひどく落ち込んでいたみたいだし」

「じゃあ、亜紀が義高と付き合つて、私がケンジつてことで決まりにしよう」

「あのね」

「どっちにしろ、あいつは冷静になれていない。現実を起こつたことをまだ頭の中で整理が出来ていない。このまま俺に付き添つて捜査すれば、とんでもない失敗を犯すだろう。そうなる前に少し考える時間を与えてやっただけだ」

「それなら良いけどね」

「心配するな。まだ事件は何も解決していないんだ。仕事だつてまだまだ嫌というほどある。あいつにもやつてもらふ仕事だって沢山あるんだ」

ユキ子は急に興味のない話に傾いたので、大きな欠伸をした。それに釣られ、亜紀も欠伸をした。ケンジは鏡を凝視して髪の毛を整えた。

「でも、事件は解決出来そうなの？ 今回ののは殺人事件だし、早く解決してもらわないとこまるわ」

「なに言っているの、亜紀。ケンジに解決できない事件なんてないの。もうすぐだよ、ケンジ？」

煙草に火を付けたケンジは、ソファに体を深くのめり込まずように座った。

「五十パーセントぐらいだな。序序にはあるが、手がかりが掴めてきている。後はもう少しの情報と、それがどのように繋がってくるかの問題だ」

「やっぱり、ケンジはすごいね。他の仕事もやりつつ、事件解決のことも考えているなんて」

「当たり前だ。俺にしか出来ないからたまにつらいけどな」

「五十パーセントか。犯人が残した証拠がもう少しあればいいんだけどね」

「証拠ならどこにでも転がっている」

「どういうこと？」

「例えば遺体、昨日根本から連絡があって、被害者二人の遺体から連続殺人である証拠が出てきた」

根本が黒田に聞いた情報をそのままケンジは説明した。亜紀とユ

キ子は耳を塞ぎつつも、詳細を聞いた。

「そこまでわかっているんだ。後は動機と犯人自身の逮捕ね」

「重要なのは犯人を見つける事だけだ、動機は二次以下なんだよ」

「なんで？ 動機も大きな証拠になるじゃない」

「動機なんてものは、後になって聞くと実にくだらないうことばかりだ。相手が嫌い、お金がほしかった、ただイライラしていたからとか、殺人という重い罪から見ると、哀しくなるぐらいくだらない」

ユキ子は会話の内容に嫌悪感を抱いた。それを打ち消すかのように、X JAPANのCDをプレーヤーにセットした。少しの間三人は大人しくなり、音楽を聞き入っていた。音楽はジャンルによって気持ちを沈静させる作用があったり、高揚作用がある。聞こえてくる『ENDLESS RAIN』の曲調は前者にあたる。ボーカルトシが歌う、高い音域での声は音楽業界でも屈指だった。

「でも、最初に殺されたのは女の人だけどさ」

亜紀は思いついたかのように話し出した。ケンジとユキ子は合いの手を入れず、続きを待った。

「第二の被害者って男で、柔道やっていた人なんですよ？」

「そうだ」

ケンジは面倒くさそうに答えた。言いたいことは大体わかる。

「そういう人が簡単に殺されちゃうもののかな？」

「事実だから仕方ない」

「普通なら何かしら争った跡とかあって、その時は周りに誰もいなかったかもしれないけど、それに気が付くと思うんだけど。なんか余りにも静かに殺されちゃったって感じで、不自然だわ」

ユキ子は事件に興味がなかったのもかわらず、確かにだれでも亜紀の思っていることは同感できると思った。

「背後からナイフで不意打ちを食らってしまったんだからしょうがないことだ」

「わかってるけど」

「人間なんて、そういう境遇に立たされたとき、案外もういんだ。殺された被害者も生まれて始めての経験だったはずだ。急激な自分の体の変化に対応しきれなかった」

「ケンジってなんでも知ってるね。すごい」

「俺だって……いやなんでもない」

「何よ、途中でやめるなんて気持ち悪いじゃない」

「どうでもいいだろ。俺は寝るぞ」

ケンジの過去を知っている人は少ない。亜紀やユキ子にとってもそれは例外ではなかった。突っ込んだ会話をしようとすると、ケン

ジは柄にもなく心を閉ざしてしまうのだ。

24. ラブゲッチューの死

17

渋谷の駅前センター街には、溢れんばかりの若者がいた。この季節となれば、皆街へ出て、新たな出会いやイベントを求める。そういうオーラが体全体から発散されている。肌を極限まで露出したギヤル。キャミソールやホットパンツ、ミニスカートからは下着がいつでも見えそうで、男たちを挑発していた。山口亮は挑発された男の一人で、歩いている女の子を舐めるような視線で食い入るように見ていた。

だいたいナンパ待ちをしている女の子というのは、経験からわかっていた。どこかに行く目的があって、急ぎ足で歩いている女の子であると、かなり成功率が低くなり、山口も相当見た目で気に入らないと声は掛けなかった。逆に、誰かを待っていてなかなかこないケース、明らかに声を掛けてくれるのを待っている、ナンパ待ちの女の子であれば、声を掛けてからの成功率が飛躍的にアップした。

山口の携帯が鳴った。着信本は友達の光次からだった。

「もしもし」

「今どこにいの？」

「渋谷。ナンパしてんだ」

「まじで！？ 来週なんだけど、拓也たちと車で海行くんだけど、亮もいかねえ？」

「行くに決まってんじゃない。どこの海？」

「湘南。思いつきり肌焼くぜ」

「ありえねえ。光次はナンパ目的だろ」

「うるせえな。それより、亮、コンパのセッティング頼むぜ。晃とか、いつやるんだよって超うるせんだから」

「わかってるって。女の子は何人か呼べそうだけど、今日は新規のコンパ相手を見つけてるところだから」

「お前は新規の打つ相手を見つけてるんだろ」

「ばれた」

さらに最近、パコってねえしと続ける。

「勘弁してくれよ。でもコンパは絶対やってくれよ」

「わかってるよ。今は取り込み中だから、後で考えておく」

「頼むぜ。やばい奴とかもなしだからな」

「言われなくても大丈夫。じゃあ、来週の予定でなにかあったらまた連絡してくれよ」

「ああ、俺は気合入れていくからよ」

「でたー、気合入れすぎて、下半身にあんま溜め込むなよ」

「お前、超うぜー」

電話を切った山口は、気を取り直してナンパのターゲットを狙いに、目を輝かせた。

ハチ公前に座っている女の子がいた。どうやら暇そうだった。これはイケると山口は思った。女の子は案外軽く捕まった。話しかけた感触、食いつきもよかった。茶髪で、肌は日焼けサロンで焼いたらしく小麦色だった。濃い目の化粧と、身に付けているアクセサリが、素の状態を想像しづらくさせていたが、けっして見るに絶えないといった程ではなかった。胸を隠しただけの水着に近いキャミソールからはかなりの胸の突起がわかるし、臍が出ている部分を見ると、ウエストはかなり細く、ホットパンツから出た足は長くて細い。外見からすると、いかにも軽そうな女と言う印象が露呈してしまふものの、人見知りや、初めて合った男に警戒心がなく、ノリがいい。山口はこういうタイプの女の子は嫌いではなかった。短期間で落とせる可能性が高い。山口は俄然やる気が出てきた。

直美という女の子は、腹は減っていないとのことなので、山口はカラオケに誘った。直美はすんなりOKを出してきたので、心の中でガッツポーズを出した。カラオケはナンパ後の王道で、初めて会った女の子と話題がなくなって、話が途切れても歌えば良い訳だし、そこから相手の好きなアーティストの話も出来るし、二人で一緒に盛り上がることも出来る。しかも、山口は歌声にちょっとした自信もあった。隙があれば、カラオケボックス内でスキニシップも出来るし、山口は最後まで持ち込んだ経験もあった。

前半からだんだんと盛り上がるようにヒップホップやラップ等の

アップテンポな、それでいて流行りの曲をチョイスした。直美は釣られるように絶え間なく笑顔で、楽しそうだった。彼女の歌声も悪くなかった。後半は山口お得意のバラードでムードを作った。意味深な歌詞を盛り込んだ曲を何曲か歌い、直美は聞き入っていた。完璧だと思いながら、彼女に隙があるかどうかはまだわからなかった。そこで、山口はフライングをしないよう自分をコントロールした。ここで体をしつこく触って、拒まれたら元も子もないからだ。超楽しかったという直美の言葉を聴いて満足した山口は、次に居酒屋へと誘った。

渋谷はショップ、カラオケ、居酒屋、ラブホテル、クラブ、風俗店といった娯楽施設がどこも歩いて直ぐの所に揃っている。山口のような遊び人にとっては打ってつけの街だった。

山口達は道玄坂にある居酒屋に入った。ビールとカクテルで乾杯すると、二人はすっかり溶け込んで、今日始めてあったとは思えない空気になっていた。ほろ酔いになってきたところを見計らって、山口は直美の席横に移動した。最初は肩と肩が当たる程度だったが、山口はそのうち体を密着させた。直美はその行動に照れた様子を見せたものの、抵抗はしなかった。会話が途切れがちになったので、二人は残ったアルコールを飲んだ。

山口はこれからの行き先を考え、ラブホテルだと思いついた。しかし、トイレに立ったとき、実はお金も無いことに気がついた。しようがないので自分の部屋に連れ込もうと考えた。山口の住んでいるアパートは中目黒にあるので、渋谷からは目と鼻の先だった。

「もうすぐ終電がなくなっちゃう」

直美の言葉に、山口は自分が一人で部屋を借りていること、ある

いは口説き文句を付け加えた。

俯いた直美はどうしようという表情を浮かべた。ここまで来てどうしようはないだろうと山口は思いつつ、直美が納得するようなことで優しく説得した。

要は行く気はあるのだけれど、きっかけがほしいのだ。自分は誰にでも付いていく女ではないという体制があつて、それを碎いてくれる一言があればいい。時々山口はこういう駆け引きがうざったくなるが、今日快樂が得られることと、明日悪友に自慢話が出る嬉しさがそれを凌駕するのだ。

居酒屋を出ると、夜風が肌寒くなっていた。直美は山口の腕に寄り沿ってきた。もう完璧だと思いつつ、渋谷の東急東横線のホームへと向かった。山口は、駅前を行ったり来たりする人ごみに紛れても悪い気はしなかった。歩いている間、誰か知り合いはいないかと目を凝らした。山口は知り合いに、今直ぐにでも女を連れていることを自慢したかった。

中目黒から歩いて十分程度のところにあるアパート『コーポレート』は、決している場所ではなかった。場所としては破格の家賃で、経済力のない学生にはありがたい。しかし、セキュリティが甘く、玄関もオートロックではないし、女の一人暮らしは少々リスクがあった。アパートには独身男性のみが住んでいるのでむさ苦しい。

外装は周期的なりフォームを行っているため、ボロいという印象はあまり見受けられない程度で保たれているものの、築数十年は経過していた。

しかし、山口にとってそんなことはどうでもよかった。例えばボロ

アパートの一室であっても、そこに部屋があればいいのだ。生活に必要な最小限の家具、女の子を連れ込んだ時、退屈しないようにゲームを揃え、後はベット。親の脛を齧って借りているアパートもその内、自分の稼いだお金だけでやり取りしようとも考えていた。

今日は他のさびしい住人共に、直美の声を聞かせてやろうという優越感に浸っていた。

山口の部屋は一階の中央より左寄りの部屋だった。部屋に向かう時、『コーポレート』の住人と思われる人とすれ違い、向こうは気まずそうだったが、山口は気にしなかった。

部屋のドアは開きっぱなしになっていて、山口はしまったと思った。

「鍵はちゃんと閉めておかないと危ないよ」

「大丈夫。どうせとられるもんなんてないんだから」

直美が部屋に入ると鍵を閉めた。山口はポケットをさぐり、あれ、鍵どこやったんだっけと心の中で思いながら、ここで挙動不審な態度をとっていたのでは、ムードが台無しになってしまうから、まあいいかと開き直った。部屋に入ると鍵を閉めた。

直美は部屋を見ても遠慮した様子はなく、綺麗にしているねといった。山口は早速エアコンのスイッチを入れ冷房を掛けた。カビ臭さが直美の付けていた甘い臭いの香水に変わった。もう、山口の理性は限界に来ていた。

「なんか飲む？　まだ飲み足らないっしょ？」

「じゃあ、もらおうかな」

山口は、ビール五缶を飲み干し、若干いつもと味が違うかなと思ったが、自分が酔っ払って味覚が可笑しくなっているだけだなと気にしなかった。テレビを見て、バラエティー番組が終わると同時に、事に及んだ。アルコールが二人をより一層燃え上がらせた。終わった後は会話もせずに爆睡した。

そして、二人の最後の夜となった。

25. 同時殺人のなぞ

18

中目黒区××コーポレート一〇五号室で二人の遺体が発見された。『コーポレート』の全体の構造は、二階建、各階に八部屋あり、各部屋は六畳のワンルームユニットバス付きで統一されている。ケンジは警察から殺人情報を入手してから許可をもらい、現場へと赴いた。既に捜査官と鑑識官は現場での取り調べを終了し、戻ったところだった。ケンジに付き添ったのは捜査共助課の巡礼だった。彼の業務は他都道府県での捜査相互協力、指名手配に関するものである。

被害者が発見された部屋一〇五号室は犯人と思われる人物と争った形跡は殆どなく、男の一人暮らしにしては整理整頓されていた。というより、全体的に家具自体が少なく、六畳でも広く感じる。残っていたのは殺される前に飲んだと思われる開き缶のビール五個。鑑識官の話だと、空き缶の湿り具合から、殺される直前に飲んだと思われるらしい。遺体の解剖結果でもアルコールが検出されている。被害者の性格から飲んだビールの空き缶を二、三日放置することはまずないという友人の裏付けもあった。ベットのシーツ以外は乱れがなかった。土足で入室するのをためらうぐらいである。

「二人発見されたのは七月二七日の午後三時、被害者の山口亮の友達である村上光次が、前日から連絡が取れなくなったと心配になり、彼の部屋に行ってみたところで発見したそうです」

「発見者は、具体的に前日の何時ごろから連絡していたんだ？」

「だいたい七月二六日の午後十時ごろからということなんで、前日

という表現も適切ではありませんね」

「いや、そんな表現にこだわなくてもいい。それで、その後どのくらい連絡を取ったんだ？」

「携帯電話で四回ぐらいは連絡したそうです。いずれも夜が明けて午前十時以降に連絡したそうですが。村上光次の話によりまずと、被害者である山口亮は、その、男と女がする夜の営みみたいなものをしている時……」

「まわりくどいな、セックスなら恥ずかしくないだろう」

「はい、性交渉の前になると携帯電話をマナーモードにしておく習慣があるらしく、それで気が付かないケースもあります。ですが、後で着信履歴を見て、必ず電話を返すそうなんです」

「それは連絡どんな用事で連絡を取ったんだ？」

「七月二六日の午後二時のことですが、村上は山口に友達数人と来週海に行くという誘いをしています。その時山口は渋谷にいて、電話口の様子では、まだもう一人の被害者宮崎直美とは一緒にいなかっただろうと言っています」

「どういう根拠でそうなるんだ？」

「村上が言うには、その時ナンパ？　した女の子というのですか、その他、コンパの話もしていましたが、それは別として、連絡した時は、山口はナンパの最中だと言っていたそうです。村上は宮崎直美の遺体と身柄から、知り合いではないと言っていましたし、山口は無類の女好きで、頻繁に街を歩いている女に声を掛けてはこの部

屋に呼んでいたそうです。部屋がきれいに整頓されているのもそのためだと村上は言っていました。最近の若者はすごいですね」

「考えが古い。あんたも俺とそんな変わらないだろう。最近でなくてもナンパをしている奴はいっぱいいる」

「あいかわらず言うことが厳しいですね、まあ、そういう根拠があったんです」

ケンジは腕を組んで部屋を見渡した。今にも誰かが帰ってきてそうな雰囲気だった。

「外傷はほとんどないということだが、死因はなんだ？」

「いや、まったく外傷がないというわけではありません。死因は絞死です。これは二人とも共通なのですが、首に残っていた跡を見ますと道具はわりと細めの縄で、発見当時、二人の遺体は裸体でした。両者の状態から先ほども言いましたが、性交渉をした後も見受けられます」

「では、事を済ませ、寝静まった後に何者かが部屋に侵入して二人を絞死させたことになるな。その前に、二人の内どちらかが一人を縄で絞め殺し、もう一人は自分で自分の首を締めたという可能性はないのか？」

「それはありませんね。まずそうなれば、どちらかの遺体の掌あたりに、縄の屑が付着していないと不自然です。ですが、それはありませんし、むしろ部屋内部に殺人に使ったと思われる道具が見当たれません。よって最後に自分も自殺したという話はなくなります」

「例えば山口亮のほうが先に宮崎直美を絞め殺し、自分の首にも縄の跡を付けてから、縄をどこかに捨てる。それから山口が違った方法で自殺したというのは考えられないか？ 犯人をわざと見立てることを考えて」

「それだと、かなり性格が湾曲していますよ。ですが、遺体の解剖の結果、両者とも自殺した形跡はなかったとのことです。単純に縄のようなもので絞められ、呼吸困難で死亡したと報告もありました。縄や遺体には他者の指紋は付着していません。また、これは大変興味深い話になるのですが、二つの遺体から、麻薬が検出されたそうです。検出されたのはモルヒネになりますが、鎮痛作用がありアルコールと同時に摂取して効果が倍増したと思われますね」

「麻薬か。今は金さえあれば何でも手に入るからな。で、山口亮の交友関係からは彼が麻薬を常用しているかは聞き出しているか？」

「村上光次の話だともそういう話は本人から聞いていないそうですね。実際常用していたとしても素直に言うとは思えません。まあ、知り合いの大学生が常用しているという話を聞いたことはあるそうですが、具体的な名前は聞けずじまいです」

「学生全員に家宅を行えば、麻薬が発見されるという話は切りがなさそうだな。山口亮が常用している可能性はゼロではないとしても、念のため相手の直美の関連者にも聞き込みをしてみてください」

「わかりました」

「それと、発見者がいて、直ぐに通報したと言っていたが、この部屋は事件が起こった時鍵はかかっていなかったのか？」

「かかっていました。発見者の村上光次はインターホンを数回押していたそうです。でもなかなか被害者が出てくる様子もなく、いたずらのつもりで表のベランダ側に回ったそうです。すると、カーテンは三十センチ程度開いた状態で、そこから中を覗いてみると白目になっていた被害者二人が見え、急いで通報したそうです」

「カーテンが三十センチ開いていたというのが気になるな。二人は他人に見られないと燃えないという趣味はあるのか？」

「一応村上には聞いてみましたが、知らないそうです。でもさすがにそういう趣味はないでしょう？」

巡礼は微笑みながら答えた。

「だから考えが古いつて言ったんだ。今はどんな悪趣味でもオープンにさらけ出すんだ。まあ、それは置いておこう。殺人の起こった状況からすると密室という事になるのか」

巡礼は直ぐに真面目な顔に戻った。

「はい。警察が到着した時も、このアパートの大家さんに鍵を借わせてもらいましたから。外から中へと入れる場所は、玄関側のドアとベランダ側の窓のみとなっています。この二つの場所はいずれも施錠されていて、鍵を強引に空けさせた痕跡也没有」

「被害者が犯人を招き入れない限り、まず部屋の中に侵入することは不可能になるな」

「そうですね。見てもらおうとわかるのですが、一〇五号室は玄関のドアに設置されたチェーンが壊れていて使えない状態です。それで

も、出入りするときには被害者が施錠しなければこの事件状況を作りだす事も出来ません」

ケンジは玄関のドアを見た。チェーンが壊れているというより、元々チェーンが設置されていたであろう痕跡しかなかった。つまり、修復するにはチェーンだけではなく、チェーンを取り付けるものも必要だった。

「犯人は鍵の開錠が出来る奴としか考えられないな。二四時間サービスで開錠を行っている業者は結構あるが、たいていは身分証明だの、この部屋に住んでいる証明ぐらいは出来ないと、実際開錠はしてくれないだろうし」

「ええ、ケンジさんの言う通り、今はその可能性しか考えられませんか」

「元々被害者達はドアか窓の施錠を行わずに寝てしまって、犯人はまず開いている方から侵入した。二人と殺した後、ドアの方からでて、外側の鍵穴から細工して施錠を行った。あるいは出入り供鍵穴細工で開け閉めを行ったか。前者はまあ当時の被害者二人がこれらの展開のことも考えていただろうから可能性は少ないが、どちらにしてもさほど問題はないな」

「そうですね。このアパートの住人に聞いてみたんですが、被害者二人が殺された昨夜、犯人と思われる不審人物を見たとの情報はまだ入ってきていません」

「『コーポレート』に居た住人はどれくらいいたんだ？」

「ええ、『コーポレート』に住んでいるのは、だいたいが独身男性

で、二十代前半から三十代前半まで。合計でも十人。しかも昨晚ここにいた住人は四人足らずだったそうです。被害者と同じ一階に住んでいて、この部屋の両隣一〇四号室、一〇六号室は昨晚不在、右に二部屋はなれた一〇三号室の野本さんは仕事から帰ってきたのが午後十時過ぎ、寝たのが午後十二時前でその間、被害者二人の話し声は少し聞こえたようですが、その他はまったく物音を聞かなかったそうです。またこの部屋の真上になります二〇五号室の住人も不在でした」

「ここのアパートの大家さんは何か言っていなかったか？」

「残念ながら、『コーポレート』の大家である鈴木さんは一日のうち殆どここには姿を表さないそうです。せいぜい一週間に一度ぐらいで、何か住人から連絡があれば実家の自由が丘から来るそうです。元々金銭的に余裕があった頃に購入した土地らしく、前は鈴木さんの奥さんが管理をしていたそうですが、四年ぐらい前から体を壊したらしく、思うように『コーポレート』の管理が出来なくなってしまうって、今は鈴木さん一人で不動産業と、ここの管理をしているそうです」

「そんな矢先に事件が起こってしまったわけか」

「はい、話ではこういう経験は初めてのようで、大変悲観なされていました。まさかここで殺人事件が起こるとは信じられない様子でもありましたが、これからは住人が『コーポレート』から出て行ってしまうのではないかと心配もしていたようです」

「わかった、少しそこら辺を歩いてくるよ」

ケンジが一〇五号室を出ると煙草に火を付け、玄関ドアの横に設

置された山口の表札を一瞥した。確かにドアノブが何かによって壊されて、またそれを復旧した形跡もない。しかし、ドアの真ん中より下の部分にある郵便受けは縦五センチ横二十センチ程度のスペースがあり、外側から針金のようなもので上手くやれば内側のドアノブに付いてる、捻って施錠するタイプの鍵を動かせなくもない。どちらにしても、チェーンが壊れたままになっている状態で、『コーポレート』のセキュリティはあまりにも軽薄と言える。一〇五号室の正面からは垣根を隔てて違う五階建てのアパートが見えた。名は『エリーゼフラット』。

ケンジの見えている場所からだ正面のアパート『エリーゼフラット』は外の廊下側にあたり、ちょうど『コーポレート』と対をなすような作りだった。夜中に部屋を出入りしない限り、正面のアパート住人も犯人を目撃する可能性はなくなってしまうが、今は『エリーゼフラット』の住人の情報だけが頼りになる。

その後、ケンジは周辺を歩きながら、大家の鈴木による犯人説を考えた。また、頭の片隅でT川沿い、H町で起こった殺人事件との関連性があるのではないかと考えた。

26. 見習探偵推理

朝刊の新聞には大々的に中目黒で起こった事件を載せていた。部屋の間取りまで図示されていた。ケンジがこの事件を捜査していると亜紀が言っていたので、義高は急いで菅野の部屋に行った。

「なんか、ようやくミステリーって感じがしてきたな。やばい、ゾクゾクしてきた」

菅野は目が輝いていた。そう思うと推理小説がならんだ本棚を見渡して落ち着かなかった。

「ようやくって言うのはやめろよな。これは殺人事件で、人の命がかかっているんだからさ」

「まあ、いいじゃないか。俺もこういう捜査だったら力になれるよ。うな気がするんだ」

とりあえず、調子がいいなら言わせておこうと義高は思った。菅野の部屋に来る途中差し入れて買った缶コーヒーのプルリングを開けた。なぜか缶コーヒーで乾杯した。菅野は一気に半分飲み干すと、うまいなといいながら煙草に火を付けた。煙を掃くと、灰皿に煙草を置いて、菅野は部屋の隅に置いてあった新聞を手で取り出した。

「よし、それじゃあ、本題に入ろう。これが事件の記事だ」

菅野は朝刊の新聞記事の内容を熟読していた。さすがに義高は被害者の名前までは覚えていなかった。

「不可解な密室殺人事件。発見者が通報した後まで被害者二人がいた部屋の鍵は掛かったまま。しかも絞殺」

「この記事の内容だと、犯人が別にいることがわかるね」

「ああ、二人のうちどちらかが先に一人を殺したとは思えないね。犯人はこの状況の中、トリックを使って部屋に侵入したんだろう」

「そうだね。でもどうやって侵入したのかは書かれていない」

「侵入方法がわかっていれば、苦労しないだろう。新聞に部屋の間取りまで載せるってことは、誰かのアイデアが必要ってことだ」

「捜査のキーポイントはそこなんだ」

「紛れもなく。ただ、この事件は大家さんのいる貸しアパートで起こったことだから、高橋家のように外側からあける鍵が存在しないってことはない。少なくとも大家さんはこの一〇五号室の鍵をもっているということになる」

「なるほど。何らかの方法で犯人が一〇五号室の鍵を手に入れている、それを使った可能性がある」

「うん、そこで俺の推理があるんだ」

「どんなだ？」

菅野は大事なことをしゃべろうとすると直ぐに言おうとしない。義高は苛立った。菅野はその様子を気にしないで煙草に火を付けた。

「義高もわかるだろう。だから俺の言いたいののは、そのアパートの大家さんが怪しいんじゃないかということだ」

「おお、かなりいい線じゃないか菅野。大家さんなら事件現場の一〇五号室に二四時間自由に出入りできる」

「そういうことだ。しかも大家さんであれば、そのアパート『コーポレート』の構造もよく理解しているから、すんなり犯行に及ぶこともできる」

「確かに、『コーポレート』の大家さんなら、どのくらいの時間になれば、住人が部屋を出入りしなくなるという予測も立てやすくなるし、『コーポレート』周辺の住民のことだってわかっていているはずだよ、すごい菅野」

「たいしたことはないといった菅野はまんざらではなく優越感に浸った態度だった。」

「動機だって考えられることは沢山ある。大家さんが単純に被害者の生活態度が悪く、何度注意しても直らない、これでは他の住人が逃げてしまうからカツとなって殺してしまったとか」

「十分考えられるね。もう一人の被害者は声を掛けた女の子だっていうし」

「俺がいった動機が当たっていないにせよ、それと似たような動機だと思う。俺らがそんなことで人を殺すなよと思っけていても、本人にしたら相当切実な問題で、ノーローゼにだってなりかねないかもしれない。結局事件は起こした本人にしかわからないことなんだから」

二人は安心して少しの間笑顔になった。

「それにしても、妙なのが、被害者が二人近くにいて、一人が殺された時、もう一人は気が付かなかったのかな。そこまで熟睡できるもんなのかな？」

義高は冷静になって現場での疑問点を挙げた。

「難しいところだね。被害者は寝る前にアルコールを飲んだ形跡があると書いてある。もしかしたら、二人が帰ってくる前に大家さんが一〇五号室に侵入して、飲み物に睡眠薬を忍ばせる……否この推理は強引すぎるな」

「強引でしょ。缶ビール内に睡眠薬はちょっと」

「まあ、それはないとして」

義高と菅野は考え込んだ。どうやら侵入方法よりも難航しそうだった。菅野は二本目の煙草に火をつけた。

「こういうのはどうだ。被害者二人が寝ている間、犯人は口元に一時的に気絶作用のある物質のしみ込んだ布で、二人を気絶させた。その後犯行に及んだ」

「考えられるね。でもそれなら遺体を解剖すればわかることだろうけど」

「実際のところはそういう姑息な手段をつかわないで二人を同時に殺したのかもしれない。縄なら縛り方によって同時に二人の首を絞

めることだってできるしね」

殺人方法の推理は大きく発展することはなかった。こっちの分野は自分達が考えずとも、警察側の方が的確な答えをはじき出してくれるだろうと二人は納得し合った。

「それにしても、ケンジさんっていろんな場所に出向いているよな。警察なら担当している管轄というのがあって、区間外であれば別の警察が取り調べをするのに」

「ぼくも最近思っていたことだよ。ああ見えて、ケンジさんって過去にものすごい実績があって、警察からも相当頼りにされているんじゃないかな」

「義高も、すごい探偵の弟子になったな」

「たいしたことじゃないって」

「俺思っただけど、義高と一緒にくつついて捜査するより、義高が持ってきた情報を推理したりするアドバイザー的な役の方がいいと思うんだ。正直ケンジさんとか亜紀さんは苦手なんだけど、そっちのほうが頭が冴える。だからこれからはそれでいいだろ？」

「まあ、ぼくは別にいいけど。ケンジさんはいって言うかな？」

「大丈夫。俺は義高と同じであまり頼りにされていないようだからな。じゃあ、何か情報があったら直ぐに俺のところに伝えてくれよ。頼むな義高」

義高は菅野の部屋を立ち去る時に、玄関に新しい靴があったのを

発見した。黒いブーツで踵が高く、菅野にしては意外な趣味だなと思った義高は、どこで買ったんだと聞いてみた。菅野はそっけなくなにやらあせった様子で大学に入ってから原宿で購入してあったと返答した。菅野は恥ずかしいのか、あまり触れてほしくない話題のようだったので、義高はそれ以上靴に執着しなかった。

27. 推理は没

義高は早速菅野と練った推理をケンジに伝えようと、『美辞麗句探偵事務所』に向かった。到着するなり、偶然ケンジは事務所にいて、プラズマディスプレイからライブDVDを見ていた。義高だと確認すると、相変わらずお前かといった態度を見せたが、義高はかまわず話をした。反応は薄かった。期待が不安に変化した。

「犯人は大家ではない」

「えっ、どうしてですか？」

また肩透かしを食らった。自分達が必死で考えた推理はどうしてこうも簡単に否定されてしまうのだろうと思った。

「聞き込みをしたところ、大家は、事件当日は仕事、その後、病院に行き、奥さんといったアリバイがあった」

「でも、一〇五号室を開ける鍵は大家さん以外に持っているとは考えられない」

アリバイがあるとはいえ、大家だって夫婦で共犯ということも考えられる。

「もちろん、アリバイがあると確信したのはそれだけじゃない。大家はめったに『コーポレート』へ顔を見せることがない。よく知っている住人は一週間に一回来ればいいほうだと言っていた。事件三日前に姿を現して、掃除をした後直ぐに帰ってしまったところも見ている住人がいた」

「信用できるんですか？」

「信用できないな」

ケンジはニヤリと微笑んだ。義高はケンジの心が読めなかった。

「残念ながら、病院の医師も大家が朝まで奥さんと一緒にいたことを知っていた。その病院は家族が徹夜で看病することは許されているが、深夜に病院を出入りすることは禁止されている。こっそり出ようとしても守衛に止められてしまう」

「じゃあ、大家さんは事件当時病院に籠っていたと」

「そういうことになる。もちろん緊急の場合、深夜に病院を出入りすることは許可されるが、それでは誰かしら大家が病院から出たことを把握しているはず」

「アリバイが完成するってことですね」

「ああ。深夜の病院という密室がそれを完成させたんだ」

こうなると、菅野と考えた推理が意味をなさなくなってしまう。
義高は呆然とした。

「なに、俺も最初そう思っていたが、視野を広げれば単純なことだ。俺が現場を見ていたところ、『コーポレート』入り口に設置された各部屋の郵便ポスト内、それも被害者山口用の郵便ポスト内はずっと掃除していなかったのかほこりが溜まっていた。もちろん郵便ポストの鍵は開きっぱなしだった。そこに一〇五号室の鍵形と思われる

る跡があつた」

「でもそれなら、山口さんが部屋に入るとき使ったんじゃないですか？」

「いや、『コーポレート』住人の証言があつて、それは山口が前日でかける前に部屋の鍵を郵便ポストに入れる所を見ていたんだ。そして、女を連れて戻ってきた被害者とばったりあつた他の住人もいて、その時一〇五号室は開いていたそうだ。それに驚いた山口は郵便ポストにあつた鍵を取りにいく様子はなかったらしい」

「それでも、鍵は郵便ポストの中にはなかった」

「そうだ。今日確認したところ発見された遺体、一〇五号室にも鍵と思われるものが残っていなかった」

「一〇五号室の鍵は犯人が持ち去ったとしか考えられないというわけですね」

「つまり犯人は逃げさる際、決定的なミスを犯したんだよ。密室殺人でもなんでもないことを証明してしまったわけだ」

犯人のミスがあつたとはいえ、現在も鍵を持っている保証はない。何処かに捨てる時間もあるわけだし、それを見つけ出したとしても、指紋が残っているとも限らない。義高は事件解決がここまで大変なのかと思った。粘り強い性分でないとしても勤まるものではないな。

「明日は高橋家に捜査へ行く予定だ。準備はしておけよ」

――高橋家の捜査。そうだ、自分は昇のことを調べていたんだっけ。

義高はすっかり忘れていた。そもそもそれがきっかけで探偵のアルバイトを始めたのにむかかわらず、後から起こった事件で頭がいっぱいだった。

「ケンジさんも来るんですか？」

「とぼけた質問はするな。お前だけで聞き込み捜査を上手く出来るとは思えない。俺が同行したことで話しが早くなる」

「わかりました。確か昇の兄さんが帰国中でしたね」

「ああ、明日は接触するには絶好の機会だ」

「絶好の機会というと？」

彼の滞在期間は五日間、もう二日は過ぎているとして明日は三日目の月曜日だった。義高は残りの三日間ならいつでもいいのではないかと思った。

「調べによると、明日は高橋家の両親が二人で出かけるらしい。ほんの数時間ということだが、高橋健太が一人になる時間がある。アポもとっている」

「そういうことですか。でもどうやって調べたんですか？」

「秘密だ。俺はこれから用事があるから、お前はもう帰れ」

さすがにどんな用事かは聞けなかった。義高はそう言われると素直に事務所を出た。

探偵とは謎が多いなと義高は思った。高橋家にしても息子の自殺を調べられていて不振に思わないのだろうか。やはり、そこら辺のやりとりはケンジの腕がいいからなのだろう。自分が捜査の標的になったときの事を考えると未恐ろしい。

28. 兄弟との接触

19

翌日、義高はケンジの指定通り、高橋家から歩いて三分のところにある公園にいた。待ちあわせの時間を過ぎたあたりでケンジは現れた。長い金髪にスーツといった服装、長身でハーフ顔は、やはりこういう場所では不釣り合いだった。

高橋家のインターホンを鳴らすと、昇の兄らしき男、高橋健太が現れた。二十代後半ぐらいの好青年。顔の輪郭はどことなく昇に似ていた。

「どうも、先日連絡入れました探偵社のものです。はじめまして」

「ケンジさんでしたか。はじめまして、健太です」

知らない金髪の男と、大学生が尋ねてきて最初は驚いた態度を見せていた健太は、ようやく納得した。健太に案内され、高橋宅へ入った。彼の雰囲気から、表情が豊かで社交性があるように思えた。案内されたのは、前に訪れた時と同じリビングルームだった。

「家には誰もいないので、たいしたものは出せませんが」

健太はそういって、アールグレーの紅茶を出した。

「数年前にイギリス出張の時、お土産で買ってきた紅茶で、それから母が気に入ったので、今でも取り寄せているんです」

「そうですか」

いただきますの言葉もなくケンジはティーカップに口をつけた。義高はケンジにならった。砂糖を入れないでも甘みがあり、苦さより香りが強い。

「確かにいい味だな。取り寄せる気持ちもわかる気がする」

健太は狼狽した。初対面に等しい状態で、なれ慣れし過ぎる。

「ケンジさん、それはちよつと……」

義高はフォローが出来ないでいた。

「何だ？ 俺は敬語が苦手なんだ。人間同士の距離が縮小しない。会話を円滑に進める為だ。健太さんも理解してほしい」

「でも……」

「いいんですよ、京理さん。アメリカや、海外の数多くは、敬語が殆ど存在しない。これからは私もそうさせてもらうんで」

ケンジの性格上そうなるのも不思議ではないが、相手によっては不快にならないのだろうか。さすがに自分は無理だと思い、無難に敬語を使用する方針にした。

「早速例の話をしよう」

「そうだね。でも、今日はもう一人来る予定だと言ってなかった？」

もう一人？ 健太が言っている意味が理解できなかった。義高はケンジから何も聞いていなかった。

「ああ、もうじき来るんじゃないか。今この場にいらなくても関係ないし、ここの場所は知っているから心配ない」

誰だ？ 根本さんが来るのか。さすがに昇の調査で警察まで呼んでしまったてはよくないのではないか。

「ならいいとして、ケンジさんが話したいことは、弟のことだよね？」

「いまさら、前のことを蒸し返すのは気分がいいとは言えないが、それは我慢してほしい」

「別に大丈夫。実は私も関心があるから」

昇の自殺に関心があるのは兄弟の絆なのだろうか。確かに出張中で通夜に出られなかったことは聞いていた。

ケンジは、この家で自殺した昇の部屋状況を説明した。根本から聞いた話と差異はなかった。健太は両親からくわしく聞いていなかったのか、驚いた表情を見せた。

「完全に自殺する状況が出来ていたわけだ」

健太がまとめた言葉は至極当然のものだった。話はそれで終わってしまおうと義高は思っていた。

「ただ、気になる点があるんだ」

「というと？」

「説明した通り、昇君が自分で死を選んだことは間違いない。他殺の可能性はない」

突然インターホンが鳴る音がした。

「ちょうどいいタイミングだったようだな説明する手間が省ける」

健太は急いで玄関へと向かった。どうやら、ケンジの呼んだもう一人だろう。健太はどうぞと言ってゲストを招き入れた。そこに現れたのは……

武本博之だった。つい最近接触したばかり。なぜ彼が来ているのか。武本自身も義高達の姿を見て嫌な顔をした。

「俺が探偵のケンジだ、そう変な顔をするな」

不健康に痩せた長身の体は強張っていた。

「また会ったね。武本君」

「そうだね」

「でも、なぜ武本君が呼ばれたんですか？」

「もちろん、捜査に重要な人物だからだ」

重要な人物？ 確かに昇と仲が良かったのはわかる。それに、ど

んな経緯で彼が捜査に協力することを決めたのか？前に会った時、あれだけはやく帰ってくれという態度を取っていたのに。義高には不思議で仕方なかった。

健太を先頭に、二階へと移動した。高橋宅の二階には五個の部屋が存在する。トイレ、バスルームを含めると七部屋。健太が言うには、階段が中央にあり、上がり切った所で書斎部屋に突き当たる。ここは父親の部屋でもある。そこを基準として左右に廊下が伸び、書斎の右隣が健太の部屋、向かい合っている部屋が両親の寝室で二部屋。書斎の左隣が昇の部屋、向かい合っている部屋が文子の部屋で二部屋。あと、左右に伸びた廊下左端の突き当たった場所がトイレ、右端の突き当たった場所がバスルームとなっている。一階はキッチンを覗けば客人用に構築さて、二階は完全に家族専用となっている。どの部屋も十畳はあり、自分の住んでいる六畳ワンルームと比べると気持ち減入った。

四人は昇の部屋に入った。片付いていた。部屋は入って右側にベツト、左側は机と服を入れる棚、に本棚がある。そして正面にベランダに続く出窓。ケンジはドアノブに視線を向けた。警察が発見当初、開けるために付けた傷はなかった。

「ドアは頑丈に出来ている。中から施錠された状態で、外から体当たりで開けるのは不可能。警察は強引にドアノブを破壊して中に入ったらしい」

ケンジはそう言った。中から施錠できる構造を確認すると、今度はベランダに続いている出窓を見た。こちらはガラスを割らない限り、施錠された部屋に入る手段はない。そしてベランダへ出た。広くて、数々の植物と、二つのテーブルにそれぞれパラソルと椅子が並べられている空間は、オープンカフェと同じだった。ここは隣の

部屋にも繋がっていて、つまり、書斎、健太の部屋のベランダにも繋がっている。真下はリビングルームだった。

「母は昇が自殺していた日、私の部屋からベランダに出て、昇の部屋の出窓を確認したそうです」

健太はベランダを調べ終わって戻ってきたケンジに言った。

「なぜ、隣の書斎からベランダに出なかったんだ？」

「たいした理由はないよ。父は昔から自分の部屋でもある書斎に入ってほしくなかったみたいです。そのせいもあったのかな」

「はいつてほしくない理由でもあったのか？」

「父は几帳面な性格で、書類だとかの置いてある場所は常に決まっている。だから他の人が入室して、ものを動かしてほしくないみたいで」

「なるほどね」

「なんなら、書斎もしらべる？」

「別にいい。それより、昇君の使用していたパソコンは起動できる？」

プリンタ、パソコン雑誌やソフトが並べられている机の中央に置いてあるパソコンの電源をコンセントに差し込んだ。デスクトップとモニタが起動した。

「あつ、そういえば、パスワードをしらない」

健太がしまったという態度を取っていると、

「やっと武本の出番だな」

そういうことかと義高は思った。彼の役目はこんなところにあつた。武本はブラインドタッチであつという間に十一桁のパスワードを打ち込む。

「俺が指示したことをやってくれればいい」

武本は無言で頷いた。さっきまでは浮かない表情をしていた彼だったが、パソコンに触れている彼は水を得た魚状態だった。

「まず、メール画面を開いてくれ」

ここでもパスワードが必要だった。武本はパスワードを打ち込むと、ゆっくり操作し一件一件見せていった。送受信トレイの残ったメールはたいした量じゃなかった。

「昇はパソコンを圧迫しないため、必要ないメールは消してしました。俺も同じだけど」

武本がボソツと言った。

「どれもあたりさわりのない、メル友のやり取りだな。次は昇君が作成したデータボックスを見せてくれ」

検索でそれらしきファイル名を入力した。

「このファイルを開いてくれ」

ケンジの指示したファイルは更新日が昇の命日から二日前だった。武本の操作で開かれたファイルは、ワード文書で書かれたもので、内容はケンジに見せてもらった昇の遺書と同じだった。ケンジはポケットからなにやら紙を取り出した。それは昇の遺書だった。

「このフォーマットは縦三〇×二〇文字でいいな？」

「はい、そうです」

「同じだな、誰かが彼以外の誰かが作成したわけではない」

「遺書？ 中身を私にもみせてくれないか？」

ケンジは紙を健太に手渡した。健太は遺書の内容は知っていたものの、内容までは把握していなかった。読んでいる最中、健太は表情が曇った。兄弟の死による悲しみが蘇っていた。ケンジと武本の二人はそんな様子をまるで気にしていなかった。

「じゃあ、例のサイトを開いてくれ」

「自殺志願者が集うサイトですね」

武本は履歴からサイトを検索した。

「これって警察が調べたことなんじゃないんですか？」

義高はここまでの捜査が意味ないのではないかと思ってしょうが

なかった。冷静になると、どれをとっても、警察が捜査したことを辿っていると思えない。

「いや、警察が調べたのは、昇君の遺書が書かれたファイルだけだ。パスワードを知らないとここまで調べられないだろ」

「でも、そうになるとパスワードを知らないとなると、このパソコンは弄れないしファイルまで見れないのでは？」

「今武本が操作しているところを見ていてわかっていたと思ったが、何も知らないようだな。パスワードはあくまでネットワーク使用のものだ。パスワード入力画面でキャンセルを押せば一応は弄れる設定になっている」

「それで」

武本はこれかという、画面には自殺志願者が集うサイトが表示された。ログインの会員IDまで知っていた。通常、セキュリティに関わるパスワードは、打ち込んでも画面上には隠し文字として表示されて、所有する本人以外はわからないのだけれど、彼はすべて昇の近くで見た指の動きから覚えているらしい。

サイトに掲載された内容は、目を疑うものばかりだった。自殺方法、自殺志願者の日記、過去の自殺した人の状況等。

「彼がやっていたチャットの内容はわかるか？」

「とりあえずやってみますが、さすがに残っている保障はありませんよ。チャットルームはいろんな人が存在しますし、常に内容は更新されますから」

「能書きはいいいから早く調べろ」

武本はふて腐れつつ、いろんな操作を試みていた。気が付くとケンジはメモを取っていた。健太は昇の遺書を読んでから、めっきり口数が少なくなった。確かに、気持ちはわかった。

「あった」

静かな空間を切り裂いたのは武本の声だった。

「よし、なるべく七月九日から前の、新しい順に表示してくれ」

昇はこのサイトでノボルというシンプルなハンドルネームを使用していた。一番新しかったのは七月八日。ヒツキという相手とのやり取りだった。

29. 人生最後のメッセ

ノボル（以下…ノ） 「ヒッキさんは会社なんで辞めたんですか？」

ヒッキ（以下…ヒ） 「人間関係とかが苦手だったから。自分の性格から、入社して二年も続いたのは軌跡としかいいようがないね」

ノ 「そんなにきつかったんですか？」

ヒ 「そうだね。何度も止めようと思った。ノボルはまだ学生だからわからないかもしれないけど、社会人というものは想像以上につらいものだよ。小さい頃に描いていた夢なんてものは一切存在しない場所。人と人がいがみ合って成り立っているんだよ社会というものは」

ノ 「そうなんですか……」

ヒ 「嘘じゃない。俺は真剣に自殺を考えたのは最近だよ。会社を辞めてから結構たっているし、その間、貯めていたお金も底を付いてきた。そうなる、また働かないといけないだろ。それを考えると、地獄だった」

ノ 「ぼくは今でも自殺のことは考えていますけど」

ヒ 「ふーん。俺はね、正直社会人になる前までは自殺なんてまったく考えたことがなかった。自分のことを強い人間だとはもちろん思わないけど、学生という身分はたぶんこの世の中で一番らくな職業なんだと思う」

ノ「一番楽な職業」

ヒ「そう。裏を返せば、学生でいることが辛いのであれば、このまま社会人になったところで、何も出来ないと思う。要は、君の将来は苦勞しか待っていない」

ノ「経験者に言われると、説得力がありますね」

ヒ「いや、本当のことを言っているだけだ。君に残されている道は二つしかないということも言いたい」

ノ「どういことですか？」

ヒ「要は、君の将来を考えてみると、二つの道しかないということだよ。一つは今からでも勉強をし、また社交的になるよう努力をする。言っていることは簡単なようで難しい。第一容易に実行出来るのであれば、誰だって成功者になれるんだからね」

ノ「もう一つは？」

ヒ「もう気が付いているかもしれないけど、それは自殺してしまうことだよ。君も自殺サイト歴は長いようだから、願望ぐらいはあっただろう？」

ノ「今でも少しあるけど……」

ヒ「なら簡単なことだよ。これからの将来、地獄しかまっていない。特に、自殺志願者サイトに集まるような人間にとっては。これはごまかしようがない本場の地獄だよ。社会にでたところで楽しいことなんて何もないんだ。使えない人間はごみ扱いされる。それならい

っそ死んでしまえばいいんだ。地獄を見るまえに」

ノ「ヒツキさんには自殺願望は今でもありますか？」

ヒ「あるよ。今日、明日にでも自殺してしまいたいよ」

ノ「ぼくもです。今の話を聞いてなおさらその思いは強くなりました……」

ヒ「なら、提案があるんだ。聞いてくれるかい」

ノ「はい」

ヒ「俺は明日自殺するよ。なんらかの形で君にも伝わるように手配する。そしたら、君は俺の後を追って自殺をすればいい。それなら少しは楽だろう？自分だけじゃないと思えば」

ノ「楽ですが……」

ヒ「やっぱり、自殺に対して抵抗もあるようだね。なに、簡単なことだよ。睡眠薬を大量に飲んでしまえばいいんだ。苦痛はない。それと、死ぬまで家族や友達に発見されない状況も作っておく。これでおしまい」

ノ「なるほど」

ヒ「よし、決まりだね。たぶん俺のニュースはテレビで放送される保証はないけど、少なくともこのサイトには掲載されるから。友人に頼んで乗せてもらうことにする」

ノ「本当に自殺してしまうんですね？」

ヒ「もちろん。まあ、俺は先にこの世からおさらばするから、君がもし後を追わずに生き続けても俺には確認できないけど、自殺以上に苦しい現実が待っていることだけはわかる。あの世で君の事を哀れむだろう」

ノ「そのつもりはありませんよ。ぼくの家には睡眠薬が常備されていますから、いつでも手に入ります。家族も親戚のところに行くみたいで、明日から何日か家を留守にしますから」

ヒ「それはいい。万全の体勢だということだね。じゃあ、今度はあの世で会おう」

昇がこんなやり取りをしているとは思わなかった。読んでいるだけで気が滅入る。

「ここまでが七月八日分です。次にいきますか？」

「もういい。充分だ」

その後、サイト内を調べた結果、匿名の人物が自殺をしたことは、七月七日のトップニュースという欄に書かれていた。新聞には又もや自殺サイト常連者が自殺とあったらしい。以前義高と一緒に見たサイトがリニューアルしているだけで、内容は殆ど一緒である。昇はこれを見ていると思うが、実際ヒツキという人が死んだかどうかは定かではない。

「よし、武本。お前の役割は終わった。帰っていいぞ」

「えっ、ちょっと待ってください。約束は？」

「ああ、忘れてた。後で送ってやるから心配するな」

「絶対ですよ」

武本はお先にというと、高橋宅から出て行った。

「ケンジさん。武本が言っていた約束ってなんですか？」

「今大人気らしいゲームソフトだよ。それを餌にして釣ったというわけだ」

「ありがちですね」

誤解はやっと解けた。いくらケンジが探偵だったとしても、あの武本が無益で捜査に協力するわけがない。

「下に戻ろう」

健太がそういうと、三人は一階のリビングルームに戻った。義高はそのままにしておいた紅茶で喉を潤した。ケンジは煙草に火をつけた。

「昨晚のことなんだけど」

健太は椅子に座るなり、思いつめた表情で話し始めた。

「父親と私は久しぶりに会ったこともあり、けっこう酒を飲んでい

た。初めは普段の生活、仕事の話だったけど、酔いが回るに連れて、昇の話になったんだ」

「健太は関心があったと言っていたな。でもどこが気になっていたんだ？」

「そう。私はずっと気になっていた。それは昇がなぜ自殺をしなければならなかったのか」

「自殺をするのは自分自身、だが、自殺に追い込むのは周りの環境ということか」

「まさにその通り。正直、両親は昇のことをあまりよくは思っていなかった。父はエリート思考というのかな、そういうのがあったから、昇がろくに勉強もなくなり、家に閉じこもるようになってしまった時は、人が変わったように激怒した。母も同じで、息子がいい大学を卒業していい会社に入るといのが当たりだと思っていたので、父の変貌ぶりにも、むしろ同調していた。こうなると誰にも止められなかった。その頃、姉は結婚して早々にこの家を出て行っていたし、私も仕事の関係で殆ど家には戻らなかったから、具体的に昇がどのように思いつめていたかまで知らない」

「昇がそのようなことに……」

義高は一度たりとも彼から家庭の不満を聞いた覚えはなかった。以前に高橋宅を訪れた時、お嬢様のような口調で出迎えた文子は、すべて仮面を被っていたことになる。人間の二面性など、誰にも存在しうることは知っているにもかかわらず、義高はショックを受けていた。

窓からは、太陽の光が差し込んできた。義高はそれが鬱陶しいと感じた。

「昇が大学に入学してからはだいぶ両親の怒りは収まった。諦めたのかもしれない。どんなに言っても聞かないと母が愚痴っていたし、そう変わるものではないから。しかし、両親が昇を見る姿勢は冷たかったと想像は出来る」

健太はそこまで言うと、紅茶を口に含んだ。感情的になっている様子は見ていて可哀想に思えた。息を吐いて深呼吸をした。

「健太、大丈夫か？」

「気にしないで、話を戻そう。昨晚はそういう話をしていて、私は昇が自殺したのは家庭環境にあったのではないかと言った。両親の顔は引きつっていた。母は『なにを言い出すの』とそれ程反論はしなかったものの、父はそうもいかなかった。『自殺なんてするものは弱い人間なんだ』と激怒した。さすがに私は謝ったよ。引かない性格なんだ。そのまま謝らなければ、家庭崩壊になりかねなかったからね」

家族、特に義高は父親に育てられた経験がなかったから、実感はなかった。それでも、子供を能力だけで判断する両親を持ちたいとは思わない。

「質問があるんだ」

「なんだろう？」

「さっき調べたサイトで、昇君がチャットをしていただろう。あそ

こで、睡眠薬が常備されていたと言っていたが、本当なのか？」

「本当だよ。昇も医師から錠剤をもらっていたようだけど、昔から両親も常用していたから、置いてある場所さえ把握していれば、いつでも服用することが可能なんだ」

「なるほど。後、七月十日は何か昇君にとって大事な日だったとか覚えているか？」

「大事な日」

健太は上を向いて考え込んだ。義高はチャットの相手であるヒツキとの約束を果たしたのがたまたまその日だと思っていたので、ケンジの質問が理解できないでいた。

「そうだ、その日は昔飼っていた猫が死んだ日でもあったんだ」

健太の話しによると、学生時代昇は捨て猫を拾ってきて、長い間飼っていたらしい。ペットとしてではなく、自分の仲間のように可愛がり、死んでしまったときはひどく悲しんでいたとのこと。

「ありがとう。もう聞くことはない。嫌な気分にさせてしまって悪かったな」

「別に大丈夫だよ」

「そろそろ、行くとするか」

ケンジは義高に向けてそう言うと、席を立った。義高にはまだ聞いておかねばいけないことがあるようで、それが何かが思いつ

かないまま、高橋宅を後にした。

外はだいぶ熱くなっていた。日光に照らされたケンジの肌は透き通る質感があった。

「ケンジさん、今までの話が真実だとしたら、もう自殺を否定することは出来ませんね」

「得た情報がどこかで食い違っていたら話は別だったがすべて真実だろう」

「じゃあ、ケンジさんの言っていた自殺否定説の推理のはずれたということですか？」

「外れてはいない。むしろ、健太に会い、高橋宅を捜査したことによってより本格化した」

「えっ、それはどういうことですか？」

ケンジは義高を無視して、通りかかったタクシーを止めた。

「じゃ、俺は違う仕事があるから、またな」

「ちょっと待ってください。ばくの質問に答えてく……」

ケンジはもうタクシー内に入っていた。運転手があの方はいんですかと聞いていたが、ケンジは早く行ってくれと言いつ返した。直ぐにタクシーは見えなくなった。

義高はその場所で呆然と立ちすくんでいた。

30. 犯人を操る

20

まだまだ満たされないのだ。私の欲望には際限がない。ただ、殺すだけではもの足りなくなってきた。幻覚も日に日に激しさを増していた。相手を限定して殺せば気持ちよさが倍増するのではないか？ 考えるよりも行動しよう。もう私に取っては殺しが日課となっているのだから。一人目はOLで女性。二人目は爽やかな筋肉男。次は、カップルなんかどうだろうか。普通のカップルであればありふれていてつまらない。どうせなら誰もが羨むような二人がいい。考えただけでも興奮してくる。恋人を失った相手の喪失感と、次の瞬間もう一人も死んでしまうのだ。

だが、ターゲットが二人同時だとすると相当慎重な行動が強いられる。場所は人気のない公園にしよう。どんなに都会であっても深夜の公園は人気も少ないし、元々危険な人物が平然と歩いている。

二刀流で二人を同時に刺すのがいい。ああ、私は天才だ。桜木町駅で降りた。目的は未だあった。午前一時に例のものを公園で取引する約束をしている。時間は午後十一時ではあるが、人数は少ない。歩いて左程しないころ、山の上に公園を見つけた。外部からの視線は殆どなく、絶好の殺人スポットである。誰もが羨むような二人とあれば、顔を吟味する必要がある。しばらく待つとしよう。

「君が噂の」

私の背後で声がした。迂闊だった。人気がないのに背後の気配に気がつかなかった。普通の男だった。というよりも感じがよい営業

マンだった。

「驚くことはないよ。俺もその道のプロだからね」

「だ、だれだ？」

私は臆していることを悟られない為に平然と質問した。

「それは言えないな」

男はほほ笑んだ。殺意もなければ、私を捕まえるといった態度がない。何者なのか。

「強いて言えば、君に殺されたOLの婚約者だな」

男の言っている言葉は本当なのか。

「ただ、連続殺人犯の君をどうするってことはしないよ。忠告だけはしておくけど」

こいつは私のことも知っているし、すべてを知っている。それでいて友達と接する以上にリラックスしているのだ。

「私は連続殺人犯じゃない」

「わかったよ。忠告というのは、君犯罪が下手すぎるね。近いうちに捕まるよ」

「なんだと」

いつそのことこの男からナイフで刺し殺してしまおうかと思った。

「やめておきなよ。俺はプロだよ。君の昨日今日で覚えたナイフの使い方では、帰り討ちになるからさ。それに俺は君のこと嫌いじゃないんだ」

穿いていた迷彩のズボンから拳銃をちらつかせながら言った。私は動けなくなった。

「私のなにを知っているんだ？」

「知っているさ。全てね。これから殺人をしようとしていることもね。それより、捕まっ

たら俺の罪も被ってほしいんだけどいいかな」

否定すれば殺されるかもしれない。

「どんな罪だというんだ？」

「君も話がわかるね。実はこの間二人の男女を撲殺したんだ。裸のままだったけど、二人の会話を少し聞いたらカップルじゃなかっただろうな。んで、それは中目黒で起こった事なんだけど、もうひとつあってさ」

男が話はじめようとした瞬間、離れた所で携帯電話の着信音が聞こえて来た。

耳元で男は、

「邪魔して悪かったね。今の話考えておいてね。後、君がもし捕ま

ったとしても、俺の言ったことを実行し、それ以外は何も喋らなければ、どこへでもこれを届けてあげるからさ」

そう言うのと、銃の入っていないポケットから白い粉が見えた。

と思うと、足早に立ち去って行った。何者なのだろうか？ いつの間にか私の体は氷が解けたようになり、着信音の主はカップルだった。五十メートル離れたベンチに二人は腰を下ろした。私から見ると背後に位置していた。すべての出来事を忘れていた。目の前にターゲットがいるのだ。今さらどんなカップルだってかまわない。さっきの男が影から見ているかもしれない。かまわない、私のすごさをま近で見せてやろう。

距離は三十メートル、二十メートル、カップルは話に夢中になっている。十メートル、もう私の足音に気付いているはずだ。五メートル、どうしてこうもみんな無防備なのだ。私は左右の手にナイフを握りしめ、二人の背中目がけて突き刺した。

刺さる感触がなかった。刃先が頑丈な石に当たって反発した。

なぜだ……？ 幻覚なのか…… 感触を誤認した経験はないのに。

金髪の男は黒のジャケットを着ていたが、衣類が破けている様子もなく、黒髪の女のジージャンは少し穴が空いただけだった。

次の瞬間、金髪の男がベンチの上に立ったかと思うと、後ろ姿でバック転し、気がついたら、私は取り抑えられていた。両手のナイフは金髪の男がお手玉のようにして空中で弄んでいる。かなりの美男子である。

「本当に来るとはね」

黒いジャケットを脱ぐと、金髪の男は振りかぶり、私に叩きつけた。鈍器のようなもので殴られた感触だ。鉄が混入している。私のナイフが役に立たなかったわけだ。

「マジで怖かったよケンジ」

和風美人の女がそう言っているような気がしたが、私は気を失っていた。

31. 絶望から発狂

21

「気がついたか？」

ケンジは自分を襲った犯人に問いかけた。犯人である男は美辞麗句探偵事務所のソファ―に寝かしていた。

「ここはどこ？」

「俺の探偵事務所だ。それにしてもさ、自分から犯罪予告して現れるなんてルパンみたいなことをするんだな」

同席していた義高はケンジが漫画の世界に出てくるキャラクターで比喻していることが可笑しかった。噂通り、黒ずくめの男で身長も高いが、一度でも疑った武本似ても似つかないような顔をしている。髪は短く剃っているし、眉毛の太さは気が強そうで、腫れぼったい武本とは違い、薄い瞼に眼光が鋭い。悪く言えば、ニユースに出てくるような犯罪者顔ではあるが、若くて青年実業家といったものわからないうらい凛々しい。菅野は同席しているにも関わらず何もしゃべらなかった。

「亜紀、加藤和夫は呼んでいるんだろうな？」

「うん、そろそろ来る頃だけど」

「ということだ、犯人さん。今呼んでいる和夫という男はお前に殺された森明子の婚約者だよ。もしかしたら怨恨で殺されるかもしれない

ないから気をつけな」

手錠を掛けられている犯人の男はようやく表情を取り戻した。

「お前さん、名前は何ていうの？」

「大崎だ」

「ふーん、で俺達に挑戦状を送ってきたわけだ」

「ちょっと待ってくれ。挑戦状だの犯罪予告だの、さっきからよくわからないことばかり言うな」

「はっ？」

小さな封筒を取り出したケンジは、中の紙を取り出して大崎の前に投げ捨てた。

『XXX公園午後十一時十分、連続殺人犯でもある俺がカップルを狙う。お前に勇気があれば私を止めてみる』

「ご丁寧にも俺の事務所宛てに送ってくるなんていい度胸だな。これまでの犯行通り、同じ場所をナイフで狙っていたわけだし、律儀なもんだ」

大崎には何の事だかさっぱりわからないといった表情だ。

「でも、今回もし首とか顔を狙われていたら超やばかったよ」

亜紀はケンジと一緒にカップルの振りをしておとりとなった。衣

服に鉄板を組み込んだアイデアを聞いた時、さすがに義高や菅野も不安になったが、ケンジには迷いがなかったこと、明日の仕事の段取りをH町の警官駆工藤と電話で話あっていただけのもあって、必ず捕まえると思った。

大崎は一連のやり取りを全く聞いていなかった。

「まさか、大崎、お前が送った文書ではないと本気で言っているのか？」

ケンジがこれ程驚いた表情を見せたのは、義高にとって初めてであった。大崎は連続殺人に対しては否定していないが、犯罪予告文に対しては異常な形相で否定したことはケンジにも違和感があった。

「だからさっきから言っているでしょう。その文書は私のものではない。ただ、私の次の行動を知る人間なんているはずがない。私は心の中で思ったことを直ぐに行動しただけだから」

考え込んだケンジは煙草に火を付けた。

もの凄い勢いで探偵事務所のドアは開かれた。現れたのは加藤和夫だ。急いで来たのか、息があがってはいるが、目が据わり顔色が無い。和夫はケンジに指を指された大崎に顔を向けた。

「あなたが、T川で女性を殺害した張本人ですね？」

大崎は面倒臭そうに頷いた。和夫は狂ったように笑い声をあげた。

「はははははははははははは。やっと見つけたよ。よくも殺してくれたね」

和夫の目は完全にイッていた。あらゆる感情が溢れんばかりで抑えられない状態である。危険だ。大崎は手錠をしているし、和夫が飛びかかれば、止められないかもしれない。それなのにケンジは物想いにふけっているようだし、亜紀は異常な男に近寄らないよう、部屋のすみに引っ込んでいる。菅野も同じだ。

「普通には殺さないからね。勿論警察にも渡さないよ。ぼくはね、二六年間で初めて明子という運命の人に巡り合えたんだ。それを外道のお前の手によって殺された。どんな動機があろうと、許さない。すべてを失った。ぼくは会社を辞め、友達を失い、家族からも精神病院に行けと勧められた。お前にとってはどうでもいいことだよな。今まで信頼してきた家族さえ、ぼくの豹変についていけなかったんだぜ。ぼくに残されたのは、お前をこの手で殺し、ぼくも自殺することだ。お前はどれだけやばいことをしているかわかっているのか。わかっていたら、ぼくの前に無表情で姿を現してはいないだろうな。今ここで何人かの目があるからぼくがお前を殺さないと安心して落ち着いているのか？」

大崎は何も言わなかった。

[illegible]

でも背負い、死ぬ覚悟でいる。お前が渋谷のスクランブル交差点に
いようが殺す。刑務所の中にいようが爆弾で刑務所ごと吹き飛ばす。
世界を敵に回してもお前だけは殺す。どんな手段をつかってもお前
は逃げられない。殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

目の前に現れた修羅と化した男を宥めることは出来なかった。義
高は全身が震えていた。殺人という行為は本人だけでなく、周りの
人を巻き込み、救えなくなってしまう程の状況を生んでしまうのだ。
と義高が思った瞬間、和夫はズボンのポケットからナイフを取り出
し、大崎に切りかかった。スローモーションのような映像を見てい
る感覚でも体が動かない。大崎は目をつぶったまま静止している。

金属音がした。和夫は予想外の反発に仰け反った。ケンジが鉄入
り黒いジャケットを振り被り、大崎にナイフが刺さる瞬間刃先は止
まった。大崎は手錠で顔を覆っていた。

「間一髪だった」

ケンジはいつものような余裕の表情が崩れていた。この場にいる
誰もがケンジと同じ行動に出ようと必死に思ったが、体が動かなか
った。空気は張りつめ、義高は現実ではないという錯覚を信じたか
った。

「危ないことはよしなよ和夫さん」

「なななななんで止めるんだ。ぼくはぼくはこいつを殺すため、今
まで頑張ってきたんだ。あなたのような優秀な探偵に依頼してい
つを捕まえるように頼んだのは、ぼくの手で殺したかったんだ。な
のになぜ止めるんだ」

空気が張りつめた。ここにいる誰もが日常から逸脱した状況にリアクションさえとれないでいる。

「あなたがこんな殺人犯に手をくだしてなにになる。将来希望の星となるであろう和夫さんが殺人犯を殺めても誰も喜ばなし、あなたのためにもならないよ。よく考えてほしい。和夫さんは何も罪を犯してはいない。ここにいる大崎という外道は罪の重さをやっとなしにかけているような腐った人間だ。そういう人間を殺したことで、人は人。過去の経歴は関係なく人を殺してしまった事実は身分を越えて罪になる。例えば数年で刑務所から出てきたとしても、あなたは手を汚すべき人ではないんだよ」

和夫は息が荒い状態で反論した。

「でもここにいる殺人犯は、やがて出所し、同じことを繰り返す可能性は高い。人間どのような更生をしてもかわらない心の奥底はあるからね。ぼくのように最愛なる人を、私利私欲で無感情で、無差別で殺してしまうこの殺人犯のようになるんだ。ぼくは許せない。例えば数年後まっとうな人生を歩んでいたとしてもだよ。人の命の重さをわかっていない、尊さをわかっていない人間を、数年かけて矯正したとしても過去の犯罪は消えはしない」

最愛の人の死。義高は考えただけでも気が遠くなるような話だ。神経が弱ければ廃人になってもおかしくない状況下で、和夫さんが人格を失ってもおかしくもないと思った。しごく当然な状態である。冷静に傍観している自分と、恥を忍んで切実に訴えかける和夫の発した言葉にはなにか一つ間違えはないとさえ思っていた。

「変わらないんだよ、ここにいる大崎と、今やろうとしている和夫さんの行動は」

「なんだと。ぼくは」

そういうと、膝から崩れ堕ちた和夫さんの瞳から涙が零れ落ちた。

「少しはわかってもらえましたか。安心しました」

少なくとも復讐で殺人という定義であれば同列となってしまうことをケンジは説明した。

「殺人犯に正当な捌きを訴えるために、被害者の家族は身を削って著名を集める。だが、捌きを下すのは俺らのような一般市民でも探偵でもない。幾千の犯罪が不当な決断において完了してしまうケースが殆どだ。誰にだってそういう場面は不正であると思う。これが現実なんだ。極刑になることはまれになり、いずれは人々の頭から解決した事件は忘れられてしまう」

「そんな世の中なんてどうでもいい。ぼくは明子を殺したこいつを殺すために今日まで生きてこれた。法律だの憲法だの能書きはたくさんだ。ここににいる犯人を殺してしまえばぼくがどうなろうと関係ない」

「ふざけるな」

ケンジは怒声をはなった。音量を凌駕した

放たれている覇気はこの場を張りつめ、氷のように冷たくさせた。

「恨みに満ちた和夫さんの姿を、死んだ明子さんが見たいとは思わない。それが人間というものだ。和夫さんを心配していた周りの人

間関係だって同じおもしろいだろう。和夫さんがもしここにいる大崎を殺してしまえば殺人犯になるんだよ。それが世間だ。周りの人がどれだけ心配しているか、和夫さん両親がどれだけ心配しているかわからないのか。俺だって大崎という人間の屑を殺してしまったことで和夫さんが殺人犯という、大崎と同列になる状況なんて見たくない。和夫さんには今まで構築してきた人格、社会的地位を維持してほしい。それは俺だけではなく、ここにいる人間すべての思いを代弁しているだけにすぎないにしても」

滝のように涙を流している和夫は言い返す術がなかった。自分のことをここはで考えてくれていて真剣になってくれる友人というものは、普通に生きていても出会えないものだ。そう思うと涙がとまらなかった。殺したい、でも未来を考えて明子の分まで生きていく強さを身に付けなければならぬ。葛藤が噴火しそうだ。感情がとうに自分のキャパシティを超えている。そこで得た決断はケンジの放った言葉に影響され、今では生きて、正当な立場であることが大崎という殺人犯を捌けるのではないかという思いが和夫に芽生えた。本来の穏やかな性格がかすかに戻った。涙が乾ききった状態になった。表情は氷が溶けたかのように穏やかになった。

「美辞麗句探偵事務所に依頼をしてよかったです。ぼくは目の前に起こった最悪の出来事に固執しすぎで周りのことはまるで見えていないことがわかりました。今こいつを殺してもぼくの心は晴れないでしょう」

「わかってもらえましたね」

ケンジはくったくのない笑顔を魅せた。男から見ても魅力的な、包容力を含んだ笑顔だ。

「ぼくはここで大崎を殺しません。でも正当な判決がなければ極刑という形で皆さんの署名を集め懇願するでしょう。その時はよろしくお願いします」

ポケットから財布を取り出すと、依頼完了時の報酬をケンジに支払った。義高はその額を見て、初めて昇の調査協力を依頼した時、亜紀に学生では無理だからと言われたことを思い出した。五万円という和夫が支払った金額は、今回命をかけたケンジと亜紀の報酬を考えるとあまりにも安価だ。

「安心してください。責任をもって警察に引き渡します」

和夫は真っ青な顔色だったが、余裕を取り戻し開き直った笑顔で探偵事務所から立ち去った。ケンジは携帯電話を取り出し根本に大崎の逮捕を依頼した。奇妙なぐらい無口だった大崎は抵抗もせず大崎達警察に連行された。亜紀がH町の工藤に連絡を入れて、事件解決を告げた。

32. 呼び出し

22

「連続殺人犯である大崎が言ったらしいんだ。中目黒で起こった男女撲殺事件も私がやったことだと」

連続殺人事件解決から二日後、夏季休暇を迎えた義高と菅野は大学近くの高台にいた。

「謎が謎を呼ぶことがある」

菅野が渋い顔で言った。すべての事件が解決したわけでもない。大崎は犯罪予告を出したことは頑なに否定しているらしいが、撲殺事件に対しても犯行を認めているという知らせを受けた義高は混乱したままだった。裏で絵を描いている人物がまだ存在する。それは大崎という連続殺人者さえ知らない、そして、すべてを操っている人間がまだ捕まっていない。

昇の自殺説を否定する事件も解決はしていない。

「ねえ菅野、大崎という犯人は誰かに依頼なり、命令されて動いていたってことはないかな？」

問いかけたただけけれども、確信していた。どう考えても大崎だけの犯行ではない、と思っていた。

「どうだろうな。特に犯罪予告を探偵事務所に送り付けてきたところは怪しいと思うけど、ケンジさんの話だと、精神鑑定から大崎は

自分の欲求を満たすために殺人を繰り返していたんだろ。少なくともそれは単独で行っていたんじゃないかな」

「そうだね。でも撲殺に関しては今までの方法とは全く異なるわけだし」

「何せ連続殺人犯のすることだぜ。殺し方なんてどうでもよかったんじゃないか。前提ではなく結果的に欲求を満たせば関係ないんでしょ」

「そうなんだけどさ」

義高は腑に落ちなかった。ケンジと亜紀を襲った時は前の犯行と同じくナイフのようなもので刺すといった行動であつたし、いずれも野外での犯行だった。それが急にアパートの一室に暮らしている人物に狙いを変更するものなのか。

「深く考えるなよ。本人が証言したことだし、ここ最近の事件は解決したと思えばいいだろ。俺は婚約者を殺された加藤さんの豹変ぶりを見て気が滅入ってしまったよ。探偵業といっても、あこがれとは裏腹に、初心者俺にとっちゃ精神がいつおかしくなっても不思議じゃない。しばらく気晴らしがしたいよ」

「飲みにも行く？」

いいねといって近くの居酒屋に足を運んだ。アルコールが入ると思い出話で花が咲き、事件のことはすっかり忘れることができた。五時間程飲んで、二人の顔は真っ赤になり千鳥足であつたが、気分は陽気だ。突然義高の携帯が鳴った。着信は知らない番号からだ。

「もしもし」

「私だけどき、直ぐにこっち来てよ」

「うん、って誰だっけ？」

素っ頓狂な質問をした義高は声で判別できなかった。菅野は女からかとニヤニヤしながら声をかけた。

「もう忘れたの、ケンジの彼女ユキ子よ」

「ああ、どうも。何で番号しっているんだっけ？」

「どうでもいいでしょ。それより今から探偵事務所に来て」

呼び出しを受けると義高と菅野は探偵事務所に向かった。

ケンジ、亜紀、ユキ子、後知らない茶髪で、ホストが私服を着ているような男が座っていた。話の様子から、ホスト風の男は村上光次という名前で十九歳、ここに来て間もない状態だ。

「二人とも酒くさ。かなり飲んでいたでしょ？」

ユキ子の顔には嫌悪感が漂ってはいたが、菅野は笑顔を絶やさな
い。

「そんなことないよユキ子ちゃん。今度どこか行こう？」

「はあ？ 行くわけないでしょ。酔っ払った勢いで誘わないでよ。
だから、いつまで経っても彼女ができない可哀そうな二人なんだよ」

義高はモテない男にカウントされていたことで腹が立ったが、口げんかで勝てそうになかったので反論はしない。

「だから、マジ知らないんすよ。亮とは結構遊んでいるけど、その日はガチでナンパしていたし、俺は別のダチと遊んでいたし。警察にも何回も答えたんすけど」

中目黒で発生した撲殺事件の尋問をしているようだ。あの事件は同一犯ということで解決し、なぜまだ聞き込みが必要なのか義高には理解できなかった。

「調べればわかることだが、山口亮の親子関係についてはどうだ？」

「そうっすね。俺にしか言ってなかったらしいんすけど。親父は外資系のトップらしいっすよ。亮もあの性格だから、エリートの子と合わなくて、家出状態であのアパートに住んだらしいっす。俺には単純に遊びまくりたかっただけなんじゃないかなと思ってたんすけど、違う面もあるということっすかね」

光次は髪の毛をねじりながら天井を見上げて思い出を語った。

「二人とも水飲んで酔い覚ましなさい」

コップに入った水を亜紀が運んできた。一気にのみ干すと体の火照りが急速に冷めて行く。

「男二人で飲んでいるなんて悲しいね」

「亜紀さんまでそんなことをいうなんて」

菅野は完全にテンションが下がっていた。酔った頭でダブルデートを想像したが、要所で貶されて自身喪失するのが落ちになるのが明確に見えた。

「俺はこの事件が解決したとは思っていない。まだ裏に犯人がいると考えている。お前は事件解決の知らせを受けてから詳細な取り調べを受ける前に釈放されただろう」

やはり義高の思っていた違和感とケンジの考えていることは一致していた。なぜだか安心した。

「そんなことないっすよ。亮は死んでしまうは、海に行く約束もドタキャンされてしまうは、俺のことを犯人として疑うは、やっとな放された時は超疲れてたし」

光次はそういうとダルそうに上半身をソファの背もたれに預けた。それよりも亜紀とユキ子の方に視線を向けてはほほ笑んだ。その旅に二人は目を逸らした。意外と亜紀とユキ子は堅い性格なのかもしれない。

「協力しないと、今度はお前が狙われるぞ」

低い声で迫ったケンジにいい加減な態度だった光次は改まった。

「しょうがないな。何で俺が今回の撲殺事件だけは大崎の犯行ではないと考えているかを教えるか」

そういうと、ケンジは煙草に火を付け、光次にも一本渡した。ありがとうございますという礼儀正しい言葉を発した光次をみて、義

高は吹き出しそうになった。以前ケンジは、自分から発する覇気の強さに対して修羅場に出くわした場数の多さが違うんだよと言っていたが、それはどんな人だろうと感じ取れるオーラのようなものということだ。

「まず、被害者の二人である山口亮と直美から撲殺の後と麻薬を摂取している痕跡が発見された。二人はセックスをしていたことから、より高い快楽を得るために麻薬を摂取したと言えば話はわかるのだが、実際はモルヒネだった。モルヒネは鎮痛、鎮静剤という病院で用いられている。これから盛り上がるであろう行為に及ぶ前に、自分から率先して摂取するのは考えづらい。とすると、外部の人間が意図的に二人へ摂取させるように仕向けたと考えた方が自然になる」

「そ、それで亮と仲よかった俺のことを疑っているんすか？」

「いや、お前の周りに薬物の売買を行っているような人間がいるかということだ」

「それは前にも言いましたけど居ないっすよ。ヤクならそこら辺の大学生でやっている奴はいるでしょうけど、俺は噂でしか知らないし、そういう知り合いもないっすから」

「一応信じよう。では、山口亮の知り合いで勝手に部屋へあがり込めるようなやつはいるか？」

「たぶんいないのでは。さすがに勝手に人んち入って使うことはないっすよ。怪しいじゃないっすか。もしやるとしても連絡ぐらいは入れるだろうし、でも亮からあいつがいつも勝手に部屋に入るといふような話も聞かなかったし」

「常識は忘れていないんだな。お前のようなタイプが一番やりそうなことだと思っていたんだが」

勘弁してくださいよといって頭を垂れた。亜紀とユキ子はクスクスと笑っている。

「お前たちのような性格でモルヒネをやるとも考えにくいか。とすると」

ケンジは腕を組み考え込んだ。大崎が二人の帰ってくる前に麻薬を投与するよう仕向けたという発想はないのだろうか。

携帯電話を取り出すと、誰かにコールをかけた。相手は巡礼という警官だ。

「調査は続行しているだろうな？ ああ」

短い間ケンジと巡礼のやりとりが続いた。突然ケンジが声を荒げた。

「被害者の飲んでいたビール缶の中からモルヒネと思われる成分が検出された。それは知っている。で、ビール缶にどうやってモルヒネを投入したかもわかったか？」

探偵事務所の空気は張りつめた。ケンジは言葉数が減ったかと思えば巡礼とのやり取りを完了し、電話を切った。

「光次、もう帰っていいよ」

「えっ、あ、はいもういいんすか」

怪訝そうな顔をした光次はあっという間に立ち去った。先ほどの電話で疑いがすべて晴れたのだろうか。

33. ヤク中の軽薄な自白

「ねえケンジ、もう解決したの？」

亜紀は興味津々だ。

「ケンジの担当している事件だもの。そう甘くないでしょ」

ユキ子はそう言いつつ、ケンジの返答を待った。

「いや、まだだ。どうやらビール缶の下側からモルヒネを投入し、巧妙に溶接していたようだ。これで光次の交友関係から行われた犯行ではないと推理できる」

「なんでだっけ？」

亜紀は理解していない。

「巧妙だからだよ。専門家が調査して初めてわかったことであり、一見すると、穴を明けて何かを投入し、またアルミで補正していることなどわからない程に。それを考えると、缶製造者あるいはそれなりの知識と道具があれば成り立たない犯行になる。加えて補正した成分が丸つきり一緒だとすれば限られた人間にしかできない」

「でも完全に犯人が光次の交友関連者でないとは言いきれないんじゃないの。あの年で働いている人一杯いるし」

「交友関係はすべて調査済みだ。雑に加工していれば話は別だったが、アルミ管を巧妙に加工できるような人はいない。麻薬に対して

は完全に疑いははれていないのだがな」

ケンジはそういうと煙草に火をつけ、根本に電話をいれ、ビール缶の細工方法と大崎へいくつかの質問をするように依頼した。

「でもビールの味に変化はないんでしょうかね？ 穴を開けてしまつては、炭酸もぬけてしまうでしょうし」

菅野は調子を取り戻して聞いた。義高も同じことが気になった。

「味は変わるだろうが、そんなに気にならない程度だろう。被害者二人は部屋に着く前からかなりの量アルコールを摂取していたみたいだし、警戒心が薄れていただろう。同じく炭酸もモルヒネを投与するために空けた穴は注射の針程度であつたから、加工する前の準備段階で例えばテープのようなものでふさいでおけば問題ないと考えられる」

「なるほど、そういうことですか。にしても、自供した大崎が犯人ではないと言い切れるのはどのような根拠なんですか？」

今日の菅野は義高が知りたかつたことすべてを代弁してくれるので頼もしいとさえ思った。

「それは根本からの回答が来た後だ。お前たち二人を呼んだ事から話をしよう」

すっかり忘れていた義高と菅野であつた。事件の真相が早く知リたかつたが我慢した。

「例の高橋昇の調査は進んでいるのか？」

「い、いえあれから進展していません」

ケンジはため息を付いた。実際のところ、義高の中でも探偵事務所にアルバイトをするようになってから他の事件に行くわすことによって昇の他殺説を実証する執着心が日ごとに薄れていった。

「やる気はあるのか？ 俺が何度か高橋家に聞き込みを行った結果、何かを隠していることだけはわかったぞ。健太さんも含めてだ」

「健太さんですか？」

人の良い健太さんまでもが疑わしいということは、さすがの義高も感じていなかったことだ。自殺説を疑っている健太さんだけに、以前あった時、嘘や何かを隠しているといった態度は全くと判断していた。

「期待はしていなかったからいいか」

投げやりに言うケンジの顔が曇っていた。恐らく二人でのアルバイト探偵の調査結果と仕事に対する熱意を見て落胆したのだろう。

「言わせてもらいますが、これまでの調べから、昇は自殺の要因が高い、いや自殺と断定しますよ。義高の疑いも根拠のないことから始まっていますし、俺たちは何も動いていなかったわけではなく、もう疑う余地もないと判断した結果になります」

人の心を読む持つ力をいつまでも言えない自分が悲しかった。

「無能なお前たちに、俺の考えていることの一部を説明してやろう。」

まず、昇の死体は明確な解剖もされずに睡眠薬の多量摂取による自殺であると判断したことは警察の失敗だということだ。他殺はなにも外傷がないからということと否定はできないということだ。毒薬でも飲ませれば殺せてしまうのだから。ただ、毒薬による症状も遺体からは発見されなかった」

「ならば、なおさら自殺という線が強くなるのではありませんか」

菅野が息んでさういふと、ケンジの携帯電話が鳴った。

十分ほどのやり取りを待った。亜紀とユキ子は気が付くとビジュアル系バンドのDVDを観ている。

「話を戻そう。山口亮と直美の撲殺が大崎ではないという件だが、大崎はヤク中だった」

義高と菅野は驚かなかった。あれだけの殺人を犯す人間がまともな精神であるはずかない。

「初めての殺人を犯す前から突然万能感が芽生え、幻覚が見えるようになり、人を殺すことでどんな快感よりも高い絶頂になるという変態的な話だが、もちろん依存するようになり、買人をネットで検索するようになり、闇サイトから定期的に購入するようになった」

「ありがちな話ですね。危ないものもお金さえあればすぐに手に入る状況になっていますから」

菅野は悟っているようだ。義高は麻薬が犯罪であるということとは知っていたものの、そのようなアンダーグラウンドサイトが平然と運営できているという事実は知らない。

「そこまではどうでもいい話だがな」

「それ以上の話があるんですか？」

「ああ、大崎が初めての万能感と幻覚をみた時は、自分から麻薬を摂取していない時だった」

「つまり知らないうちに麻薬をやっていた」

「そうだ。躁病という精神的な病があるが、それを遥かに超越した快樂と、突発的な幻覚は麻薬によって齎されること以外考えられない。安原辰巳が殺害された現場に血で書いた文字を覚えているな義高？」

「は、はい、確かSBでしたね」

「そうだ。大崎が安原辰巳を殺害した際に自分で書いていた。シャブをローマ字にしてイニシャルを書いていた」

「なんの為なのでしょう？」

「大崎は現場の写真を見せて漸く思い出した。殺人を犯すには細心の注意を払っていたにも関わらず、自分から警察に挑戦的な証拠を残すようになり、捕まれば、そのことを忘れていた始末。あきらかに麻薬で精神破壊と記憶力の低下が始まっていた。だが薬中となった大崎は際限なく麻薬をやるようになった」

「ではすべての犯罪を、麻薬ほしきに誰かから依頼されていたということはないですか？」

「ないな。ヤク中の状態でも殺しが快楽になることは一貫して肯定していた。俺達に犯行予告を送ったことに関しても断固として否定していた以上に切実であったこともあり、私利私欲で動いていたと断定できる」

「犯行予告に関しては、大崎の行動を完全に把握している人がいるということはどう考えていますか？」

「ヤク中であれば、自分にしかわからないように行動していたとしても、実は他人に筒抜けとなるケースもありうるがな。本人はその日の衝動で桜木町の公園に行くと決めたことも断言しているから、これはまだなんとも言えない」

「では、大崎が撲殺を行っていない証拠はどこにあるのでしょうか？」

「今話した通りだ。巧妙な手口を、特に幻覚性の強いヘロインをやりながらビール缶の加工など出来るわけがない。証拠に根本からの情報だと、大崎はビール缶の加工方法どころか、ビール缶の成分すら知らなかったこと、手に入れた麻薬はすべて自分に使っていたことから、ビール缶にモルヒネを投入するような犯行はできるはずがないということが立証できる。最後に大崎へ麻薬をやるから、本当のことを言え、中目黒の撲殺をやったのは本当にお前なのかと問い詰めたところ、撲殺をあっさり否定した。顔は覚えていないものの、誰かに脅迫されたことまで吐いた」

義高は相当ほしかったんですねと言った。

「制御が効かないぐらい依存していたんだろうな」

「誰かはわかっていないのですか？」

「ああ、大崎も観たことがないらしい。だが、俺らが知っている人物の特徴に似ている。人脈もあり、経済力もある。さっきの話から麻薬ルートに関与できる環境にもある人物」

「それは誰なのですか？」

「それはこれから調査する」

誰かに依頼されたこと、嘘まで付いて自分の犯行であることを認め、最終的には麻薬ほしさに真実を語る。冷静になれば警察署で麻薬を与えられることなど皆無なのはわかるはずなのに、大崎という人間は常識さえ判断できないぐらいに病んでしまっている。義高はかわいそうとさえ思った。最初のきっかけも結末もすべて誰かに操られていた悲劇の物語だ。警察も考えを改め犯人逮捕に全力で取りかかっているらしい。

「わかりました。納得しました」

「昇の事件に関してはまた今度にしよう。ただ、中目黒の撲殺、俺に対する挑戦状、大崎が麻薬を始めたきっかけ、そして昇の他殺説はすべて一本の線で繋がっている俺の推理は明確になってきている」

「昇の他殺まで一緒ですか」

義高は驚きを隠せなかったが、ケンジはあくびをすると、いつの間にか亜紀とユキ子が眠りにについている寝室に入って行った。

34. ご相談

23

黒幕は今でも次の獲物を刈る為に、巧妙な計画を立てているのだろうか。また他者を使って自分の手を汚さずに計画を遂行するのだろうか。昇が死んだのもすべては黒幕が仕組んだ計画だとすると、どのような動機で犯罪を繰り返すのか？ 大崎のように人を殺すことで快感を得ているのであれば、際限なく事件は起き続ける可能性が高い。事件が深まるばかりで、混乱した状況を早く解決されてほしいと思っているにも関わらず、義高は、ケンジの役に立つまで事件は解決しないでほしいというわがままな葛藤があった。それは異性に恋をした感情とは別のケンジに対する好意である。尊敬する人に認めてほしい。無心である義高は亜紀の番号にコールした。今日は探偵事務所も休暇である。留守番電話サービスに繋がる直前で亜紀が出た。

「もしもし」

「義高君が電話してくるなんて珍しくない？」

「そうだね。でもなかなか出ないから今度にしようかと思ったよ」

「あれ、タメ語で話すのはじめてなんじゃない。てか、すぐに出ないのは常識よ」

「今暇かな？」

「暇だけどうしたの？」

「ちょっと相談したいことがあるんだ。探偵事務所じゃ話づらいから外出できる？」

亜紀は間を空けた。

「もしかして告白？」

「ちがうよ、恋愛相談でもないんだけどね」

「なーんだ」

なぜ残念がるか突っ込んで聞いてみる根気はなかった。

「じゃあ、赤レンガの前で待ち合わせね」

デートの約束など久し振りで、義高は緊張し、手には大量の汗をかいていた。好きな女の子でもないのに緊張してしまう性格を早くなおしたいなと思っていた。

赤レンガの前で待っていると、時間通りにタクシーで亜紀は到着した。実は誠実な性格なのかもしれない。ボディラインにぴったりのTシャツにホットパンツというファッションだ。

「おまたせ」

亜紀の明るい声と笑顔を見ると、本当に恋人同士が待ち合わせしたと錯覚する程だ。

「ごめん、急で」

「丁度暇だったからいいよ」

言葉を交わすと、オープンカフェでコーヒーを頼んだ。平日の昼下がりだけあって人気がない。

「海がきれい。ここに来ると日本で感じがしないんだよね」

眩しい笑顔を振りまく亜紀に女の子としての演技はない。

「確かにいい景色だよ」

コーヒーを啜ると、

「相談なんだけど」

急に畏まった義高を見て亜紀も聞く体制になった。

「ケンジさんのこと、もう少し知りたくてね。ぼく、探偵のアルバイトとして半月がたったけど、何もしらなくてさ。ケンジさんも忙しい人だし、自分から過去の話とかしないし」

「義高君でそっち系？　確かにケンジはかっこいいけど」

「ちがうから」

くい気味で義高が反論すると、亜紀はだよねと言って笑った。

「私もあまり知らないの。ケンジはあの探偵事務所を二十歳の時始めたらしいわ」

「二十歳であれば、十五年前ということか」

自分の年齢と同じ時期に独立で事務所を立ち上げて、経営をしていたのだ。義高は大学でのんびりと、将来の夢もなく生きている日常が恥ずかしくなった。

「そうね。私は五年前にアシスタントとして入ったんだけど、今のように重い事件ばかりを扱ってはいなかった」

「亜紀さんはどうしてケンジさんと働こうと思ったの？」

「亜紀でいいよ。私は当時付き合っていた彼とうまくいってなくて、原因は浮気と私の貯金を盗むといった、ありきたりな話なんだけどね。弱かった私は口論したけど、まだ彼が好きで、嫌われないように証拠までは突き止められなかった。でもね、いつかはかわらないといけないって思ったんだ」

そう言うと、亜紀は微笑んだ。

「それで探偵事務所に」

「うん。実際はケンジにすべて解決してもらったんだけどね。その後、彼と別れてから吹っ切れた」

「そうなんだ」

もしかしたら、自分が突拍子もない理由で美辞麗句探偵事務所にアルバイトとして働かせてもらえるようになったのは、亜紀のおかげでかもしれない。弱者に自分の経験を重ねて同情していたとして

も義高は悪い気はしなかった。

「まだ私も私情が入ってしまったて、事件解決には役に立たない方が多いんだけどね」

「そうかな。大崎の逮捕現場に、おとりで乗り込んだのは相当な勇氣がないとできないよ」

「ケンジのおかげかな。横にいてくれなかったら、私一人でなんて絶対できないもの」

コーヒーを飲みほした亜紀は追加注文を頼んだ。

「ねえ、義高君で彼女とかいないの？」

興味津々な顔で質問されると、義高は戸惑った。

「君はつけないでいいよ」

亜紀は頷いた。次の言葉を待っていた。

「いないよ。菅野といつも一緒にいるからなんとなくはわかっていたでしょ？」

「ふーん。花の二十歳の大学生なのに勿体ないな」

恋人がいないと聞いてがっかりした態度を見せられると、義高はなぜだか悲しかった。

「周りが言うように、そんないいものじゃない」

「わかってないな。時間がたって初めて気付くってこと多いけどさ」

妙に老成した言葉を聞くと、苦勞しているなと思った。同年代でも、早々に結婚し社会人となって働いている人と、大学生で遊びに夢中になっている人と比較し、雲泥の差を感じることがある。亜紀の年齢を聞きたいという衝動に駆られていた。

追加のコーヒーが運ばれてきた。自家製で入れているので、注文から出てくるまで少々時間がかかる。

「義高には、好きな子が出来たとしたら、その子に溺れるまでいいほしいな」

「もしかして、ぼくの恋話聞きたいから？」

「聞きたい聞きたい」

苦手分野の話を振られると、二年前の半年だけ付き合った女の子との話をした。年上の女性のアドバイスは的確で、今は未練を断ち切っていたのに、あの時こうしておけばよかったのではと後悔するほどだ。同級性の男が、女と比較して何に対しても子供だと言われる所以は、恋愛に対しても言えることである。亜紀のように男に不自由しない外見をしている人でもそれは変わらない。

あまり掘り下げられるとイメージが悪くなりそうなので、義高は話題を変えようとした。

「ケンジさんが探偵をやろうとしたきっかけって何だろう？」

「私も聞いたことないな。見た目からすれば、人気ホストかモデルをやっているても可笑しくないし、あっ、モデルは一時期アルバイトでやっていたって言っていた。お金がきつかったからとも言ってたけど、さりげない自慢かもね」

「モデルか。お似合いだよ。本業にはしなかったのかな？」

「性格的に、組織内で協調するのが厭だったんでしょ。探偵も昔から年上に平気でタメ語を使ってたし」

「ぼくは社会にでていないからあんまりわからないんだけど、言葉使いにしても結構厳しいからね」

「実力が認められてからそうだったわけでもないから、最初は人間関係で苦労はしたんじゃないかしら」

義高のしていたアルバイトはサービス業だったから、女の子が正社員にタメ語を使っているても文句は言われていなかったが、男のアルバイトは必ず年上には敬語を使っていた。

「ケンジにも思い出したくない過去はあると思うよ。うまく言えないけど、接していてそう感じる」

「もてるのに硬派な感じもするしね」

二人はケンジの実力を認めているが故に、あの時、こんなキザなセリフを言ったとか、当たり前のことを言葉にするだとかの話で盛り上がった。結局は、どうでもよい相手は話題にものぼらないのだ。

「ぼくもケンジさんの役に立ちたい気持ちがある。アルバイトこれ

からがんばります」

「生意気ね。新人は与えられたことをこなしていればいいの」

気持ちが楽になった。

35. 解決前夜

24

捜査は滞っていた。八月に入っても、義高と菅野コンビは昇の他殺を立証する糸口さえ見つけられず、唯一協力してくれそうな高橋健太も出張先に戻っていった。探偵事務所に顔を出すと、ケンジと亜紀は留守にしていることが多かったし、電話対応や事務仕事をたどどしくこなした。菅野は小栗虫太郎や浜尾四郎等の推理小説を、ケンジに興味を持ってもらいたいと、さりげなく探偵事務所に置いて行った。『黒死館殺人事件』というタイトルであり、ペダントリックなミステリーを選んだらしいが、義高には少々内容が難しかった。

自分がなぜ昇の自殺説を疑い続けているかを、他の人間がいない状態ですべてケンジに話していた。誰も信じないだろうという落胆はあったが、ケンジの反応は意外だった。

「信じがたい話だが、お前が嘘を言っている様子でもないな」

「この場で信じてもらえるとは思っていませんが、嘘偽りない事実なんです」

それ以上言葉を発することはなかった。義高は黙礼をすると、美辞麗句探偵事務所を後にした。

強い意識もなく高橋昇の墓に足を運んでいた。

山の斜面に設置された墓地、彼の石碑にはお供えものが並んでいた。

達筆な字で書かれている記載内容から、先祖と一緒に御骨が収められている状態であると見てとれる。

「どんな気持ちなのかな……」

ふと呟いた。

亜紀に話した通り、二十歳が必ずしも輝いている時期ではないという考え方は義高のなかで変わっていなかった。でも、そうやって捻くれた態度を取れるのは生きているからであって、自分の思っている他殺説が本当だとすれば、無念だったはずであると考えた。

辺りはすっかり暗くなっていた。義高は其処を動こうとせず、只線香の匂いと近隣の民家から風鈴の音に耳を澄ませていた。

シャリン、シャリン

それから五時間後、日を跨ぐ時間だった。

ケンジから珍しく熱を帯びた声で呼び出され、菅野と一緒に探偵事務所へ駆けつけた。後から来た亜紀に急な依頼をしていた。

「これから今までの事件解決を行うから、俺が今から言う人達を探偵事務所に集めるんだ。高橋文子、武本、以上だ。根元は今からここに向っている。高橋健太も一時帰国してもらい、もう直ぐ着くころだ」

二時間後、『美辞麗句探偵事務所』に集まったのは、ケンジの依頼で呼んだ高橋文子、健太、武本の三人。元々事務所にいた亜紀とユキ子、一緒に来た菅野、そして義高の八人だった。これだけの人数でも事務所内では結構窮屈になってしまう。

「遅い時間に集まっていたきまして、ありがとうございます。深夜ではなく、朝でもよかったのでは？」と思われている方もいらっしゃると思いますが、時間がありません。それは、今ここにいる方の中に犯人がいるからであり、拘束することで新たな被害の拡大が防げます。今回の犯人は大崎のように杜撰ではありません。故に、例えば数時間であっても野放しにはできないのです」

静寂に包まれた事務所、誰もがしゃべろうともしない。今ここにいる方の中に犯人がいるという言葉に翻弄され、ケンジを除いた全員の視点が定まっていなかった。

「早速今回の事件解決編を始めよう」

一同が、一斉にケンジの方をみた。

36. 事件解決編一話

「すべての事件は同一犯人であることを立証しよう」

そう言ったケンジは眼付きに変化があった。一同の反応を待たずして続けた。

「解決の鍵となるのは、昇君の自殺否定説から始まる。だが、なんの説明もなくこれを口にしたのではここにいる誰一人として納得しないだろうから、順に説明していくことにする。まず、俺の知り合いである黒田検死官が死体の状態を観察して行う自他殺の選別方法十項目を挙げる」

ケンジは用意されていたホワイトボードを用いて、ものすごい速さで書き始めた。

1…死亡場所―自殺者はなるべく苦痛のないように、しかも確実に、また死後体裁が悪くないようにという気持ちを持つ場合が多いので、人通りの多い所等は選ばない。

2…死亡日―近親者の命日に関係ある場合がある。

3…死化粧等―下着を着替えたりして身なりを整え、生前大事にしていた装身具を身につけて死に化粧をしたりすることもある。

4…着衣の状況―着衣は損傷やほころびがなく、整えて死んでいるのが普通である。したがって、裸の自殺は、とくに女性ではまれである。

5…現場の整頓状態―現場は履物など身の回り品を整頓している場合が普通で、時には生前愛玩していたものを枕元におく場合もある。

6…最後の拝礼等―仏壇に線香、花水などを供え、最後の拝礼をした形跡の認められることがある。また親しい者にそれとなく話すことがある。

7…施錠―施錠できる部屋においての自殺では施錠していることが多い。

8…遺書―あることが多い。その場合、遺書の用紙の残りがあったり、死者の指紋が印章され、筆跡は本人のものである。また日記に書くこともある。

9…凶器―凶器類の使用は一種類が普通で、自家のものを使う。また、凶器は握っているか、死者の付近にあるのが普通。ただし、まれには受傷後の行動能力によって思わぬ所にあることがある。

10…創傷の位置―頸部、心臓部、腹部、手首が多く、拳銃では頭部のこともある。衣類をまとっている部位では衣類の上から刺したり、切ったりはめつたにしない。

「以上だ。これらを面倒だが現実起こったことと一つ一つ照らし合わせていこう。」

1…死亡場所、ここにいる皆が一番よく知っている通り、被害者は自分部屋で死んでいる。自殺をする際、苦痛を避けるため、大量の睡眠薬を使用した痕跡もある」

誰一人異論はない。

「2..死亡日として、被害者は七月十日に死んだ。調べによると近親者の命日には当たらないそうだ。これは後から入った情報だが、高橋さんの息子健太君から、七月十日は昇君が可愛がっていた猫の命日と同じであると聞いた。ここにいる皆の内何人かは近親者の命日だと言いがたいという異論もあるだろうが、彼にとってはかけがえのない存在だったらしい」

誰一人異論はない。但し、初めて知った人物もいる。

「3..死化粧等、彼は男であり、女装趣味やビジュアル系バンドに属していたわけでもないところから、死化粧はしていなくても当然不自然ではない。また、身なりは普段の生活のままだった。残念ながら大事にしていた装身具だったかは確認できていないが、この項目によって他殺説が浮上することは難しい」

誰一人異論はない。

「4..着衣の状況は損傷やほころびがなく裸での自殺でもない。言うまでもない」

誰一人異論はない。

「5..現場の整頓状態、高橋さんの証言から、彼は整頓に関しては徹底していて、部屋はいつも綺麗にしていた。これは死んだ日も例外はない。生前愛玩していたものは彼の部屋にたくさんあった」

誰一人異論はない。但し、初めて知った人物もいる。

「6..最後の拝礼等、彼は仏教や宗教の類に関心は持っていなかったためもあり、最後の拝礼をした形跡はない。だが親しい者、つま

りネット上の繋がりで自殺をほのめかすようなこと、友人の武石にもそれとなく話はしていた」

誰一人異論はない。

「7…施錠、何度も言うように、彼は彼以外用意に開けられない密室の中で死んでいる」

誰一人異論はない。

「8…遺書、提示していただいた遺書が何よりの証拠だ。死者の指紋と筆跡ではないがパソコンで印刷したのは彼の死亡推定時刻の三時間から四時間前に印刷され、パソコンから履歴が確認されている」

誰一人異論はない。但し、初めて知った人物もいた。

「9…凶器の使用は確認されていない。睡眠薬によるものとわかっているのでこの項目はあまり関係がない」

誰一人異論はない。

「10…は9…とリンクした項目なので、同じく関係はない」

誰一人異論はない。但し、ケンジの意図としているものは誰一人理解していなかった。

「あの……ケンジさんのいう昇君の自殺否定説とはまったく逆の方向にいているような気がするんですが」

義高は質問した。皆頷いていた。

「もちろんそうするよう仕向けただけのことだ。今までの話が、警察も自殺という判断をくだした要因になる」

「では、ケンジさんの立証は否定されますよね？」

質問が返ってきたのではなく、上乘せされた。

「そうです。私は昇の親ですよ。昇の自殺現場を再現されるのは私にとって不快です。もう少し、場をわきまえて頂きたいですわ」

ケンジと接するだけで嬉しそうだった文子もさすがに苛立っていた。その姿を見て、油を注いだことに関して後悔していた。

「俺が言いたいのはこれからだ。ここにいる皆は、義高という例外を除いて、現時点では限りなく百パーセントに近い確率で昇君が自殺したと信じていると思う。だが、それでは抽象的主観に過ぎない」

「抽象的主観？　どういうことですか？」

思わず健太が加わってきた。

「昇君は自分で自分を死に追いやったのは否定しない。今更大量の睡眠薬を誰かに飲まされたとかいうくだらない証言はしないから安心してくれ。問題なのは彼を自殺に追いやった周りの環境にある」

「周りの環境？」

文子には鬼気迫るものがあつた。お嬢様のような口調ががさつなおばさんに変化しつつある。

「環境といっても私達は既に証言していた通り、その当時は主人と仙台にいる親戚の所に行っていて、昇の部屋には誰もいなかったはずですが」

かなりの皮肉を込めている口調だった。

「それならばくと菅野も直接聞いています」

義高は無意識の内に文子をかばっていた。

「違う。ここにいる関係者のアリバイの事を言っているのではなく、昇君が自殺をするまでのプロセスを言っているんだ」

「すると、昇君がどのようにして自殺まで追い込まれたかという事ですすね？」

菅野は興味深々だった。彼の性格から、場の空気も読まずに微笑みだすのではないかと心配になっていた。

「まさにその通り。昇君は元々一人で空想に浸っているような時があった。それとは別途で夜中に起きだし、急に意味もなく歩き出すということをしていたらしい。そうですね高橋文子さん？」

聞かれて下を向いた文子は手を組んでから喋り出した。

「はい、昇はそういうことがたまにあって私も気が付いていましたそれで、精神状態を医師に見てもらったこともあります」

「彼が数回通院していた精神病院の医師が言うには、彼は『夢遊病』であつたらしい。知っていましたか？」

「もちろん。昇のことですから……」

「子供の病状について語って頂きありがとうございます。ですがもう少し、耐えてください」

文子は黙って頷いた。

「ちょっと待ってよ。夢遊病？　なにかの病気なの？」

亜紀はそう尋ねると、ケンジは皮製パンツのポケットからなにやら紙を取り出した。

「これは昇君を担当していた医師川上から提供してもらった書類だ。夢遊病についての詳細が書いてある。読むぞ？」

ヨレヨレになっているものの、引き延ばすと結構な分厚さだった。普通の診断書のコピーではなかった。

「歯ぎしりや夜驚、夜尿などと同様に、睡眠時異常現象、パラソムニアの一つで、夢中遊行とか夢遊症ともいわれる。夜中に家の中や路上を徘徊し、ときには裸で歩いたり、木に登ったりするが、また自分のベッドに戻る場合もある。両親や異性のベッドに入ることもある。翌朝はなにも覚えていないことが多い。持続は二〇〜三〇分ぐらい。夢のなかの行動のようだがレム睡眠や夢とは関係なく、ノンレム睡眠の第三段階ないし第四段階などの中程度睡眠、あるいは深睡眠で始まる。夢中遊行中はしだいに低振幅速波の第一段階の脳波パターンになる。神経症的な損傷があって、それに対する反応として起きる。夜尿を合併することが多く、素因を認めることがある。子どもや故郷を離れて寮生活をする青年男子に多い。男女比は四対

一、出現頻度は一〇六％とされる。治療としては、損藤を解決することが重要であるが、ベンゾジアゼピン系の抗不安剤を日中から投与し、就寝前に同系統の睡眠導入剤を投与することも有効である。ということらしい」

「ちょっとあたしには難しすぎるわ」

ユキ子の言うことは同感だった。義高も半分程度しか理解していなかった。

「理解したいなら、これから川上のところについて教えてもらって来い」

「今日のケンジは冷たい」

ユキ子は鳴き声になっていた。励ますものはいなかった。

「今は全部理解する必要はない。それより治療法である葛藤の解決に注目してほしい。川上は昇君を治療する際、どうしても薬ではなく精神的なところからアプローチをかけるという目的があったらしい」

「精神的なところからアプローチというと、カウンセリングということですか？」

今度は文子が興味を示していた。

「くわしい事情は聞いてないが、たぶん、薬だと治ったとしても再発する可能性があったのかもしれない。加えて副作用も考えていたんだと思う。まあ、それはいいとして、川上は昇君の持っている葛

藤を探った。最初はなかなか心を開かなかったので苦勞したらしいが、徐々に心を開き、そしてようやく彼から引き出すことが出来た」

「それで、昇君にはどんな葛藤があったの？」

先を急ぐかのように亜紀が聞いた。

「家庭、あるいは自分を取り巻く周りの環境からくるストレス。両親の期待に添えるよう良い大学に入学し、将来を期待される会社に入社する自分と、ここにいる昇君の友達だった奴なら知っているだろうが、すべてから逃げてしまいたいほどの自殺願望」

義高は今までの得た情報から納得していた。文子は家庭環境の話になると、決してそんなことはないとはないと弁明したが、高橋健太の証言のほうが真実であると信じていた。

「そして、川上は最終的に昇君が精神的にも一年前完治したという診断書も提示してくれた」

「完治していただって!？」

武本が大声を上げた。

37. 事件解決編二話

「そういう状態ではなかったと思いますよ。頻繁に会っていたわけではないのですが、会えばいつもネガティブであって、例の自殺サイトの話をよくしていたし、将来のことに關して前向きな話はしていなかった。むしろ日が立つにつれて呆然としたり、心ここにあらずといった状態を頻繁にみせるようになりましたし」

死人の陰口を言ってはいけない権利はないのだが、こうして武本という友達の口から家族を含めた周りの人に昇の欠点を水平展開されている場面を見ると、義高は嫌悪感を覚えた。陰口は皆の前で公表するものではないのだ。

「ああ、川上の手を離れてから昇君の本当の地獄が始まった」

「どういうことですか？」

健太が慌てて質問した。弟が知らない間に苦しい目にあっていた事実を知ればそうとうなショックを受けるのは当然だと義高は思った。それとは裏腹に、ケンジは鼻で笑っていた。

「遺書の内容を思い出して。違った世界を描写する記載があった。否世界を邪魔すると書いてあったことは覚えているよね？」

「はい、でもそれは夢遊病から発症する夢のことではないのですか？」

「いや、夢遊病と幻覚は同列にはできない。あれだけ鮮明に否世界を肯定する部分は、外的な要因から幻覚を見ているとしか考えられ

ない。それに先ほど言った通り、一年前昇君は精神病を克服し、川上から睡眠薬や精神安定剤の服用をしないように言われて、それから昇君からほしいとお願いされたこともなかった」

「では、外的要因で幻覚を見るといえるのはどう説明するのですか？」

「それは後ほど説明する。まず、文子さん」

ケンジは鬼気迫る勢いで文子に問いかけた。

「は、はい」

文子は顔が真っ青になっていた。

「死後、昇君の部屋には大量の睡眠薬を入れてあったであろう容器があった。昇君の自殺する一週間前、部屋に内緒で入った際、大量の睡眠薬がはいっていたことを発見し、警察に話をしましたね？」

「そうです」

「だが、昇君は少なくとも担当していた医師からは睡眠薬を手に入れていた事実はない。恐らく服用せずに保存しておいて、また時期がくると担当医師から睡眠薬の錠剤をもらっていたのだと思いますとも供述していたことから矛盾が生じますがどうでしょうか？」

「そ、それは」

蚊が鳴くような声で文子は答えた。

「そうになると、高橋さんの両親は睡眠薬を常備していたと健太さん

が言っていましたから、少なくとも昇君が内緒で盗んでいたとしても、致死量の睡眠薬がなくなっていればさすがに気がつくはず。つまり、文子さんは昇君の部屋に入った理由としては、掃除をしようとしたわけでもなく、大量の睡眠薬を発見して驚いたのでもなく、前にもまして異常な精神になってしまった昇君に大量の睡眠薬を与えるために、何気なく置いたということではありませんか？」

言葉に窮していた。文子の体が小刻みに震えていた。

間が空いた。怯え方が凶星であることを物語っていると認識したのは、集まったメンバーの半数以上だった。

「はい。言われた通りです……」

そういうと文子は瞳から涙を零し語り出した。

「担当医師からは完治したという知らせも聞きましたし、やっと正常に戻ってくれたと思っていました。でも束の間の幸せでした。前にも増して情緒不安定になり、独り言で誰かと話をしていたりして、近所の方から心配され、いずれは変な噂まで流れていたのです。孝造さんは昇の教育からとうの昔に匙を投げていましたし、私が相談すれば、出世の邪魔にならないよう昇をコントロールするよう言われていました。昇に話かければ怒鳴られ、精神病院には二度と行かないといったことも言いました。なぜそうなってしまったか原因はわかりませんが、私は夜中でも昇の部屋からの物音が気になってノイローゼになり、意を決して部屋に大量の睡眠薬とメモを残しました。内容は睡眠薬を置いておくから、眠れない時に飲んでといった内容でした」

「睡眠薬で良い効果は得られましたか？」

「はい。寝不足だと粗っぽくなる性質は父親譲りですので」

「話してもらい、ありがとうございます」

ケンジは優しい声でお礼を言うと、ダムの水を解放したように文子は泣き出し、嗚咽が含まれた。

「話通り昇君が自殺するまでのプロセスに文子さんが加担したのは事実ですが、きっかけを作った犯人は他にいることになる」

緊迫した空気のなか、昇の部屋でパソコンの履歴から自殺サイトのチャット内容について説明した。

「ネット上で昇君とやり取りをしていたハンドルネーム『ヒッキ』が本当に自殺したかは、個人情報保護法によりユーザからはわからない。ただ、粘り強く調査を行ったところ、サイト経営者からヒッキという人物が、どこからアクセスしているのかを教えてもらった。メールアドレスもだ。登録する時にメールアドレスを記載する項目があるのはわかるが、どこからアクセスしているかもわかってしまうなんて個人情報もへったくれもないよな」

武本と健太は必要以上にびっくりしていた。

「そんなことできないはずですよ。闇サイトは個人情報保護が完璧である安全があって皆書き込みをしているのですから」

武本は上気していた。

「簡単だったよ。顔を合わせれば直ぐに教えてくれた。むしろ、管

理者の本人が誰であるかを調べる方が何十倍も難航した」

「ハンドルネーム『ヒツキ』はいつたい誰だったのですか？」

菅野は目を輝かせていた。

「まず、どこからアクセスしていたかになるが」

心なしか、健太の呼吸が荒くなっていた。真相を知りたいのであれば当たり前だ。自分の弟の自殺に背中を押した人物が判明する状況に冷静でいられる人の方が珍しい。

「場所はシカゴシティーのある会社の一室」

「なんですって！」

声をあげたのは文子だ。

最終話…事件解決

「シカゴといえば健太の出張先……」

場が氷ついた。母親からの視線から目をそらした健太、誰も言葉を発しない状況が十秒程度続いた。

「……確かに出張先はシカゴだが、証拠がないじゃないか！」

「あるよ。昇君の調査とあれば快く調査に協力してくれた。Y株式会社
のシカゴ支店には各個人に個室が設けられていること。自殺サイトの管理人が教えてくれたメールアドレスに、健太が使用していたパソコンとまったく同じであったこと。もちろん俺が昇君の自殺に加担していたのが健太であることは話していない。会社に報告するのはあんた次第だからな。で、会社の関係者にも他言はしないでくれとお願いもしていた。健太が知らないとなると、俺のお願いはかなえてもらえているようだな」

ヒツキの正体が健太であるというのは、義高と菅野が探偵のアルバイト経験からしても、あまりにも現実離れしていた。昇の部屋でチャットのやりとりを一緒に見ていた時、ショックが隠しきれない様子は切実であり、嘘を付いているようにはどうしても見られなかった。今にして思えば、意図も簡単に昇とのやり取りに辿りついていたことにショックを受けていたとしか考えられない。

ネットの書き込みは、顔を合わせて話すよりも人の心を動かすといった類の話を聞いたことがある。ネットによる中傷、匿名を武器に利用者の本音が赤裸々に文字ベースで書かれることで、現実離れした説得力を与えるツールなのだ。特に相談相手が誰も居ない、コ

コミュニケーション能力が劣っている、精神が不安定で繊細な昇が同調し、アドバイスを送ってくれるヒツキに、ある種神を見たのかもしれない。そんな馬鹿など言えるのはネットに侵食していない世代や使っていない人間、樂觀的であったり、強靱な精神をもった人間に限定できる。反発できない人間は大小あるにせよ、影響されてしまうものだ。

「今ここですべてを吐くことは相当に辛いから言わなくてもいい。ただ、昇君が知らない間に完治していたと思っていた精神が崩壊し、気がつけば、川上に治療を施されていた時期を超える程精神が病んでしまった事実はすべてあなたの差し向けたきっかけにある」

きっかけとは何か？　ここに集まった殆どの人間が疑問視しているにも関わらず、ケンジが昇の他殺と中目黒の撲殺事件、大崎を操っている犯人がすべて同じと発言したことを知っている人物は薄々感付いている。健太だけは何か言おうと必至になっていた。

「俺から言わなくてもわかってるだろうが、健太は昇君に麻薬を投与して自殺までに追い込んだんだ」

それを聞いた文子は気が遠くなり、倒れ込みそうな瞬間菅野が体を支え、ソファの上に寝るような体制に施した。健太はこの状況で余裕を取り戻していた。

「そんなこと出来るわけじゃないか。二年前から出張しているのだよ。仮に一年前昇の精神病が完治していたとしても、二年間日本には戻ってはいない。仕事に夢中で一度も帰国していなかったのは、会社関係者に聞いてみるのもよし、航空業者に履歴を調査してもらうのもよし、結果は無駄骨になるのが落ちになるけどな」

満面の笑みの健太はケンジの回答を待った。

「あなたはヒツキという架空の人物を作り出しておいてなぜ余裕でいられるのかな。信じられないね」

「関係ない。第一、サイトの経営上、管理人がどの場所からアクセスしたのか解っていたとしても、昇が相手だということは私にはわからないんだよ」

「普通はね。管理者は骨のある人間であつたのならば昇君の他殺説を立証できなかった。だが、弱かった。威圧するだけでシカゴから発信された本人から金で調査依頼があり、最終的に昇君の使っているパソコンからアクセスしているという情報を得たと証言した。それだけではない。健太が二年間出張し、アリバイも完璧であり、昇君に麻薬を投与することは不可能と判断した。しかし、それは単独犯ならではの話。まさか高橋孝造さんまでもが共犯である事実は、最初俺も受け止め難かった」

「どういふことなのだろうか。昇の父親までもが加担していたのか。義高はここまで振じれた家族が存在すること自体が信じられないと思つた。」

「孝造さんまでも……でも昨日から家に戻っていないのですが」

文子は最後の力を振り絞って発した言葉のようだ。ここに孝造を呼んでいないのはケンジの意図的なものなのか。

「信じられませんね。親子が連携して子供を自殺に追いやり、事件性がないと警察に判断させる。恐らく文子さんは連携していたことまでは知らなかったんでしょね。孝造さんが、警察の手で昇君の

遺体を解剖しないよう嘘をこじ付け、文子さんはさして否定もせず
に終了した」

文子是否定しなかった。

「自分の子供に麻薬の反応が出たとなれば相当な社会的ダメージを
受ける。さらに自分の手で子供が知らないうちに麻薬を投与するよ
うに仕向けたのでは目もあてられない状態になるからね」

「ただ、孝造さんが加担していた事実は証拠としてあるの？」

亜紀が質問した。どうやらケンジの調査内容はここにいる誰もが
知らなかったことになる。

「文子さんが留守の間に、昨日家宅搜索を依頼し、残りの麻薬が見
つかった。孝造さんには、警察署に来てもらっている。彼は、自分
は服用していないと証言し、体内から反応はでなかった。その後、
問い詰めたところ、昇君が使用していた事実が判明し、麻薬が見つ
かったことで腹を括ったと見える。最後にはすべてを話してもらっ
たよ。元々は孝造さんが昇君の社会不適合性に落胆し、わが子なが
ら将来私の恥になるだろうと考えた。麻薬の流通ルートはこれから
調査することになるが、恐らく健太の海外生活で得た人脈にあたる
と考えている。しかし、麻薬で自殺にまで追いやる計画は、健太、
あなたが計画した犯行であることは知っている」

健太の体全体が小刻みに痙攣していた。

「それは……」

遺書を見られた時からケンジという探偵を恐れ初めていたのだろ

う。義高には健太が若くしてかなりの実力者であり、穏やかである性格が、昇の自殺を調査する状況になって協力していたのではなく、ケンジの動向を伺っていたとしか考えられないようになった。

「大崎を使って俺を殺させようとしたのもあなただ。あなたは大崎を拳銃で脅し、まんまとコントロールされている様を見届けてから桜木町の公園を立ち去ったと思われるが、あいにく大崎はヤク中だった。正常な判断ができないぐらいに蝕まれている大崎にあなたとの秘密を隠しとおせるわけがない。日本に帰国したのは昇君の自殺の真相を調べる理由ではなく、身の周りに調査している人間がいなか確かめに来たのだろ？ それに、大崎の言う、中目黒の犯罪を依頼された人物の特徴が健太であると俺は思った。写真を見せてみたらビンゴだった」

下を向いてしまった健太にケンジは容赦なく言葉を浴びせる。

「大崎への麻薬投与については孝造さん以外の闇サイトで知り合った人間に依頼した。ただ、大崎が殺人へのあこがれがあったことは、同じく闇サイトで知るようになる。後は大崎が麻薬によって、殺人へのあこがれから理性を取っ払い実行するまで待っていた。昔は日本兵が特攻するためにも使われていたらしいんだけど、よくこんなことしたもんだな。闇サイトで知り合った人間は大崎の行動を逐一、健太に報告し、俺の探偵事務所に犯行予告を出すのと同時に大崎を桜木町の公園で麻薬の取引を仕向けるようにした」

亜紀はあの時は生きた心地はしなかったよと子声で言うと、

「ピンポイントで私達に狙いを仕向けるようにしたのは、入口を立ち入り禁止としていたからなのね。犯行予告があって、入口もあれだったから、私超怖かったよ」

いまいち怖さが伝わらない、楽観的な喋り方だった。但しそれでは場の空気がなごむわけでもなかった。

「その通り。俺達が到着した時刻は十一時半頃、大崎は先に十一時頃到着し、獲物を待っていた。大崎が待っているころ、健太は公園の入口から俺達以外は入らないようにしていた警察は俺が現行犯逮捕するために付近を巡回しないように依頼はしていたが、俺がそうしなければ、警察がたまたま立ち入り禁止という看板を見つけて、大崎に逃げられていたかもしれない。ちょっと浅はかなんじゃないの？　そして、中目黒の男女撲殺事件。これは完全にあなたの犯行だった。手口が巧妙なうえ、犯罪動機を攫むのには苦勞したが、俺の推理はこうだ」

ケンジは煙草に火をつけると続けた。

「被害者の山口亮の父親山口進は大手外資系の社長だ。調べによると、あなたの会社のライバル会社に当たる。社長である山口進は息子の亮をあまり良く思っていなかったらしい。亮も親に反発しアパートを借りて一人暮らしを始めるようになった。あなたは山口進を直接狙い、ライバル会社に恐怖を与えることも考えたが、さすがに臆してしまい、息子をターゲットとした。思い通りになったんじゃないか。山口進には精神的ショックを与え、マスコミに取り上げられたことで会社の株価、定評等、極端に下がってしまった。それらを連続殺人と同列にしようとしていたのがあなたの計画だ」

「俺がその二人を一人でやれる分けないじゃないか。第一アルミ缶の加工……」

健太は浮気現場を目撃されたように狼狽した。

「おっと、俺はあなたへは撲殺事件について何も話はしていないはずだがな。大事な場面なのだからもっと冷静になろうよ」

根元まで吸ったタバコを灰皿に押し付けると、

「ビール缶の加工までしているということは、健太が少なくともこの事件に加担している事実になる。それに顔が広い健太はエビクのビール工場とも取引していて、直接穴の空いた、モルヒネが混入しているビールの入った缶を持って行った。担当者は怪訝に思っただけだよ。健太は信用されていたけれど、穴のあいてない新品と取り換えようとしても頑なに拒んだら当然だが、大事な取引先であるから理由も聞かずに加工するなんて、大した力をもっているんだな。その時、六本のビール缶を用意していて、加工に成功すると、それを飲み干し、味はかわらない、さすがですみたいなお世辞まで言っただけ居をしたそうじゃないか。そして施錠をしていなかった山口亮の部屋に侵入し、元々あったビールと交換した。痛みを麻痺させるモルヒネのおかげで、縄で撲殺する瞬間もほとんど声を上げずに絶命することができた。近所の人が誰も悲鳴のような声を聞いていなかったのは実に巧妙なトリックだったのだろう」

義高は思った。アルバイトで何気なく時間を無駄にしていた時に、ケンジはここまで調査を行い、証拠を掴んでいる事実には唖然とした。同じ人間なのになぜここまでの差が出てしまうのか。

「山口進も、ビール缶加工の担当者もみな健太の写真を見て知り合っている」と証言した。あなたは懸念に思われないように、事件で接触した大崎とビール缶加工の担当者には聞かれても誰にも自分のこと知っている話はするなとも言えなかった」

ここに集まった誰もが事件解決は完了したと思っていた。後は警察に身柄を引き渡すだけだ。

「俺の言いたいことは以上だ。何か言いたいことはあるか？」

皆をゆっくり見渡したケンジは、最後に健太と目が合う瞬間に目を閉じた。

「麻薬を知らない間に飲ました方法はどうなの？ そんなことされたら私どうなるのだろう」

震えながらユキ子は質問した。

「それは、俺よりも詳しい健太に話をしてもらおうか」

健太は反論できないままうずくまっていた顔を上げた。何か吹っ切れたようにさっぱりした表情だ。

「ケンジさん、煙草を一本くれないかな？」

ケンジは頷くと、煙草をわたし、火を付けてあげた。吐き出す煙がなくなるぐらい肺に吸い込むと、大きなため息で微量の煙を吐き出した。

「ここまでデテイルに調査されてしまったてはどうしょうもありませんね。まずは大崎になりますが、ケンジさんの言うとおり、シカゴシティーで入手した麻薬を闇サイトの人間に送り付け、大崎の住んでいるアパートに侵入してもらい、錠剤を飲みかけのワインに溶かしこんでもらいました。最初はあまりにも安価で犯行をしてくれるという話だったので、上手くいくのか疑問に思いましたが、過ぎ

てみれば私の思った以上の仕事を淡々とこなすので驚きさえ感じました。ただ、その人間は私も知らないのです、逮捕はできませんよ。むろん、知っていても、そこまで影に徹して動けるような人間はその道のプロであっても不思議ではありませんので、自己保身で言わないと思いますが。昇の時は簡単でしょう。家族にそっと飲まずだけですから、父でも容易にできたはずです」

「人の内部に秘めている衝動を麻薬によって倍増させ、躊躇う理性を崩してしまおうと考えたのはすごいと思う。が、多幸感は続かず、二人の症状を見てみると幻覚は二人にとって良い方向に作用していたみたいだが、倦怠感は想像を絶していたと思う」

「はい、大変だったでしょう。特に昇は長い間摂取していたからなおさらだ」

「そこまで考えられるのならなぜそのようなことをしたの？」

亜紀は泣き声だ。

「エゴだと思います。私は小さいころから昇を両親が持て余していたことも、昇が家族と上手くやっていないことも知っていました。精神病が完治しても父親にはもう愛されていないと感じた時、苦しそうな昇を見ていくのはあまりにも悲しく思い、自殺への計画を立ててしまったんです。ここまでくれば信じてくれとは言いませんが、本心です」

探偵事務所のドアが開くと根本と付添の警官が入ってきた。

高橋健太が根本達に連れて行かれる時に、ケンジは今までの会話をテープに吹き込んだものを手渡した。根本は場の空気から黙礼を

すると、小さな声でいつも調査協力ありがとうございますと言って立ち去った。

文子も一緒に着いていくと懇願したが、ケンジは警察から事情聴取する必要があると判断されるまでは自宅待機をしておいてほしいと言うと、大人しく引き下がった。

つまり、義高が高橋家に対して昇の自殺が嘘であることを読心したのは、文子が睡眠薬の容器で嘘を言っていた事実を読んだのではなく、孝造が健太に依頼し、自殺に見せかけた殺人を依頼していた事実に対して嘘を見破ったということだ。

ほっとしたケンジは義高と二人になっている間に言った。

「義高、俺が探偵事務所を立ち上げた時、初めて仕事を依頼された人物は京理久美子という名前だった」

「そ、そうでしたか。ぼくの母親です。もしかして、ぼくが心を読める話を信じてくれたのはそのおかげですか」

「さあな」

最終話：事件解決（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

第二段である『城の王』も掲載していますので、よろしかったらご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5064g/>

夢遊病

2010年11月9日05時36分発行